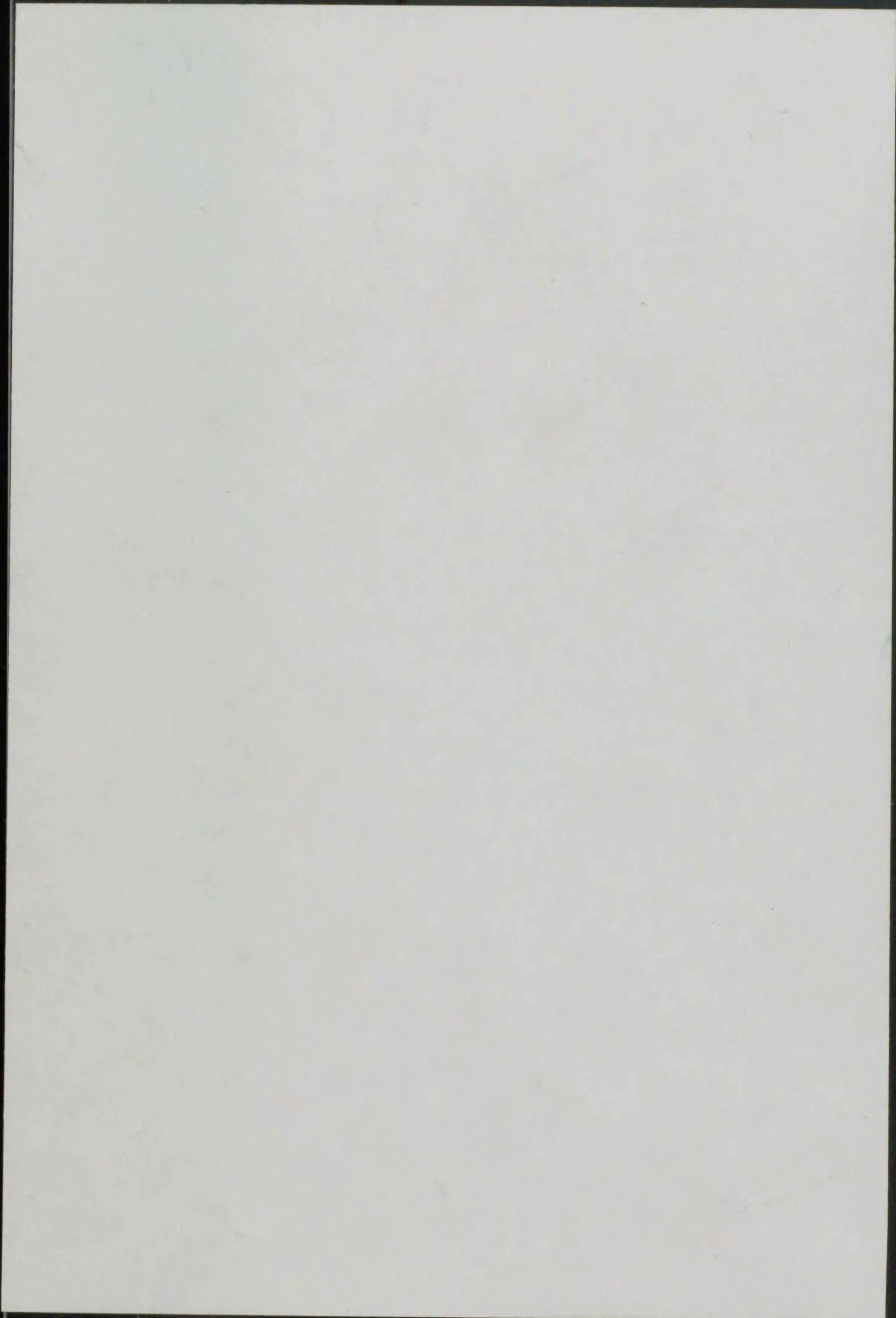


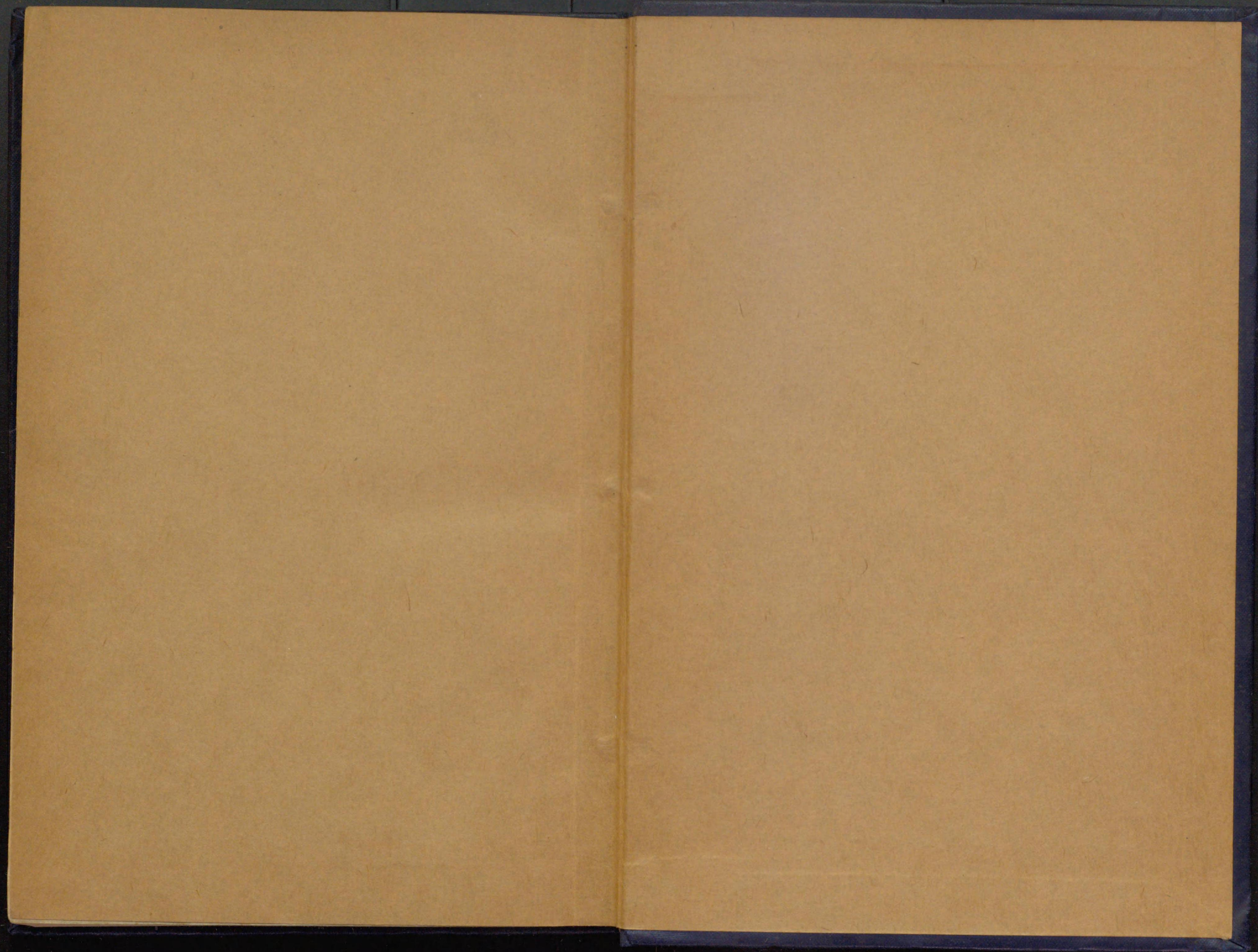
714
64

714-64



1200501585498





書聖の衆民

714
64

書ル工ムサ



著平軍室山 將中軍世救

山室軍平著

民衆の聖書サムエル前書

東京 救世軍出版及供給部



書中「舊新約聖書」本文の引用に就ては特に英
米聖書協會(Both the British & Foreign Bible Society
and the American Bible Society)の承認を得たり。

はしき

これ迄も毎度申上げた如く、「民衆の聖書」は、聖書があるがまゝに受取つて、各章からいづれも、數ヶ條の心靈的實際的の教訓を學ばんことを、目的とするものである。これは聖書の註釋でもなく、又講解といふべき程のものでもない。強ひて之と類似の書を求むれば、西洋に多くある「家庭の聖書」又は「家族の聖書」等の、少しく入念のものを見てよからうと思ふ。要するに多忙なる基督者が、信仰的に聖書を學ぶ上に、多少の手引とならんことを、期待するものに過ぎない。

曩に「民衆の聖書」ヨシユア記・士師記」を發行してより、今日に至る間に、私の身の上に若干の變動が生じた。すなはちその一年ばかり前から、病餘の身を救世軍顧問として、幾らか閑地に置いて居つたのを、都合によつて今一度、その司令官の椅子に歸るに至つたのである。固より私としては、多年身も靈魂も打込んで、救世軍に奉仕し來つたのであるから、若し軍の必要とあらば、此の上どんな犠牲を拂ふことも、今更辭する所ではない。ただ然し、その爲に「民衆の聖書」の著作に用ふべき時間と精力とが、甚く減殺せらるゝ如きこともあらうかと、心配したのであれど、所謂案ずるよりは生むが易く、幸に今は又、この篇の發行を見るに至

つたのは、全く神の恩寵と、多數戦友教友の、篤き祈の賜物に他ならない。

先頃大阪の林歌子女史から贈られた歌に、

もろびとのいのりに支へまもらるゝ

きみの御身の力づよさよ

とあり。實際私の如く幾百千とも知れぬ友人知己の、篤き祈に支持せらるゝ幸福者は、他に多くあるまいと信じ、心から感謝に堪へないのである。私は又、私の忠實なる祕書篠崎賢路大尉が、隠れたるところに、「民衆の聖書」の爲に盡しつゝある不斷の勤勞を、

多しとするものである。

昭和十一年八月

山室軍平

聖書各卷略號

本書中に用ひられたる聖書各卷の略號は、左表によるのである。

舊約聖書の部

創世記(創)	出エジプト記(出)	レビ記(レビ)	民數記略(民)
申命記(申)	ヨシユア記(ヨシ)	士師記(士)	ルツ記(ルツ)
サムエル前書(サム前)	サムエル後書(サム後)	列王紀略上(列上)	列王紀略下(列下)
歴代志略上(歴上)	歴代志略下(歴下)	エズラ書(エズ)	ネヘミヤ記(ネヘ)
エステル書(エス)	ヨブ記(ヨブ)	詩篇(詩)	箴言(箴)
傳道之書(傳)	雅歌(雅)	イザヤ書(イザ)	エレミヤ記(エレ)
哀歌(哀)	エゼキエル書(エゼ)	ダニエル書(ダニ)	ホゼヤ書(ホゼ)
ヨエル書(ヨエ)	アモス書(アモ)	オバデヤ書(オバ)	ヨナ書(ヨナ)
ミカ書(ミカ)	ナホム書(ナホ)	ハバコク書(ハバ)	ゼパニヤ書(ゼバ)

ハガイ書(ハガ)……………ゼカリヤ書(ゼカ)……………マラキ書(マラ)……………ヨハネ傳福音書(ヨハ)

新約聖書の部

マタイ傳福音書(マタ)……………マルコ傳福音書(マル)……………ルカ傳福音書(ルカ)……………ヨハネ傳福音書(ヨハ)

使徒行傳(使)……………ロマ書(ロマ)……………コリント前書(コリ前)……………コリント後書(コリ後)

ガラテヤ書(ガラ)……………エペソ書(エペ)……………ピリピ書(ピリ)……………コロサイ書(コロ)

テサロニケ前書(テサ前)……………テサロニケ後書(テサ後)……………テモテ前書(テモ前)……………テモテ後書(テモ後)

テトス書(テト)……………ピレモン書(ピレ)……………ヘブル書(ヘブ)……………ヤコブ書(ヤコ)

ペテロ前書(ペテ前)……………ペテロ後書(ペテ後)……………ヨハネ第壹書(ヨハ壹)……………ヨハネ第貳書(ヨハ貳)

ヨハネ第參書(ヨハ參)……………ユダ書(ユダ)……………ヨハネ黙示録(黙)……………ヨハネ黙示録(黙)

聖書各卷総論

民衆の聖書 サムエル前書

目次

はしがき……………一

聖書各卷略號……………一

サムエル前書總論……………一

(一) エホバに聽かる(サムエル前書第一章)……………一

(二) 獻身(同、第二章)……………八

(三) 神の聲(同、第三章)……………一五

(四) 契約の櫃奪はる(同、第四章)……………二二

(五) 偶像の破壊(同、第五章)……………三〇

(六) 契約の櫃の歸還(同、第六章)……………三六

(七) 助けの石(同、第七章)……………四三

- (八) 王なかるべからず(同、第八章)……………四九
- (九) 驢馬を尋ねて(同、第九章)……………五五
- (一〇) 最初の王(同、第十章)……………六二
- (一一) アンモニ人の來寇(同、第十一章)……………六九
- (一二) 國民への警告(同、第十二章)……………七七
- (一三) サウルの失敗(同、第十三章)……………八三
- (一四) ヨナタンの勇戦(同、第十四章一―二三)……………九一
- (一五) 輕率なる誓約(同、第十四章二四―五二)……………九七
- (一六) 服従は犠牲に勝る(同、第十五章)……………一〇五
- (一七) 牧童ダビデ(同、第十六章)……………一一三
- (一八) 巨人ゴリアテ(同、第十七章一―三〇)……………一二一
- (一九) 五つの小石(同、第十七章三一―五八)……………一二八
- (二〇) 神交(同、第十八章)……………一三六

- (二一) 危難(同、第十九章)……………一四三
- (二二) 死を去る一步(同、第二十章)……………一五〇
- (二三) 伴狂(同、第二十一章)……………一五九
- (二四) 無辜の血(同、第二十二章)……………一六五
- (二五) のがれ岩(同、第二十三章)……………一七二
- (二六) 敵を愛す(同、第二十四章)……………一八〇
- (二七) 富める愚人(同、第二十五章)……………一八六
- (二八) 仁者は敵なし(同、第二十六章)……………一九五
- (二九) 失意の一年四ヶ月(同、第二十七章)……………二〇二
- (三〇) 口寄りの女(同、第二十八章)……………二〇九
- (三一) 二人の主(同、第二十九章)……………二一六
- (三二) その神エホバによりて(同、第三十章)……………二二一
- (三三) サウルの最期(同、第三十一章)……………二二九

サムエル前書總論

サムエル前書及び後書は、もと一卷であつたのを、所謂七十人譯の成りし際、分つて二卷としたものだといふことである。之をサムエル書と呼ぶわけは、サムエルの出生、成長のことより書き起して、その士師又預言者としての一生を録し、彼が神の命によつて膏注いだサウルとダビデとの、二人の王の生活又事業等に及んで居るからである。その期間は、サムエルの一生に、ダビデが王としてユダとイスラエルとに臨んだ四十年を、加へたものに該當する。多分紀元前一〇七〇年から、同九七〇年に至る間であらうとのことである。しかもこれは士師の時代から王朝に入る過渡期として、イスラエル人の歴史に、極めて重要な時代であつた。

その少し前の頃から、カナンの西南にて地中海の沿岸に、ペリシチ人なるものが現れ、段々勢力を増して、盛にイスラエル人に壓迫を加へることゝなつた。かれらの壓迫

が、如何に徹底的のものであつたかは、そのイスラエル人を侵略した後、彼等が劍或は槍を造ることなからしめんため、その地のうち何處にも鐵工なからしめ、「イスラエル人は其の耜、鋤、三齒鍬、斧の鍛に缺ありて、これを鍛ひ改さんとする時、又は鞭を尖らさんとする時は、常にペリシテ人の所にくだれり。」(サム前一三・二〇、二二)とあるのを見ても、其の様子を想像するに餘がある。サムエルとサウルの時代にも、ペリシテ人は屢々邊境をさわがし、時としては深く國內に攻め入つた様なこともある。それをダビデの時代に至つて、鎮定し得たばかりか、反つて敵をして、イスラエル人の威力の下に、慍伏せしむるに至つたのである。

之を私共、個人の信仰生活に當嵌めていへば、これは基督に救はれた靈魂が「初の愛を離れ」(黙二・四)「熱きにもあらず、冷かにもあらず、たゞ微温が故に、吐出されんとする」(黙三・一六)状態にあつたのが、一朝眠より醒め、起つて周圍から押寄する誘惑に抵抗して、之に打勝ち、進んで基督をその靈魂上の王者と崇むるに至ると、似た所が多い。サムエル書は私共が不信仰と懷疑と煩悶と苦惱とを脱れて、全き神の御支配の下に來る上に、多くの貴き教訓と暗示とを與ふるものである。

サムエル前書に現る、主要の人物は、サムエルと、サウルと、ダビデとである。サムエルは母の胎にありし時より、神の召命をうけ、幼い時から宮にて奉仕の生活に入り、早くから神の御聲を聽きわけ、長じて後、最後の士師となり、預言者となり、晩年に神から命ぜられて、イスラエル人の爲に王を立つることとなり、しかも最初の王サウルとの折合がよろしくなかつた爲に、閑地に退いて預言者學校を設立し、天下の英才を集めて、之を教育せんところのみたのである。彼が老いて後、イスラエル人に向うて、「我、幼稚時より今日にいたるまで、汝等のまへにあゆめり。視よ、我ここにあり。エホバのまへと其の膏をさし者のまへに我を訴へよ。我誰の牛を取りしや。誰の驢馬をとりしや。誰を掠めしや。誰を虐遇しや。誰の手より賄賂をとりて、わが目を矇ませしや。有らば我これを汝らにかへさん」(サム前一・二・三)というたのに對し、彼等

が答へて、「汝は我らを掠めず、くるしめず、又何をも人の手より取りしことなし。」と
いうたのを見れば、たゞそれだけでも、彼が如何に清廉無私の人として、その人民に
盡したかを、察するに足るのである。

サウルはその初、膏そゝがれてイスラエルの王となつた當時、「イスラエルの子孫の中
に、彼より美しき者なく、肩より上、民のいづれの人よりも高し。」(サム前九・二)とあるを
見れば、如何に彼が堂々たる偉丈夫であつたかを、知らるゝのである。彼もはじめの間
は、何處までも純真にして、また謙遜に、それにおいて、敵國との戦争には、盛んに
武勇を顯したのであるが、不幸にして間もなく、彼はひどい驕慢に陥り、氣儘で、不
從順で、勝手に自らを用ゆるに至つた爲、終に神から棄てられて、みじめな最期を遂
ぐることゝなつたのである。

サムエル前書に於けるダビデは、牧童より身を起し、その巧なる音楽を以てサウルの
病床に侍することゝなり、やがて巨人ゴリアテを仆した爲に、「サウルは千をうち殺
し、ダビデは萬をうちころす。」(サム前一八・七)と歌はれたのがもとで、サウルの嫉妬を
うけ、爾來流寓漂泊、幾多の苦辛を嘗め、幾度が死生の境に出入することゝなつた。
「天の將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を
勞し、其の體膚を餓やし、其の身を空乏にす云々」といふ孟子の言を、最もよく身に
經驗した者があるとすれば、それは此の場合に於ける彼であつた、というても可から
う。

サムエル前書の内容は、大略次の如くである。

第一、サムエル

(一) 出生及び神の召(一・一―三・二二)

(二) エリの死(四・二―二二)

(三) ペリシテ人の懲治(五・一―七・一六)

第二、サムエルとサウル

- (一) 王を求む(八・一―二二)
 - (二) サウルの選抜(九・一―二二・二五)
 - (三) サウル失脚(一三・一―一五・三五)
- 第三、サウルとダビデ

- (一) ダビデ膏そゝがる(一六・一―二三)
- (二) ゴリアテを仆す(一七・一―一五八)
- (三) サウルの迫害とダビデの受難(一八・一―三〇・三一)
- (四) サウルの陣歿(三一・一―一三)

民衆の聖書 **サムエル前書**



エホバに聴かる
(サムエル前書第一章)

一 エフライムの山地のラマタイムツヒムに、エルカナと名づくる人あり。エフライム人にしてエロハムの子なり。エロハムはエリウの子、エリウはトフの子、トフはツフの子なり。ニエルカナに二人の妻ありて、一人の名をハンナといひ、一人の名をペニナといふ。ペニナには子ありたれども、ハンナには子あらざりき。三此人毎歳に其邑をいて、上りて

山室 軍平 著

シロにおいて萬軍のエホバを拜み、之に祭物をさぐ。其處にエリの二人の子ホフニとヒネハスありて、エホバに祭司たり。四エルカナ祭物をさぐる時、其妻ペニナと其すべての息子女子にわかちあたへしが、五ハンナには其倍をあたふ。是はハンナを愛するが故なり。されどエホバ其争みをとどめたまふ。其敵もまた痛くこれをなやまして、エホバが其はら六

みをとめしを怒らせんとす。七歳々ハンナ、エホバの家にのぼることに、エルカナかくなせしかば、ペニンナかくのごとく之をなやます。是故にハンナないてものくはざりき、ハ其夫エルカナ之にいひけるは、ハンナよ、何故になくや。何故にもものくはざるや。何故に心かなしむや。我は汝のためには十人の子よりもまさるにあらずや。九かくてシロにて食飲せしものち、ハンナたちあがれり。時に祭司エリ、エホバの宮の柱の傍にある壇に坐す。一〇ハンナ心にくるしみ、エホバにいのりて甚く哭き、一誓をなしていひけるは、萬軍のエホバよ、若し誠に婢の憫をかへりみ、我を憶ひ、婢を忘れずして婢に男子をあたへたまはば、我これを一生のあひだエホバにさしげ、剃髪刀を其首にあつまじ。一一ハンナ、エホバのまへに長いのりければ、エリ其口を目をとめたり。一二ハンナ心の中にもいへば、只唇うごくのみにて聲きこえず。是故にエリ之を酔ひた其家族みな上りて、年々の禁物及び其誓ひし物をささぐ。二三然れどもハンナは上らず。其夫にいひけるは、我はこの子の乳ばなれするに及びてのち、之をたづさへゆき、エホバのまへにあらはれしめ、恒にかしこに居らしめん。二三其夫エルカナ之にいひけるは、汝の善しと思ふところを爲し、此子を乳ばなすまでとゞまるべし。只エホバの其言を確實ならしめ賜んことをねがふと。斯くこの婦止まりて其子に乳をのませ、其ちばなれするをまちしが、二四乳ばなせしとき牛三頭、粉壹斗、酒壹囊を取り、其子

る者と思ひ、一四之にいひけるは、何時まで酔ひをるか、爾の酒をされよ。一五ハンナこたへていひけるは、主よ、然るにあらず。我は氣のわづらふ婦人にして、葡萄酒をも濃き酒をもせず、惟わが心をエホバのまへに明せるなり。一六婢を邪なる女となすなかれ。我はわが憂と悲みの多きよりして今までかたれり。一七エリ答へていひけるは、安んじて去れ。願くはイスラエルの神汝の求むる願ひを許したまはんことを。一八ハンナいひけるは、わがはくは仕女の汝のまへに恩をえんことをと、斯てこの婦さりて食ひ、其顔ふたゞび哀しげならざりき。一九是に於て彼等朝はやくおきてエホバのまへに拜をし、かへりてラマの家にいたる、而してエルカナ其つまハンナとまじはる。エホバ之をかへりみたまふ。二〇ハンナ孕みてのち、月みちて男子をうみ、我これをエホバに求めし故なりとて、其名をサムエル（エホバに聴かる）となづく。二一爰に其人エルカナ及びを携へてシロにあるエホバの家にいたる。其子なほ幼稚し、二五是に於て牛をころし、その子をエリの許に携へゆきぬ。二六ハンナいひけるは、主よ、汝のたましひは活く。われはかつてこゝにてなんぢの傍にたち、エホバにいのりし婦なり。二七われ此子のためにいのりしに、エホバわが求めしものをあたへたまへり。二八此故にわれまたこれをエホバにさしげん。其一生のあひだ之をエホバにささぐ。斯てかしこにてエホバをながめり。

◎エルカナの家庭は信仰の家庭であつた。彼が年毎にその邑を出で、上りてシロに行き、神を拜み、祭物をささげたといふ一事が、之を證する。その頃イスラエル人は、全體としてその信仰生活が萎微不振に陥つて居り、祭司エリは年老いて、その子ホフニとピネハスとの二人は、勝手氣儘なことを行うて居つた。斯して宗教上の指導者も、一般の信徒も、共に不満足極まる状態にあつた時、それにも拘らず、エルカナがどこ

までも、信仰的の家庭を營んで居つたのは、感すべきことである。パウロは後に、「人をみな虚偽者とすとも、神を誠實とすべし」(ロマ三・四)というて居る。私共は周囲の人々に眼をとめないで、神を仰ぎ望み、堅く信仰に立つやう、心掛けたきものである。(一一三)

◎とはいへ、エルカナの家庭は、決して幸福なものではなかつた。そのわけは、彼が二人の妻を有したからであつた。多分彼はその初、ハンナを娶り、彼女に子がない爲に、更にペニンナを迎へたのであらう。それがどうであつたにしても、一夫多妻の家庭が、幸福であつた例は昔からない。神は世の初から、一夫一婦を以て人の常道と定め給うた。(創二・二四)之に違背する者はレメクをはじめとし、(創四・一九)アブラハムも、(創二二・九、一〇)ヤコブも、(創三〇・一一、二四)またエルカナも、悉くみな不幸なる家庭の人たることを免れなかつた。それにつけても私共は、基督を主人として、その御旨を畏む所の、一夫一婦の清き家庭を造りたきものである。(四一八)

◎ハンナは子がない上に、ペニンナから苦しめられて居つた故、その神詣の爲にシロに往いたのをよい機とし、エホバに祈りて甚く嘆き、一男子を與へられんことを求め、その願がかなうた日には、その子をナザレ人として、(民六・一七)薙刀をその頭にあてず、一生の間神に事へしむべきことを誓うた。後世、モファットの母はその子を神に獻げ、他日彼が傳道に従事するものとならんことを祈つて居ると、その祈は聽かれ、モファットは成人の後、雷に傳道に従事するのみならず、アフリカまでも出掛けて、すばらしい奉仕をなすに至つたやうな例もある。母が眞實をこめて、その子の爲に祈る祈には、力がある。ハンナの事はこの點に於て、最も善き模範を示すものと、いふことが出来る。(九一一)

◎祭司エリは、ハンナの唇のみ動いて、聲の聞えざる祈のさまを傍で見、酒に酔ひたるものと思ひちがへて、之を咎めた。これは後にペンテコステの日に、ペテロ、ヨハネ等が、「甘き葡萄酒にて満された者」(使二・一三)と思はれたのと似て、とんだ誤解を受けたものである。此の如く人は往々、思はぬ誤解を受くることあるものである。主イエス 耶蘇さへもその親戚の者から、狂人と間違へて、取押へられんとしたことがある。(マ

ル三・二一)それ故私共は、人から思ひ違へられたかというて、之を不思議のことと思
うてはならない。ハンナは柔和なる言をもて、その辯解をしたため、エリから「安んじ
て去れ、願くはイスラエルの神、汝の求むる願を許したまはんことを」と祝福せら
れ、その願ふ所は最早神に聽かれたことを信じて、「其の顔ふたゞび哀しげならざり
き」というてある。凡て祈りて願ふ事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし」(マ
ル一・二四)と、耶蘇は仰せられた。ハンナはさうした信仰の祈をしたのであつた。(二
二一八)

◎神はハンナの祈に應へ、之に男子を與へ給うた。その名をサムエル、即ち「エホバ
に聽かる」と命じたのは、全く彼が祈の應驗として、與へられたことを信じた故であつ
た。斯してサムエルは母の祈によつて授けられた子であつたのみならず、後年彼自ら
が亦、祈の人として一生のあひだ、神に事へたのである。詩篇の作者が「われらの神
エホバをあがめ、その承足のもとにて拜みまつれ。エホバは聖なるかな。その祭司の
なかにモーセとアロンとあり。その御名をよぶ者の中にサムエルあり。かれらエホバ
を呼びしに應へたまへり。」(詩九九・五、六)というたのは、そのことである。祈の母に育
てられた子は、又祈の人として潔き生活を営み、大なる奉仕をなすに至つたのであ
る。(一九、二〇)

◎ハンナはその子が、漸く乳ばなれするのを待ち、携へてシロに行き、祭司エリに會
うて、「われ此の子のためにいのりしに、エホバわが求めしものをあたへたまへり。此
の故にわれまたこれをエホバにさゝげん。其の一生のあひだ、之をエホバにさゝぐ」
というた。イスラエル人の間で、子の乳ばなれするといふのは、その三歳頃のこと
であつた。マルチン・ルーテルがはじめて、鎖つきの聖書を見出した時、之を開いて先
づ眼にふれたのが、このハンナとサムエルとの物語であつた。彼は之を讀んで甚く感
奮し、彼自らサムエルの如く、一生の獻身と奉仕とを神に誓うたものと、承知して居
る。どうかもつともつと、さうした獻身者の、私共の間に起らんことを、願はねば
ならぬ。(二二一・二八)

二 獻 身

(サムエル前書第二章)

一 ハンナ禱りて言ひけるは、我が心はエホバによりて喜び、我が角はエホバによりて高し、我が口はわが敵の上にはりひらく。是は我汝の救拯によりて樂むが故なり。ニエホバの如く聖き者はあらず。其は汝の外に有る者なければなり。又われらの神のごとき磐はあることなし。三汝ら重ねて甚く誇りて語るなかれ。汝等の口より慢言を出すなかれ。エホバは全知の神にして行爲を裁度りたまふなり。四勇者の弓は折れ、倒るゝ者は勢力を帯ぶ。五飽き足れる者は食のために身を備はせ、飢ゑたる者は憩へり。石女は七人を生み、多くの子を有てる者は衰ふるに至る。六エホバは殺し又生し給ひ、陰府に下しまた上らしめ給ふ。七エホバは貧しからしめ、又富ましめ

給ひ、卑くしまた高くしたまふ。八荏弱者を塵の中より擧げ、窮乏者を埃の中より升せて、王公の中に坐せしめ、榮光の位をつがしめたまふ。地の柱はエホバの所屬なり。エホバ其上に世界を置きたまへり。九エホバ其聖徒の足を守り給はん。惡しき者は黑暗にありて黙すべし。其は人力をもて勝つべからざればなり。一〇エホバと争ふ者は破碎かれん。エホバ天より雷を彼等の上に下し、エホバは地の極をさばき、其王に力を與へ、其膏そゞぎし者の角を高くし給はん。一一エホバ、ラマに往きて其家に至りしが、稚子は祭司エリの前にありてエホバにつかふ。一二さてエリの子は邪なる者にして、エホバをしらざりき。一三祭司の民における習慣は斯の如し。人

祭物をさぐる時肉を煮るあひだに祭司の僕、三の齒ある肉叉を手にとりて來り、一四之を釜あるひは銅あるひは鼎又は炮烙に突き入れ、肉叉の引きあぐるところの肉は祭司みなこれを己にとる。是くシロに於て凡てそこに來るイスラエル人になせり。一五脂をやく前にも亦祭司のしもべ來り、祭物をさぐる人にいふ、祭司のために焼くべき肉をあたへよ。祭司は汝より煮たる肉を受けず、生腥の肉を好むと。一六もし其人これにむかひ、直ちに脂をやくべければ後心の好むまゝに取れといはゞ、僕之にいふ。否今あたへよ。然らずば我強ひて取らんと。一七故に其壯者の罪エホバのまへに甚だ大なり。そは人々エホバに祭物をさぐることをいとひたればなり。一八サムエルなほ幼くして布のエホデを着て、エホバのまへにつかふ。一九また其母これがために小き明衣をつくり、歳毎にその夫とともに年の祭物をささげにのぼる時、これをもちきたる。二〇エリ、エ

ルカナとその妻を祝していひけるは、汝がエホバにさうげたる者のために、エホバ此婦よりして子を汝にあたへ給はんことをねがふと。斯くてかれら其郷にかへる。二一しかしてエホバ、ハンナをかへりみたまひければ、ハンナ孕みて三人の男子と二人の女子をうめり。童子サムエルはエホバの前にありて生育てり。二二こゝにエリ甚だ老いて、其子等がイスラエルの人々になせし諸の事を聞き、また其集會の幕屋の門にいづる婦人たちと寝たるを聞きて、二三これにいひけるは、何ぞ斯る事をなすや。我このすべての民より汝らのあしき行をきく。二四わが子よ、然すべからず。わがきくところの風聞よからず。爾らエホバの民をしてあやまたしむ。二五人もし人にむかひて罪をかさば、神之なさばかん。されど人もしエホバにむかひて罪をかさば、誰かこれがためにとりなしたなさんやと。しかれども其子父のこゝとばを聴かざりき。そはエホバかれらをころさんと

思ひたまへばなり。二六童子サムエル生長ゆきてエ
ホバと人々とに愛せらる。二七茲に神の人エリの許に
來り、これにいひけるは、エホバ斯くいひたまふ。
爾の父祖の家エジプトにおいてパロの家にありしと
き、我明かに之にあらはれしにあらずや。二八我こ
れをイスラエルの諸の支派のうちより選みてわが祭
司となし、わが壇の上に祭物をさしげ、香をたかし
め、我前にエホデを衣しめ、またイスラエル人の火
祭を悉く汝の父の家にあたへたり。二九なんぞわが
命ぜし犠牲と禮物を汝の家にてふみつくるや。何ぞ
我よりもなんちの子をたふとみ、わが民イスラエル
の諸の祭物の最も嘉きところをもて己を肥すや。
三〇是ゆゑにイスラエルの神エホバいひたまはく、
我誠に曾ていへり。汝の家およびなんちの父祖の家
永くわがまへにあゆまんと。然れども今エホバいひ
たまふ、決めてしからず。我をたふとむ者は我も之
をたふとむ。我を賤しむる者はかるんぜらるべし。

一〇
三二視よ、時いたらん。我汝の腕と汝の父祖の家の
腕を絶ち、汝の家に老いたるもの无からしめん。三三
我大にイスラエルを善くすべけれど、汝の案内には
災見えん。汝の家には此のち永く老ゆるものなかる
べし。三三またわが壇より絶たざる汝の族の者は汝
の目をそこなひ、汝の心をいたましめん。又汝の家
にうまれいづるものは壯年にして死なん。三四汝の
ふたりの子ホフニとヒネハスの遇ふところの事を其
徴とせよ。即ち二人ともに同じ日に死なん。三五我
はわがために忠信なる祭司をおこさん。其人わが心
とわが意にしたがひておこなはん。われその家をか
たうせん。かれわが膏そそぎし者のまへに恒にあゆ
むべし。三六しかして汝の家にのこれる者は皆きた
りてこれに屈み、一厘の金と一片のパンを乞ひ、且
いはん。わがはくは我を祭司の職の一に任じて、些
少のパンにても食ふことをえせしめよと。

◎ハンナは、その子サムエルを興へられたことを甚く喜び、その祈はいつしか讚美の
歌と變つた。我が心はエホバによりて喜び、我が角はエホバによりて高し。我が口は
わが敵の上にはりひらく。是は我、汝の救拯によりて樂しむが故なり」とは、彼女が
胸に溢るゝ歡喜を語つたものである。ジョン・ウエスレーが、はじめてブラムエルと
對面した時、彼は先づブラムエルに向ひ、「君は神を讚美し得るか」と尋ねた。私共の
宗教は、神を讚美し得るものでなくてはならぬ。すなはち神の恵の有難いことを、十
二分に經驗したものでなくてはならぬ。(一、二)

◎彼女は續いて歌うた。「エホバは全知の神にして、行爲を裁度りたまふなり。勇者の
弓は折れ、倒るゝ者は勢力を帯ぶ。飽き足れる者は食のために身を備はせ、飢ゑたる
者は憇へり。石女は七人を生み、多くの子を有てる者は衰ふるに至る。エホバは殺し
又生かし給ひ、陰府に下しまた上らしめ給ふ。エホバは貧しからしめ又富ましめ給ひ、
卑くしまた高くしたまふ」と。これは神が生殺與奪の權を有ち給ひ、しかもあくまで、
公平なる審判を、凡ての者の上に行ひ給ふことを、讚め歌うたものである。とりわけ

神は艱難と困苦との中にある聖徒を顧みて、之を救ひ給ふお方である。後に詩篇の作者が「悪をはなれて善をなせ、然らばなんぢの住居とこしへならん。エホバは公平をこのみ、その聖徒をすて給はざればなり。かれらは永遠にまもりたすけられるれど、悪しき者のすゑは斷ち滅さるべし」(詩三七・二七、二八)というたのは、同じ意味を語つたものである。(三一〇)

◎「エリの子は邪なる者にして、エホバを知らざりき」とあり。エリの子なるホフニとピネハスとは、神に獻ぐべき祭物の肉を先づ己に取り、然る後その殘餘の部分を神に獻げ、神に事へる代に、己が腹に事へた。(ロマ二六・一八)その爲人々は、エホバに祭物をさぐることを厭ふに至つたのである。彼等は幼い時から宗教家の家庭に育ち、宗教の教義を學び、その儀式を行つて居つたに拘らず、彼等は個人的の宗教を有たなかつた。彼等は神を知らなかつたのである。「馬を水の邊に連れ行くことは、さほど六つかしくない。けれども強ひて之に水を飲ますことは、いかなる大力の人にも容易でない」といふことがある。當人が自分でその氣にならないかぎり、どんなに宗教的

の家庭に生れ、又は信仰的環境に育つても、神の恵は一向わからない。「エホバいひたまはく、往きてこの民に此の如く告げよ。汝ら聞きてきけよ、然れどさとらざるべし。見てみよ、然れどしらざるべし」(イザ六・九)といふこともあれば、私共は銘々、個人的にその心をひらき、神の力と恵とを受容れて居ることが大事である。(一一一七)◎「サムエルなほ幼くして布のエホデを着て、エホバのまへにつかふ。」「童子サムエルは、エホバの前にありて生育てり。」「童子サムエルは生長ちゆきて、エホバと人に愛せらる」等とあり。エリの子等が不肖の子であつたに引換へ、サムエルは何處までも素直に、又信仰的に育ち、神と人とに愛せらるゝ者となつた。その母はこれが爲に小き明衣をつくり、之を携へて年毎に、その夫と共に祭に列つたといふことである。ハンナは斯して、その子のために明衣をつくつて着せたのみならず、併せて信仰と奉仕との習慣を造り、品性を造り、人格を造つて、之を着せたものとも、いふことが出来る。此の世に祈深い母の感化ほど、その子の上に大なるものはないのである。神はハンナが、サムエルを獻げた忠誠と信仰とを愛で、引續き別に三人の男子と二人の

女子とを生ましめ給うた。所謂「石女は七人を生み」といふ彼女の歌は、殆んど文字通りに、彼女の経験する所となつたのである。(一八一―二二)

◎祭司エリは善人であつたに相違ない。然しながら彼は、その子に甘かつた様に見える。即ち子供等が神を偽り、氣儘を行ふのを、嚴重に取締らうとはせず、たゞその折に、叱言くらゐいうて、すまして居つたやうである。彼等がその妻ならぬ婦人に戯るゝ由を聞いて、之を戒めた様を見ても、何となく押が利かないやうに思はるゝ。「鞭をくはへざる者はその子を憎むなり。子を愛する者はしきりに之をいましむ」(箴一三・二四)と、ソロモンはいうて居る。子を愛する者は之を育つる上に、寛嚴その宜しきを得べく、あまりに嚴重にして冷酷に陥つてはならぬと共に、あまりに寛大にして放肆に流れしめざるやう、注意することが最も肝要である。(二二―二六)

◎神の人はエリの許に來り、彼とその家とに對する、神の刑罰を宣告した。その一節に、「何ぞ我よりもなんぢの子をたふとみ、わが民イスラエルの諸の祭物の、最も嘉きところをもて己を肥すや」というてある。之によつて見れば、エリの薄志弱行なる、その子等の氣儘を行ふのを止め得ないで、事實上、神よりもその子を、大事とする様なことになつて居たのである。耶穌は曾てその弟子を教へて、「我よりも父または母を愛する者は、我に相應しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相應しからず。又おのが十字架をとりて我に従はぬ者は、我に相應しからず」(マタ一〇・三七、三八)と仰せられた。私共は所謂人情にからまりて、眞理を枉げる様なことがあつてはならぬ。私共は神を第一において、只管その御旨を行はんことを努めねばならぬ。(二七一―三六)

三 神の聲

(サムエル前書第三章)

一童子サムエル、エリのまへにありてエホバにつかふ。當時はエホバの言まれにして、默示あること恒ならずりき。二倍エリ目漸くもりて見ることをえず。此時其室に寝たり。三神の燈なほきえず、サム

エル神の櫃あるエホバの宮に寝ぬ。四時にエホバ、サムエルをよび給ふ。彼我こゝにありといひて、五エリの許に趨せゆき、いひけるは、汝われをよぶ。我こゝにあり。エリいひけるは、我よばず、反りて

臥れよと、乃ちゆきていぬ。六エホバ復かされて、サムエルよとよびたまへば、サムエルおきてエリのもとにいたり、いひけるは、汝われをよぶ。我こゝにあり。エリこたへけるは、我よばず、わが子よ、反りていれよ。七サムエルいまだエホバを知らず、またエホバのことばいまだかれにあらはれず。八エホバ三たびめに又サムエルをよびたまへば、サムエルおきてエリの許にいたり、いひけるは、汝われをよぶ。我こゝにありと。エリ乃ちエホバの童子をよびたまひしをさとる。九故にエリ、サムエルにいひけるは、ゆきて寝れよ。彼若し汝をよばば、僕聴く、エホバ語り給へといへと。サムエルゆきて其室にいれしに。一〇エホバ來りて立ち、まへの如く、サムエル、サムエルとよびたまへば、サムエル、僕きく、語りたまへといふ。一一エホバ、サムエルにいひ給ひけるは、視よ、我イスラエルの中に一の事をなさん。之をきくものは皆其耳ふたつながら鳴らん。一二其

一六
日にはわれ嘗てエリの家について言ひしことを、始より終までことごとくエリになすべし。一三われかつてエリに其惡事のために永くその家をさばかんとしめせり。そは其子の詛ふべきことをなすをしりて之をとどめざればなり。一四是故にわれエリのいへに誓ひて、エリの家は犠牲あるひは禮物をもて永くあがなふ能はずといへり。一五サムエル朝までいれてエホバの家の戸を開きしが、其異象をエリにしめすことをおそる。一六エリ、サムエルをよびていひけるは、わが子サムエルよ。答へけるは、われこゝにあり。一七エリいひけるは、何事を汝につげたまひしや。請ふ我にかくすなかれ。汝もし其汝に告げたまひしところ一にてもかくすときは、神汝にかくなし、又かされてかくなし給へ。一八サムエル其事をことごとくしめして彼に隠すことなかりき。エリいひけるは、是はエホバなり。其よしと見たまふこととなしたまへと。一九サムエルぞだちぬ。エホバ

これとともにいまして、そのことばをして一も地におちざらしめたまふ。二〇ダンよりベエルシバにいたるまで、イスラエルの人みなサムエルがエホバの預言者とさだまれるをしれり。二一エホバふたたび

シロにてあらはれたまふ。エホバ、シロにおいて、エホバの言によりてサムエルにおのれをしめしたまふなり。サムエルの言あまねくイスラエル人におよぶ。

◎士師の時代の三百年を通じて、神の聲を聞いたとか、神よりの黙示を得たとかいふ例は、至つて少かつた。當時はエホバの言まれにして、黙示あること恒ならざりきとあるのは、それである。神が語り給はないのでもなく、又黙示を興へ給はないのでもない。之を聞き分け、又は見分ける人がなかつたのである。エホバいひたまはく、往きてこの民に此の如く告げよ。汝ら聞きてきけよ、然れどさとらざるべし。見てもよ、然れど知らざるべし(イザ六・九)とあり。さりながら神は、その心に備ある者の爲には、常に「靜なる細微き聲」(列上一九・一二)にて、語り給ふのである。受信器の備さへしてあれば、いつでも神の放送を聴取することが出来るのである。神は又待望む者に、その黙示を興へ給ふ。汝らの老いたる人は夢を見、汝らの少き人は異象を見ん(ヨエ

二・二八) とあるのは、それである。それ故私共は、いつも神の聲を聞き、又その異象を見つゝ、奉仕を勵みたきものである。(一)

◎神はサムエルを呼び給うた。然しながら彼は、その神の聲なるを知らず、老祭司エリが彼を呼ぶのであらうと思ひ、夜中に三度までも起き出て、その用向を尋ねた。此の如く多くの人々は、神の聲を聞けども、その神の聲なるを知らず、したがつてその意義をも解しないのである。神は今も現に自然を通じ、聖書を通じ、神の僕を通じ、又は患難、疾病、生別、死別、その他の出来事を通じて、私共に通じて居給ふ。或人が外出して、向から来る葬列を眺め、歸つてその家の人に告げて、「今日私は感動深き説教を見て來た」というた。説教を聞いたのではなく、見たのであつた。神はその葬儀を通じて、彼に語り給うたからである。私共も斯く心の備を怠らず、いつも神の聲をよく聞分けて、之に従ひたきものである。「耳ある者は聽くべし」(マタ一三・九)と、耶蘇は仰せられたのである。(二一八)

◎サムエルはエリから教へられて、神の御聲を聽くことゝなつた。神は先づ「サムエル、サムエル」と呼びかけ給うた。此の如く神は私共一人一人を憶えて、之に呼びかけ給ふ方である。サムエルはエリから教へられたとほり、「僕聽く、語り給へ」と答へた。神の僕たる私共は亦銘々、サムエルの、この態度を學ばねばならぬ。マリヤが耶蘇の足許に座し、熱心に御言を聽いて居るのを、マルタが妨げて、「主よ、わが姉妹、われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給はぬか。彼に命じて我を助けしめ給へ」(ルカ一〇・四〇)といふと。耶蘇は答へて、「マルタよ、マルタよ、汝さまざまの事により、思ひ煩ひて心勞す。されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ。マリヤは善きかたを選びたり。此は彼より奪ふべからざるものなり。」(ルカ一〇・四二)と仰せられた。それにつけても私共は、折々人を避けて、一人密室に退き、神と直面してその御旨を伺ひ、又その力と導とを受けたきものである。(九、一〇)

◎かくて後、神はサムエルに向ひ、そのやがてエリの家に、懲罰をくだすべきことを示し給うた。「われかつてエリに其の惡事のために、永くその家をさばかんとしめせり。そは其の子の誼ふべきことをなすを知りて、之をとどめざればなり」といふのは、神

のエリに對する御咎であつた。概していへば、エリは善人であつた。然しながら彼は弱い善人であつた。その子供等を信仰の道に於て、嚴重に教ゆべき場合に、姑息の愛に溺れて、優柔不斷にその氣儘を看過し、爲にかうした禍を醸すに至つたものである。モニカはその子アオガスチンが、脱線した生活をするのを見ながら、なほ失望せず、「涙の子は滅びず」との確信にもとづき、多年熱誠の祈と、いふにいへない心盡しとをした甲斐あり、遂に彼を更生の一路に導くことが出来た。エリに缺けたものは、さうした熱切なる祈と、又堅忍不拔の努力とであつた様に見える。私共はその子を教育する上に、神の御旨に副んことを力めねばならぬ。神を敬ふことを教へぬ教育は、智慧ある悪魔を造るものである」と、ウエリントンはいうたのである。(二一—一四)

◎エリは神の御旨のある處を、悉くサムエルから聞いて、「是はエホバなり。其のよしと見たまふことをなしたまへ」というた。彼が悪びれず、素直に、己が非を認めて、服罪したさまが察せらるゝではないか。アロンの子なるナダブとアビウとが、異火を神の前にさし上げた爲に、焼きほろぼされた時、アロンが神を畏れ、自ら抑制して、黙然として坐つてゐたといふのは、之と似た様な事蹟であつた。奥野昌綱の歌に「われはげに、いつくしみとし、めぐみとす。義しき神よ、よしうちたまへ」とあり。私共は如何に神の御怒と懲罰とをうけたかというて、尙どこまでも神にすがる以外に、なすべき所を知らないのである。(二五—一八)

◎サムエルは追々育つた。こゝに「エホバこれとともにいまして云々」とあるのは、彼が青年時代から逸早く一切を獻げ、聖め別れた人物として、生活したことを示すものである。それ故に神は又「そのことばをして、一つも地におちざらしめ給うたのである。つまり彼は、潔められたる人格を以て、間違なき眞理を宣傳へて居つたことが解るのである。此の如く神の聖徒は、その人格と言語と、二つのものが相待つて、神の眞理と恩恵とを證するやうでなくてはならぬ。ダビデが後に「あゝ神よ、わがために清き心をつくり、わが衷になほさ靈をあらたにおこしたまへ。われを聖前より棄て給ふなかれ。汝のさよき御靈をわれより取り給ふなかれ。なんぢの救のよろこびを我にかへし、自由の御靈をあたへて我をたもちたまへ。さらばわれ愆ををさせる者に、

なんぢの途ををしへん。罪人はなんぢに歸りきたるべし(詩五一・二〇―二三)というたのも、思ひ合さるゝ。次に、「ダンよりベエルシバにいたるまで、イスラエルの人みな、サムエルがエホバの預言者とさだまれるをしれり」とあるのは、北の端から南の端まで、イスラエル人が皆、サムエルを神の選び給うた器として認識し、又敬愛するに至つたことをいうたのである。(一九―二二)

四 契約の櫃奪はる

(サムエル前書第四章)

一イスラエル人メリシテ人にてあひて戦はんとし、エベネゼルの邊に陣をとり、メリシテ人はアベクに陣をとる。ニメリシテ人イスラエル人にむかひて陣列をなせり。戦ふにおよびて、イスラエル人、メリシテ人のまへにやぶる。メリシテ人戦場において其軍四千ばかりをころせり。三民陣營にいたる

に、イスラエルの長老曰ひけるは、エホバ何故に今日我等をメリシテ人のまへにやぶりたまひしや。エホバの契約の櫃をシロより此にたづさへ來らん。其櫃われらのうちに來らば、我らを敵の手よりすくい出すことあらんと。四かくて民人をシロにつかはして、ケルビムの上に座したまふ萬軍のエホバの契

約の櫃を其處よりたづさへきたらしむ。時にエリの二人の子ホフニとピネハス、神の契約のことはともに彼處にありき。五エホバの契約の櫃陣營にいたりしとき、イスラエル人みな大によばはり叫ひければ、地なり響けり。六メリシテ人喊呼の聲を聞きていひけるは、ヘブル人の陣營に起れるこの大なる喊呼の聲は何ぞやと。遂にエホバの櫃の其陣營にいたれるを知る。セメリシテ人おそれていひけるは、神陣營にいたる。又いひけるは、嗚呼われら禍なるかな。今にいたるまで斯ることなかりき。ハあゝ我等禍なるかな、誰かわれらを是らの強き神の手よりすくいださんや。此等の神は昔諸の災を以てエジプト人を曠野に撃ちし者なり。九メリシテ人よ、強くなり、豪傑のごとく爲せ。ヘブル人がかつて汝らに事へしごとく、汝らこれに事ふるなかれ。豪傑のごとく爲して戦へよ。一〇かくてメリシテ人戦ひしかば、イスラエル人やぶれて各その天幕に逃げかへ

る。戦死はなはだ多く、イスラエルの歩兵の仆れし者三萬人なりき。二又神の櫃は奪はれ、エリの二人の子ホフニとピネハス殺さる。二是日ベニヤミンの一人、軍中より走せきたり、其衣を裂き、土をかむりてシロに至る。三其いたれる時、エリ道の傍に壇に座して觀望居たり。其心に神の櫃のことを思ひ煩らひたればなり。其人いたり、邑にて人々に告げければ、邑こそりてさけびたり。四エリ此呼號の聲をきいていひけるは、是喧嘩の聲は何なるやと。其人いそぎきたりてエリにつぐ。五時にエリ九十八歳にして其目かたまりて見ることを能はず。六その人エリにいひけるは、我は軍中より來れるもの、我今日軍中より逃れたり。エリいひけるは、吾子よ、事いかん。七使人答へていひけるは、イスラエル人、メリシテ人の前に逃げ、且民の中に大なる戦死あり。また汝の二人の子ホフニとピネハスは殺され、神の櫃は奪はれたり。八神の櫃のこと

を演べしとき、エリ其墳より仰げに門の傍におち、
頸を死ねり。是は彼老いて身重かりければなり。
其イスラエルを鞠しは四十年なりき。一九エリの媳
ビネハスの妻孕みて、子産まん時ちかゝりしが、神
の櫃の奪はれしと舅と夫の死にしとの傳言を聞きし
かば、其痛みおこりきたり、身をかゝめて子を産め
り。二〇其死なるとする時、傍にたてる婦人之にい

ひけるは、懼るゝなかれ、汝男子を生めりと。然れ
ども答へず、又かへりみず、二只榮光イスラエル
をさりぬといひて、其子をイカホデ（榮なし）と名
づく。是は神の櫃奪はれしにより、また舅と夫の故
に因るなり。二三またいひけるは、榮光イスラエル
をさりぬ。神の櫃うばはれたればなり。

◎これはサムソンの死後、イスラエル人が四十年間、ペリシテ人の支配を受けた間の
出来事であらう。イスラエル人はペリシテ人の壓迫を免れんものと、兵を起して之に
逆うたが、その結果はみじめな敗軍に終り、戦死者四千人を出すに至つた。彼等が斯
くペリシテ人の支配を蒙るに至つた理由は、彼等が「エホバのまへにて惡を行ひし」
（士一三・一）爲であつた。それ故彼等が、今一度國運を挽回せんと欲するならば、彼等
は、先づ自らの罪の悔改から出發すべき筈であつた。然しながら彼等は、罪の報を
免れんと願へども、罪そのものから脱することを忘れて居つたのである。○蝮の裔よ、

誰が汝らに、來らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ。さらば悔改に相應しき
果を結べ」(マタ三・七、八)といふ言は、正しくその當時のイスラエル人に、適切なる教
訓であつた様に見える。(一、二)

◎イスラエルの長老等はいうた。「エホバ何故に今日我等を、ペリシテ人のまへにやぶ
りたまひしや」と。「人はおのれの痴によりて道につまづき、反つて心にエホバを怨
む」(箴一九・三)とは、彼等の謂である。彼等は又いうた。「エホバの契約の櫃を、シロよ
り此にたづさへ來らん。其の櫃われらのうちに來らば、我らを敵の手よりすくひいだ
すことあらん」と。斯てイスラエル人は、契約の櫃をシロからたづさへ來つた。エリ
の二人の子ホフニとビネハスとは、之に隨うたのである。然しながら畢竟櫃は櫃であ
る。神が借なり給はないのに、契約の櫃だけ擔ぎ出した所で、何の役に立たう。又ホ
フニとビネハスの様な、祭司にあるまじき行をして居る祭司が、幾人之に伴うたかと
いうて、それが何の頼にならう。今日の私共も亦、其の當時のイスラエル人と同じく、
いたづらに形式的の宗教や、又は職業的の宗教家に依頼んで、満足してはならぬ。主い

ひ給はく、この民は口をもて我にちかづき、口唇をもてわれを敬へども、その心はわれに遠ざかれり。(イザ二九・一三)「禍なるかな、偽善なる學者、パリサイ人よ、汝らは白く塗りたる墓に似たり。外は美しく見ゆれども、内は死人の骨とさまざまの穢にて満つ。斯のごとく汝らも外は人に正しく見ゆれども、内は偽善と不法にて満つるなり。(マタ二三・二七、二八)私共は眞の神を偶像扱してはならない。(三、四)

◎契約の櫃が陣營に到着した時、大なる喜悅の叫聲がイスラエル人の間に起つた。ペリシテ人はそれを聞いて驚きおそれ、「嗚呼われら禍なるかな。誰かわれらを是らの強き神の手より、すくひいださんや。此等の神は昔、諸の災を以て、エジプト人を曠野に撃ちし者なり」というた。けれども彼等は、その爲に失望はしないで、反つて一層奮發し、勢猛にイスラエル人と戦ひ、今一度之を撃破することゝなつた。爲にイスラエル人の戦死者三萬人に達し、神の櫃は奪はれ、ホフニとピネハスとは又、殺された。此の如く形式的の宗教と、職業的の宗教家とは、たとひ一時繁榮を極むる如く見えても、それはたゞ虚勢を張るものに過ぎない。その中に何等の活きた力がないのである。

る。私共の宗教は活ける基督を、基とするものでなくてはならぬ。使徒パウロが「既に置きたる基のほかは、誰も据うることを能はず。この基は即ち耶穌基督なり。人もし此の基の上に金・銀・寶石・木・草・藁を以て建てなば、各人の工は顯るべし。かの日これを明かにせん。かの日は火をもつて顯れ、その火のおのの工の如何を驗すべければなり」(コリ前三・一二―一三)というたのは、心得ておくべきことである。(五―一二)

◎「両親が忠實を盡す時、其の子の救はれざるは稀なものである」と、バックスターはいうて居る。エリは日頃から、その子に對する忠實なる心盡しが足りなかつた。それ故今更のやうに、日夜彼等に對する心配の絶間がなかつたのである。殊に此の度は、イスラエル人が神の櫃を擔うて陣營に向ひ、その二人の子が又、之に伴うて往いたのを見、何ともいへない心勞をして居つたのである。「恐怖は良心が罪に對して納むる税金である。エリは神の御旨に全く従ふこと能はず、不徹底な、中途半端な信仰生活を營んで居つた。それ故またその結果として種々の苦心と焦慮との、襲ひ來ることを禁じ得なかつたのである。又憐れな老人であつたといはねばならぬ。(二二―一五)

◎ベニヤミンの支派に屬する一人の兵が、軍中より馳せ來り、道の傍に壇に座して觀望居たるエリに向うて、戰の狀況を報告していうた。「イスラエル人、ペリシテ人の前に逃げ、且民の中に大なる討死あり。また汝の二人の子ホフニとピネハスとは殺され、神の櫃は奪はれたり」と。斯してエリは、國民としては民の中に大なる戰死のあつたこと、親としては二人の子の殺されたこと、祭司としては又、神の櫃の奪はれたことを告げられ、殊に最後の神の櫃については、特別に自分の責任を深く感ずるものから、その悲報を耳にすると共に、彼は壇から仰向に倒れ落ち、頸を折つて死んだ。是は彼が老いて身が重かつたからである。彼は決して悪人ではなく、又殊更に神を侮る者でもなかつた。彼に缺けたのは、その指導者としての強い品性であつた。彼は弱かつたのである。弱いが爲にその子等に對する躰が足らず、その人民を統制する威嚴がなかつた。彼はアロンと同じ様に薄志弱行の人であつた。そのため民をして「縦肆に事をなさしめ、イスラエルをして敵の中に嘲笑とならしめ」(出三一・二五)たのである。然しながら私共の神は、信仰を以て仰ぎ望む者を顧み、能く「弱よりして強く」(ヘブ一・三四)ならしめ給ふ方である。私共は彼によつて、「目を覺し、堅く信仰に立ち、雄々しく」(コリ前一六・一三)なるべき必要がある。(一六〇一八)

◎國家の災難はその人民の不幸である。民族の上に襲ひ來る禍は、家庭にも、個人にも、同じやうに或る程度の累を及ぼすものである。ピネハスの妻は妊みて子を産まんとする時、神の櫃の奪はれしこと、又舅と夫との死にしことを聞いて、急に痛みがおこり、産氣を催した。その難産にて死なんとする前に、「榮光イスラエルを去りぬ」といひ、その子にイカボテ(榮なし)と名づけたといふのは、如何にも不憫な物語である。それにつけても私共は、いついかなる場合にも、斷えず神の榮光を顯さん爲に生活し、又奉仕せねばならぬ。日本に於ける救世軍の初代に、脇屋正人といふドクトルがあり、感謝祭の前に、「凡ての榮は耶蘇にあれ、凡ての恥は僕にあれ」と書いて柱に貼りつけ、その決心で、出て募金運動に従事したことがある。私共は自分がどうなつても、神の榮光を第一として、その爲に心と身とを盡すやうでありたい。(一九一三)

五 偶像の破壊

(サムエル前書第五章)

一 ペリシテ人神の櫃をとりて、之をエベネゼルよりアシドドにもちきたる。二 即ちペリシテ人神の櫃をとりて之をダゴンの家にもち來り、ダゴンの傍に置きぬ。ミアシドド人次の日風く起き、エホバの櫃のまへにダゴンの俯伏に地にたふれをるをみ、乃ちダゴンととりて再びこれを本の處におく。四 また翌朝風く興き、エホバの櫃のまへにダゴン俯伏に地にたふれをるを見る。ダゴンの頭と其兩手、門闕のうへに斷ち切れをり、只ダゴンの體のみのこれり。五是をもてダゴンの祭司およびダゴンの家にいるもの、今日にいたるまでアシドドにあるダゴンの鬮をふまず。六 かくてエホバの手おもくアシドド人にくはり、エホバこれをほろぼし、腫物をもてアシドドお

よび其四周の人をくるしめたまふ。セアシドド人その斯るを見ていひけるは、イスラエルの神の櫃を我らの中にとむべからず。其はその手いたくわれらおよび我らの神ダゴンにくはればなり。八 是故に人をつかはしてペリシテ人の諸君主を集めていひけるは、イスラエルの神の櫃をいかにすべきや。彼らいひけるは、イスラエルの神のはこはガデに移さんと。遂にイスラエルの神のはこをうつす。九 之を移せるのち神の手その邑に加はりて、滅亡るもの甚たおほし。即ち老いたると幼とをいはず、邑の人をうちたまひて腫物人々におこれり。一〇 是において神のはこをエクロンにおくりたるに、神の櫃エクロンにいたりしとき、エクロン人さけびていひけるは、

我等とわが民をころさんとてイスラエル神のはこを我らにうつすと。一 かくて人を遣はしてペリシテ人の諸君主をあつめていひけるは、イスラエルの神の櫃をおくりて本のところにかへさん。然らば我と

わが民をころすことなからん。蓋は邑中に恐ろしき滅亡おこり、神の手甚だおもく其處にくはればなり。一三 死なざる者は腫物にくるしめられ、邑の號呼天に達せり。

◎アシドドは、ペリシテ人の五つの都市の一つにて、其處には彼等が信仰するダゴンの社があつた。ダゴンといふのは、腰から上が女の姿で、腰から下は魚の形をした、所謂人魚の如き偶像であつた。ペリシテ人がイスラエル人から奪ひ取つた神の櫃を、ダゴンの社に持來り、ダゴンの傍に置いたといふのは、自分等の崇むる神が、イスラエル人の神に打勝つたことを、あらはすものであつたらしい。此の如く世には、自分たちのかねがね信仰する偶像をそのまゝに差措き、もう一つその上に眞の神を請じ來つて、之をその傍に置かんと試むる者が多くある。即ち彼等は神と貨とに兼事へ、又は此の世と神の祝福とを兼有せんことを試むものである。然しながら人は到底、同時に二人の主なるに事ふることは出來ない。茨と共に育つた麥は、茨に塞がれて果を結ばな

いと同じ道理である。神の櫃はダゴンの傍に、並べ置かるべきものではなかつたのである。(一、二)

◎アシドド人が次の日早く起きて、社に行いて見ると、エホバの櫃の前に、ダゴンが俯伏に地にたふれて居るのを見出した。眞の神の他に神はない。萬軍のエホバ如此いひたまふ、われは始なり、われは終なり。われの外に神あることなし。(イザ四四・六) 又「なんぢらはわが證人なり。我のほかに神あらんや。我のほかには誓あらず。われその一つだに知ることなし」(イザ四四・八) などとあり。それ故預言者エリヤは後に、エホバとバアルとの間に、曖昧な信仰的態度をとれるその時代の人民を戒めて、「汝等何時まで二つの物の間にまよふや。エホバ若し神ならば之に従へ、されどバアル若し神ならば之に従へ」(列上二八・二二) というたのである。神の櫃の前にダゴンが俯伏にたふれて居つたといふのは、私共が一切の偶像を捨て、たゞ神のみ拜むべきことを示すものである。「イスラエルよ、聽け、我らの神エホバは唯一のエホバなり。汝こそを盡し、精神を盡し、力を盡して、汝の神エホバを愛すべし」(申六・四、五) とあるのは、

そのことを教へたものである。(三)

◎ペリシテ人はダゴンをもとの所へ返しおき、翌朝早く起きて往いて見ると、ダゴンは前日と同じく、俯向に地にたふれて居るばかりか、その頭と兩手が鬮の上には斷ち切れ、その人の形をした上半身は全く破壊せられ、たゞその魚に似た下半身のみ、満足に残つて居るのを見出した。かくしてペリシテ人の拜む偶像は、神の櫃の前に破壊せられたのである。之を新約の光に照し見れば、私共の身體は「神の宮」である。(コリ前三・二六) 私共は神ならぬ神、即ちダゴンを、その神の宮にかざつて居ないかを吟味し、若し之を見出したなら、直ちに破壊してしまはねばならぬ。かくして私共は活ける眞の神のほかに、何者も私共の心の王國を支配することを許してはならない。偶像をつくる者はみな空しく、彼等が慕ふところのものは益なし。その證をする者は見ることなく、知ることなし。斯るが故に恥をうくべし(イザ四四・九) とあり。私共は木佛金佛を禮拜しないのみならず、金錢、名譽、權力、歡樂等、何物をも偶像として拜んではならない。(四、五)

◎エジプト人はその昔、イスラエル人をその國に引留め、奴隸として使役せんことを試むるうち、天譴がしきりにその上に加はるのを見て、餘儀なくも方針を建直すべき必要に迫られた。人民はバロに向ひ、「何時まで此の人われらの羅となるや。人々をさらしめて、その神エホバに事ふることをせしめよ。汝なほエジプトの滅ぶるを知らざるや」(出二〇・七)といひ出し、果は「我等みな死ぬると言ひて、民を催逼て速に國を去らしめん」(出二二・三三)とするに至つたのである。ペリシテ人のことが又之と似て、神の櫃のあるところ、種々なる禍がその四周の人々を襲ふのを見て、曾ては無二の戦利品と思つた神の櫃を、今は反つて持餘し、これが處置に惑ふに至つたのは、笑止千萬のことであつた。使徒パウロの言に、「自ら欺くな、神は侮るべき者にあらず。人の播く所は、その刈る所とならん」(ガラ六・七)とあり。神を侮る者の受くる報は、ただ滅亡あるのみである。(六、七)

◎イスラエル人が神の櫃を保護しない時に、神は自ら之を保護し給うた。ペリシテ人の諸君主は、神の櫃を何處に置くべきかを知らず、之をアシドドからガテに移し、ガテからまたエクロンに移した。後にバリサイ人が耶蘇に向ひ、その弟子等を戒めて、讚美の歌を禁せんことを求めると、答へて、「われ汝らに告ぐ、此のともがら黙さは、石叫ぶべし」(ルカ一九・四〇)と仰せられた。此の如く、天地萬物は神の榮を歌ふのである。又神の智慧と能力とを證してやまないものである。過ぎし時代には神、すべての國人の己が道々を歩むに任せ給ひしかど、また自己を證し給はざりし事なし。即ち善き事をなし、天より雨を賜ひ、豊穰の時をあたへ、食物と歡喜とをもて、汝らの心を満ち足らはせ給ひしなり。(使一四・一六、一七)私共はかうした神自らの證に對して、心の耳を敏くせねばならぬ。人が人としての務を怠る時にも、神は神としての御業を行はて居給ふのである。(八二一〇)

◎ペリシテ人は遂に「イスラエルの神の櫃をおくりて、もとのところにかへさん」と、決議するに至つた。後にガダラ人は、豚の群が海に向うて、崖を駆けくだり、溺れ死んだのを見て、利害の打算から、耶蘇のその地を去り給はんことを求めた。(マル五・一七)ペリシテ人のことが又之と似て、彼等は神の櫃に納められた十誠の板と、その教へる



宗教には注意しなかつたが、其の神の櫃を冒瀆する者の受くる禍を見ては之をおそれ之を國境から外に、送り出さんことを試みたのである。然しながら「人、全世界を贏くとも、己をうしなひ、己を損せば、何の益あらんや。」（ルカ九・二五）私共はさうした利害損得の打算以上に、神を崇めて、靈魂の救を求めたきものである。（二二、一二）

六 契約の櫃の歸還

（サムエル前書第六章）

一エホバの櫃七月のあひだベリシテ人の國にあり。ニベリシテ人祭司と卜筮師をよびていひけるは、我らエホバの櫃をいかゞせんや。如何にして之をもとの所にかへすべきか、我らにつげよ。三答へけるは、イスラエルの神の櫃をかへすときは、これを空しくかへす勿れ。必らず彼に過祭をなすべし。然らば汝ら愈ゆることをえ、且彼の手の汝らをはなれ

ざる故を知るにいたらん。四人々いひけるは、如何なる過祭をかれになすべきや。答へけるは、ベリシテ人の諸君主の數にしたがひて、五の金の腫物と五の金の鼠をつくれ、是は汝ら皆と汝らの諸伯におよべる災は一なるによる。五汝らの腫物の像および地をあらす鼠の像をつくり、イスラエルの神に榮光を歸すべし、庶幾は其手を汝等および汝等の神

と汝等の地にくはふることを軽くせん。汝らなんぞエジプト人とパロの其心を頑にせしごとく、おのれの心をかたくなにするや。神かれらの中に數度其力をしめせしち、彼ら民をゆかしめ、民つひにさりしにあらずや。七されば今あたらしき車一輛をつくり、乳牛のいまだ軛をつけざるもの二頭をとり、其牛を車に繋ぎ、其轅をはなして家につれゆき、エホバの櫃をとりて之を其車に載せ、汝らが過祭として彼になす金の製作物を櫃にをさめて、其傍におき、之をおくりて去らしめ、九しかして見よ、若し其境のみちよりベテシメシにのぼらば、この大なる災を我らになせる者は彼なり。若ししかせずば我儕をうちしは彼の手にあらずして、そのことの偶然なりしをさるべし。一〇人々つひに斯なし、二つの乳牛をとりて之を車につなぎ、その轅を室にとごこめ、二エホバの櫃および金の鼠と其腫物の像ををさめたる櫃を車に載す。一二牝牛直にあゆみてベ

テシメシの路をゆき、鳴きつゝ大路を進みゆきて右左にまがらず、ベリシテ人の君主ベテシメシの境まで、其うしろにしたがひゆけり。一三時にベテシメシ人谷に麥刈り居たりしが、目をあげて其櫃をみ、之を見るをよるこべり、一四車ベテシメシ人ヨシエアの田にいりて其處にとゞまる。此に大なる石あり。人々車の木を劈り、其牝牛を燔祭としてエホバにささげたり。一五レビの人エホバの櫃とこれとともなる櫃の金の製作物ををさめたる者とりおろし、之を其大石のうへに置く。しかしてベテシメシ人この日エホバに燔祭をそなへ、犠牲をささげたり。一六ベリシテ人の五人の君主これを見て同じ日にエクロンにかへれり。一七さてベリシテ人が過祭としてエホバになせし金の腫物はこれなり。即ちアシドドのために一、ガザのために一、アシケロンのために一、ガテのために一、エケロンのために一なりき。一八また金の鼠は城邑と郷里をいはず、凡て五人の

君主に屬するペリシテ人の邑の數にしたがひて造れり。エホバの櫃を貯るせし大石、今日にいたるまでセテシメシ人ヨシニアの田にあり。一九ベテシメシの人々エホバの櫃をうかひしにより、エホバこれをうちたまふ。即ち民の中七十人をうてり。エホバ民をうちて大に之をこゝろしたまひしかば、民なき

けべり。二〇ベテシメシ人いひけるは、誰かこの聖き神なるエホバのまへに立つことをえん。エホバ我らをはなれて何人のところのほりゆきたまふべきや。二かくて使者をキリアチャリムの人に遣はしていひけるは、ペリシテ人エホバの櫃をかへしたれば、汝らくだりて之を汝らの所に携へのぼるべし。

◎エホバの櫃は七月の間、ペリシテ人の國にあり。イスラエル人は集會の幕屋を有し、たけれども、その中には神の臨在の象徴と見るべき、何物も有たなかつた。それでは彼等は眞の神を禮拜する便宜を失うたかといふに、必ずしもさうではなかつた。エホバ如此いひたまふ、天はわが位、地はわが足躰なり。なんぢら我がために如何なる家をたてんとするか。又いかなる處かわが休憩の場とならん。エホバ宣く、わが手はあらゆる此等のものを造りて、これらの物ごとごとく成れり。我はたゞ苦しみ、また心をいため、我がことばを畏れ慄くものを顧みるなりと。(イザ六六・一、二)神は在さざる所なき、靈なるお方である故、私共さへ心の備をして御前に出れば、何處でも、何時で

も、その御顔を拜することが出来る。眞の禮拜者の、靈と眞とをもて父を拜する時きたらん。今すでに來れり。父は斯のごとく拜する者を求めたまふ。神は靈なれば、拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり。(ヨハ四・二三、二四)と、後に耶蘇が教へ給うたのは、その道理を示されたものである。(一)

◎ペリシテ人は、その國の祭司と卜筮師とのいふ所にしたがひ、ペリシテ人の君主たちの數にしたがひ、五つの金の腫物と、五つの金の鼠とをつくりて、それを櫃にをさめ、過祭として契約の櫃と共に置き、之によつて神を宥め、その祟を免れんことを求めた。彼等は身に腫物を患ひ、その田野の作物は鼠に荒されて居つたからである。これは極めて迷信的な仕方の様であれど、その國の祭司、卜筮師としては、腦漿をしぼつて考へ出した名案として提出せられたものであらう。今日の私共からいへば、まことの過祭は耶蘇基督の他にない。彼は私共の贖罪のために、その身を獻げ給うたからである。凡ての人、罪を犯したれば、神の榮光を受くるに足らず。功なくして神の恩恵により、基督耶蘇にある贖罪によりて義とせらるゝなり。(ロマ三・二三、二四)又「我

らは御子に在りて、贖罪すなはち罪の赦を得るなり」(コロ一・一四)とあるのは、それである。私共は罪を悔改めて、耶蘇の十字架に頼る以外に、その罪を贖はるべき道を有せないのである。(二一六)

◎ペリシテ人は新しき車一輛をつくり、乳牛のいまだ軛をつけざるもの二頭をとり、其の牛を車に繋ぎ、エホバの櫃をとりて其の車に載せ、之を送り去らしめた。而して牛が若し勝手に、ユダの境なるベテシメシ指して行くなら、腫物と鼠との災難は、エホバから来たものと見るべく、さもなければ之を偶然の事であつたと見做さう、といふことに一決した。私共の信仰生活に於ても亦、之と似て、滅多な小刀細工をするよりは、たゞ信じて神の攝理の導のまゝにまかせたがよい場合が多くある。信仰によりてアブラハムは召されしとき、嗣業として受くべき地に出で往けとの命に遵ひ、その往く所を知らずして出で往けり「ヘブ一・八」とある如きは、その一例に過ぎない。歌に「櫓も櫂も、われとはとらじ、法の舟、ただ船主にまかせてぞゆく」とあり。私共はいと大なる神の力と愛とを信じ、その生活も事業も悉く御手に委ね、安心して居る様でな

くてはならぬ。(七一九)

◎二頭の乳牛は、エホバの櫃、及び金の鼠と腫物とををさめた櫃を、車に載せたのを牽き、右にも左にもまがらず、真直に進んでベテシメシに往いた。これはペリシテ人の國に最も近い、イストラエル人の國であつた。後にダビデが「エホバよ、なんぢは人と獸とを護り給ふ」(詩三六・六)というた如く、心なき牛羊だにも、神は之に保護を加へ給ふのである。神は又預言者イザヤに語りて「牛はその主をしり、驢馬はそのあるじの厩をしる。然れどイストラエルは識らず、わが民はさとらず」(イザ一・三)と仰せられた。牛馬ですらなほ其の主人と、主人の厩とを知るからには、まして人が神を忘れ、その道を歩まざる如きことが、あるべき筈ではないのである。(二〇一・二二)

◎乳牛の牽きたる車は、ベテシメシ人ヨシユアの田に在りて、其處にとどまつた。此處に大なる石があり、レビ人はエホバの櫃をその大石の上に置き、之を載せて来た車の木を劈つて薪とし、之を牽いて来た牛を燔祭としてエホバに獻げた。この車とこの牛とは、一旦エホバの櫃を運ぶ爲に用ひられた以上、二度と他の目的のために、使用

せらるべき筈ではなかつたからである。それと同じ様に、私共が一旦その身體と所有とを、神の御用の爲に獻げたからには、之を取戻して他の目的の爲に、用ふる如きことがあつてはならぬ。汝らは斯も愚なるか、御靈によりて始まりしに、今肉によりて全うせらるゝか。(ガラ三・三)「なんぢら舊その肢體をささげ、穢と不法との僕となりて不法に到りし如く、今その肢體をささげ、義の僕となりて潔に到れ。」(ロマ六・一九)と、パウロは教へたのである。(一三一―一八)

◎ベテシメシの人々は、好奇心に驅られてエホバの櫃をうかゞうた爲、罰せられてその生命を失ふ者七十人に及んだ。私共の神に對する態度は、何處までも敬虔でなくてはならぬ。不眞面目と不信仰とは、神を侮りけがす罪に當るのである。太平洋を九十遍渡航して、海外貿易の開拓者となつた村井保固翁は、その聖書を讀む度毎に、おしいたゞいて之を開き、又おしいたゞいて之を閉ぢ、恭しく神の御言を取扱はるゝさまが、傍人をして感動に堪へざらしめた。私共は何處までも恭敬の念を以て、神とその御旨とを重んじ、謙つてその導にしたがひたきものである。(一九―二二)

七 助けの石

(サムエル前書第七章)

一 キリアテヤリムの人來り、エホバのはこを携へるほり、之を山のうへなるアビナダブの家にもちきたり、其子エレアザルを聖めてエホバの櫃を守らしむ。
二 其櫃キリアテヤリムにとどまること久しくして二十年をへたり。イスラエルの全家エホバを慕ひて歎けり。三時にサムエル、イスラエル全家に告げていひけるは、汝らもし一心を以てエホバにかへり、異なる神とアシタロテを汝らの中より棄て、汝らの心をエホバに定め、之にのみ事へなば、エホバ汝らをベリシテ人の手より救ひいださん。四こゝにおいてイスラエルの人々バアルとアシタロテをすて、エホバにのみ事ふ。五サムエルいひけるは、イスラエルの人をことごとくミヅバにあつめよ。われ汝らのため

にエホバにいのらん。大かれらミヅバに集まり、水を汲みて之をエホバの前に注ぎ、其日斷食して彼處にいひけるは、我等エホバに罪を犯したりと。サムエル、ミヅバに於てイスラエルの人を鞠く。セメリシテ人、イスラエルの人々のミヅバに集れるを聞きしかば、ベリシテ人の諸君主イスラエルにせめ上れり。イスラエル人これを聞いてベリシテ人をおそれたり。ハイスラエルの人々サムエルにいひけるは、我らのために我らの神エホバに祈ることをやむるなかれ。然らばエホバ我らをベリシテ人の手より救ひいださん。九サムエル咄乳羊をとり、燔祭となしてこれをまつたくエホバにささぐ。またサムエル、イスラエルのためにエホバにいのりければ、エホバ

これにこたへ給ふ。一〇サムエル燔祭をさしげ居りし時、ペリシテ人イスラエル人と戦はんとて近づきぬ。是日エホバ大なる雷をくだし、ペリシテ人をうちて之を亂し賜ひければ、ペリシテ人イスラエル人の前に敗れたり。一一イスラエル人ミヅバをいでてペリシテ人をおひ、之をうちてベテカルの下にいたる。一二サムエル一の石をとりてミヅバとセンの間におき、エホバは是まで我らを助けたまへりといひて、其名をエベネゼル（助けの石）と呼ぶ。一三ペリシテ人攻め伏せられて再びイスラエルの境にいらす、サムエルの一生のあひだエホバの手ペリシテ人をふ

せげり。一四ペリシテ人のイスラエルより取りたる邑々はエクロンよりガテまでイスラエルにかへりぬ。また其周囲の地はイスラエルこれをペリシテ人の手よりとりかへせり。又イスラエル人とアモリ人と好むすべり。一五サムエル一生のあひだイスラエルをさばき、一六歳々ベテルとギルガルおよびミヅバをめぐりて、其處々にてイスラエル人をさばき、またラマにかへれり。此處に其家あり。此にてイスラエルをさばき、又此にてエホバに壇をきづけり。

◎思はぬ出来事が、人の心事をあらはす機会となることが多くある。ベテシメシ人はエホバの櫃を迎へて、一時も早くその他に去り行かんことを求めたに反し、キリアテヤリムの人々は、一日も長く其の地に留めおかんことを望んだやうである。斯して二つの邑人の信仰状態は、そのエホバの櫃に對する態度に於て、試験せられたのである。

支那の昔、薄い水飴が發明せられた時、親孝行の曾子は、「これ老人を養ふに 詭向の食物である」というて喜び、大泥棒の盜跖は、「これ闕に流して、戸をこじあけるに都合のよい品である」と褒めた。此の如く人の心は何かの機會に、外にあらはるゝものである。中にも最も多く私共の人柄、心柄をあらはすものは、その救主基督に對する態度である。すなはちシメオンが幼兒耶蘇を祝福して、「視よ、この幼兒は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん爲に、また言ひ逆ひを受くる徴のために置かる。これは多くの人の心の念の顯れん爲なり」（ルカ二・三四、三五）というたのは、間違のない話である。耶蘇の十字架は人生の、最も大なる試金石である。（一、二）

◎サムエルはイスラエルの全家に告げて、「汝らもし一心を以てエホバにかへり、異神とアシタロテ（偶像の名）を汝らの中より棄て、汝らの心をエホバに定め、之にのみ事へなば、エホバ汝らをペリシテ人の手より救ひいださん」というた。禍の根源は外にあらすして内にある。イスラエル人さへ一心を以てエホバにかへり、敬虔にして眞面目なる生活を營むやうになつたら、ペリシテ人も何等加ふる所あり得ないといふのが、

サムエルの主張であつた。歌に「外からは、手もさへられぬ要害を、内からやぶる、栗のいが哉」とあり。國民にとつても、個人にとつても、大切なるは其の第一のものを第一におくべきことである。それ故耶蘇は、「まづ神の國と神の義とを求めよ。然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし」(マタ六・三三)と、仰せられたのである。(三、四)

◎サムエルは賢明なる預言者、公平なる士師であると共に、又力ある祈の人であつた。彼はイスラエルをミヅバに集め、その爲に特にエホバに祈ることとなつた。その「水を汲み、之をエホバの前に注いだ」といふのは、「民よ、いかなる時にも神によりたのめ。その御前になんぢらの心をそそぎいだせ。」(詩六二・八) 又「主の御前に汝の心を水のごとく灌げ」(哀二・一九)とある意味を寓したものであらう。イスラエル人はかくして、水を汲んで、ホバの前に注ぐと共に、又斷食祈禱を以て罪の赦を祈り求めた。「神のもとめ給ふ祭物はくだけたる靈魂なり。神よ、なんぢは碎けたる悔いしこゝろを藐しめ給ふまじ。」(詩五一・一七) 神が喜んで彼等に聽き、之に憐憫と恩恵とを加へ給うたのも、更に不思議はないのであつた。(五、六)

◎ペリシテ人はイスラエルの人々の、ミヅバに集れるを聞き、兵を率ゐて攻め上つた。折角神を禮拜する爲に集つたことが、反つて敵國外患を誘致したのは、心外千萬のことである。然しそれさへ神の攝理の下に、反つて敵軍を撃破する機會となり、國家安康の基となつたのを見れば、私共は目前一時の變調子な出來事の爲に、滅多に氣を取亂してはならぬ。さうした場合には、尙更神を仰ぎ望み、その御力に頼るべき必要がある。イスラエル人はサムエルに向ひ、「我らのために我らの神エホバに祈ることをやむるなかれ。然らばエホバ、我らをペリシテ人の手よりすくひいださん」というた。そこでサムエルは燔祭を神にさしげ、イスラエル人の爲に祈ると、エホバはその祈に應へ給うた。サムエルはギデオンの如く、武力を以て敵に當る者ではなかつた。けれども彼は信仰の祈を以て、その人民の爲に執成したのである。彼の祈には力があつた。スコットランドの女王メリーは、ジョン・ノックスの祈を、一師團の軍隊よりも力あるものとして恐れた。サムエルの此の場合に於ける祈が又此の如く、それはペリシテ人の強い軍隊を、粉微塵に碎くに足つたのである。彼の祈は幾つかの師

團を合せたよりも、力強いものであつた。(七一九)

◎神は大なる雷をくだし、ペリシテ人をうちて之を亂し給うた故、ペリシテ人はイスラエル人の前に敗れて散々になつた。戦終りて後、サムエルは一つの石をとりて、ミヅバとセンとの間におき、「エホバは是まで我らを助けたまへり」といひ、その名をエベネゼル(助けの石)と呼んだ。ペリシテ人は攻め伏せられて、再びイスラエルの境にいらず、サムエルの一生のあひだ、エホバの手ペリシテ人をふせいだ、とある。今日の私共も亦、そのこれ迄に辿り來つた生活を顧み、其の自分共の側に不行届不満足のことのみ多かつたに拘らず、神の恵と助とが如何にも廣大無邊であつたことを思ふと、そこにエベネゼル(助けの石)を建て、之を感謝したい氣持がするのである。それと同じに、私共は又過去の經驗を踏臺として、更に一段の進境を志すべき必要を感じずる。汝これよりも更に大なる事を見ん。(ヨハ一・五〇)「後のものを忘れ、前のものに向ひて勵み、標準を指して進み、神の基督耶穌に由りて、上に召したまふ召にかゝはる褒美を得んとて、之を追求む」(ペリ三・一三、一四)などといふ、御教訓もあるではない

か。(一〇一四)

◎サムエルは一生の間、イスラエルをさばき、歳々ベテルと、ギルガル、及びミヅバをめぐり、其の處々にてイスラエル人をさばき、ラマにかへり、其處でも種々裁判事件を取扱ふと共に、又エホバに壇を設けて、之を禮拜して居つた。彼は或る意味に於て、後に世に現れ給うた耶穌の如く、「徧くめぐりて善き事をおこなう」(使一〇・三八)た者である。彼はその人民を祝福する爲に生きた。彼は萬民に奉仕する爲に、一身を獻げた、最も忠實なる公僕であつた。(一五一七)

八 王なかるべからず

(サムエル前書第八章)

一サムエル年老いて、其子をイスラエルの士師となす。二兄の名をヨエルといひ、弟の名をアビヤといふ。ベエルシバにありて士師たり。三其子父の

道をあやまずして利にむかひ、賄賂をとりて審判を曲ぐ。四是においてイスラエルの長老みなあつまりてラマにゆき、サムエルの許に至りて五これにいひ

けるは、視よ、汝は老い、汝の子は汝の道をあゆま
ず。さればわれらに王をたて、われらを鞫かしめ、
他の國々のごとくならしめよと。六その我らに王を
あたへて我らを鞫かしめよといふを聞きてサムエル
よろこばず、而してサムエル、エホバにいのりしか
ば、七エホバ、サムエルにいひ給ひけるは、民のす
べて汝にいふ所のことばを聽け。其は汝を棄つるに
あらず、我を棄て我をして其王とならざらしめんと
するなり。八彼らはわがエジプトより救ひいだせし
日より今日にいたるまで、我をすて、他の神につか
へて種々の所行をなせしごとく、汝にもまた然す。
九然れどもいま其言をきけ。但し深くいさめて其治
むべき王の常例をしめすべし。一〇サムエル王を求
むる民に、エホバのことばをことごとく告げて、二
いひけるは、汝等をなむる王の常例は斯の如し。
汝らの男子をとり、己の爲に之をたて、車の御者と
なし、騎兵となし、また其車の前驅となさん。一二ま

ぐ。二二エホバ、サムエルにいひたまひけるは、か
れらのことばを聽き、かれらの爲に王をたてよ。サ

ムエル、イスラエルの人々にいひけるは、汝らおの
おの其邑にかへるべし。

◎幼年の頃からエホバの前に奉仕したサムエルも、今は年老いて、自分一人ではその
務に堪へかね、二人の子を士師に任ずる様になつた。それにしても彼の生涯は神に獻
げられたる聖徒の生涯であつた。エホバは彼と偕に在し、その言をして一つも地に落
ちざらしめ給ひ、彼のいふところは、徧くイスラエル人に及んだのである。(サム前三・
一九、二〇) 彼は主にあつて幸福なる老人であつたと、いはねばなるまい。アンテオケ
のイグナシヤスは、又その一生を神への奉仕にさしげ、信仰によれる幸福をあくまで
體驗した人であつた。その八十に近い高齡を以て、殉教者の最後を遂げんとするに當
り、彼は微笑みつゝ、「これでどうやら、弟子たちの仲間入が出来さうだ」というて、
喜んださうである。歌に「かみたのむ、心はつよし、身は老いて、はたらく手足、弱
くなれども」とあり。神を頼む老聖徒は心強いのである。(一)

◎支那の昔に、理想的の君主といへば、堯と舜とであつた。然るに歴史には、「堯の子

た之をおのれの爲に千夫長、五十夫長となし、ま
た其地をたがへし其作物を刈らしめ、また武器と車
器とを造らしめん。一三また汝らの女子をとりて製
香者となし、厨婢となし、炙麴者となさん。一四又
汝らの田畝と葡萄園と橄欖園の最も善きところを取
りて其臣僕にあたへ、一五汝らの穀物と汝らの葡萄
の什分一をとりて其官吏と臣僕にあたへ、一六また
汝らの僕婢および汝らの最も善き牛と汝らの驢馬
を取りて己のために作かしめ、一七又汝らの羊の十
分一をとり、又汝らに其僕となさん。一八其日にお
いて汝等己のために擇みし王の事によりて呼號ら
ん。されどエホバ其日に汝らに聽き給はざるべしと。
九然るに民サムエルの言にしたがふことをせずし
ていひけるは、否、われらに王なかるべからず。二〇
我らも他の國々の如くになり、我らの王われらを鞫
き、我らを率ゐて我らの戦にたゝかはん。二二サム
エル民のことばを盡くきして、之をエホバの耳に告

丹朱不肖なり。「舜の子昭均不肖なり。」とあり。高德の人の子に、折々肖ても肖つかぬ者を出すのは、遺憾なこと、いはねばならぬ。こゝにエリの子が間違を起した後に(サム前二・一三)今度は又、サムエルの子等が、ふしだらを仕出かしたといふのは、残念千萬のことである。これは親にも注意の届かぬ所があり、子にも心得の至らぬ所があつて、さうした結果を見たのであらう。今私共は神を父と呼ぶ所の、その子等であるからには、私共は亦天の父に對する不肖の子供であつてはならぬ。そのことについてペテロの言に、「従順なる子等の如くして、前の無知なりし時に慾に效はず、汝らを召し給ひし聖者に效ひて、自ら凡ての行狀に潔かれ。録して『われ聖なれば、汝らも聖なるべし』とあればなり」(ペテ前一・一四—一六)というてある。記憶して忘るべからざることである。(二、三)

◎その頃までイスラエルには、王といふものがなかつた。モーセも、ヨシユアも、士師たちも、皆たゞ神の御言を取次ぎ、その御旨を行ふことを努め、所謂神政政治を行つたもので、これ迄誰一人として、彼等に君臨した者はなかつた。然しながら今はイスラエルの長老等が、打連れてサムエルの許に來り、「視よ、汝は老い、汝の子は汝の道を歩まず。さればわれらに王をたて、われらを鞫かしめ、他の國々のごとくならしめよ」と、請求するに至つたのである。けれども今日の私共には、夙に王を興へられて居る。耶穌基督は私共の靈魂の上の王者である。「彼らは羔羊と戦はん。而して羔羊かれらに勝ち給ふべし。彼は主の主、王の王なればなり。これと偕なる召されたるもの、選ばれたるもの、忠實なる者も勝を得べし。」(黙一七・一四)私共は潔められて、その身と心とを彼の支配の下におくことにより、一切の罪と禍とに打勝つことを得るのである。(四、五)

◎サムエルはイスラエル人の爲に甚く憂へた。これは彼等が隣國の民に倣うて王を求むることが、同時に又、隣國の民の如くあだし神につかへて、種々の所行をなす機會とならんことを、恐れたからである。然しながら神は神である。王は王である。まことの敬神とまことの忠君とは、並び行はれて相悖ることなきものである。「カイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ」(マタニ二・二二)と、耶穌が後に仰せられたのは、

その道理を教へたものである。神がイスラエル人の願を容れて、之に王を興ふべきことを、サムエルに命じ給うたのも、怪しむに足りないのである。(六一九)

◎サムエルは神の命をうけ、イスラエル人に告げて、彼等が王を戴くことは、その爲に如何なる負擔をすることであるかを、説聞かせた。「汝らををさむる王の常例は斯の如し。汝らの男子をとり、己の爲に之をたて、車の御者となし、騎兵となし、また其の車の前驅となさん。また之をその爲に千夫長、五十夫長となし、また其の地をたがへし、其の作物を刈らしめ、また武器と車器とを造らしめん。また汝らの女子をとりて製香者となし、厨婢となし、炙麵者となさん云々」と。つまりその君主に對して、賦役を甘んじ、徴兵に應じ、納税の義務を果す等、臣民としての義務を行ふ用意あるべきことを、示したのである。後にパウロがローマ人に向ひ「凡ての人、上にある權威に服ふべし。そは神によらぬ權威なく、あらゆる權威は神によりて立てらる。この故に權威にさからふ者は神の定に悖るなり。悖る者は自らその審判を招かん。汝等その負債をそのものに償へ。貢を受くべき者に貢ををさめ、税を受くべき者に税ををさめ、畏るべき者をおそれ、尊ぶべき者をたふとべ。」(ローマ一三・一、二、七)というたのも、思ひ合さるゝのである。(二〇一—一八)

◎イスラエルが、神政政治から君主政治に移つたのは、その人民の切なる希望を、神が聞き入れ給うたものであつた。しかも之を人民の爲に、神に執成した者はサムエルであつた。サムエルは神の御旨を取次いで、これまで神政政治の下にあつたイスラエル人を、君主政治の下に、支配をうくる者とならせたのである。此の如く神は、その行届いた攝理の下に、諸の國民をそれぞれ宜しきに適うて、統べ治めしめ給ふ。我が日本が萬世一系の皇室を戴き、所謂一君萬民の國體を有する如き、又實に神の大御心の然らしむるところでなくてはならぬ。あゝ神の智慧と知識との富は深いかな。その審判は測り難く、その途は尋ね難し。(ローマ一・三三)とは、此を之謂ふのである。(一九—二二)

九 驢馬を尋ねて

(サムエル前書第九章)

一茲にベニヤミンの人にてキシと名づくる力の大きなものあり。キシはアビエルの子、アビエルはゼロンの子、ゼロンはベコラテの子、ベコラテはアビヤの子、アビヤはベニヤミンの子なり。ニキシにサウルと名づくる子あり。壯にして美はし。イスラエルの子孫の中に彼より美はしき者なく、肩より上民のいづれの人よりも高し。ミサウルの父キシの驢馬失せぬ。キシ其子サウルにいひけるは、一人の僕をもなひ、起ちてゆき、驢馬を尋れよ。四サウル、エフライムの山地を通り過ぎ、シヤリシヤの地を通りすぐれども見あたらす。シヤリムの地を通りすぐれども居らず。ベニヤミンの地をとほりすぐれども見あたらす。五かれらツフの地に至れる時、サウル其ともなへる僕にいひけるは、いざ還らん。恐らくはわが父驢馬の事を措きて我等の事を思ひ煩はん。六僕これにいひけるは、此邑に神の人あり。尊き人にして其言ふところは皆必ず成る。我らかしこに

かれにあはん。其は彼まづ祭品を祝してしかるのち招かれたる者食ふべきに因り、かれが来るまでは民食はざるなり。故に汝らのぼれ、今かれにあはんと。一四かれら邑にのぼりて邑のなかにいるとき、視よ、サムエル崇邱にのぼらんとて彼らにむかひて出てきたりぬ。一五エホバ、サウルのきたる一日まへにサムエルの耳につけていひ給ひけるは、一六明日いままごろ我ベニヤミンの地より一個の人を汝につかはさん。汝かれに膏を注ぎてわが民イスラエルの長となせ。かれわが民をベリシテ人の手より救ひいださん。わが民のさげび我に達せしにより、我これをかへりみるなり。一七サムエル、サウルを見ると、エホバこれにいひたまひけるは、視よ、わが爾につげしは此人なり。是人わが民をなさむべし。一八サウル門の中にてサムエルにちかづきいひけるは、先見者の家はいづくにあるや。請ふ我につげよ。一九サムエル、サウルにこたへていひけるは、我はすなはち

至らん。かれ我らがゆくべき路をわれらにしめすとあらん。七サウル僕にいひけるは、我らもしゆかば何を其人におくらんか。器のパンは既に罄きて神の人におくるべき禮物あらず。何かあるや。八僕またサウルにこたへていひけるは、視よ、我が手に銀一シケルの四分の一あり。我これを神の人にあたへてわれらに路をしめさしめんと。九昔イスラエルにおいては人神にとはんとてゆくときは、いざ先見者にゆかんといへり。其は今の預言者は昔は先見者とよばれたればなり。一〇サウル僕にいひけるは、善くいへり。いざゆかんとて、神の人のなる邑におもむけり。一二彼ら邑にいる坂をのぼれる時、童女數人の水くみにいづるにあひ、之にいひけるは、先見者は此に在るや。一三答へていひけるは、在る。視よ、汝のまへに在る。急ぎゆけ、今日民崇邱にて祭をなすにより、彼けふ邑にきたれり。一四汝ら邑にいる時彼が崇邱にのぼりて食に就くまへに直ちに

先見者なり。爾わがまへにゆきて崇邱にのぼれ。爾ら今日我とともに食すべし。明日われ汝をさらしめ、汝の心にあることを悉く汝にしめさん。二〇三日まへに失せたる汝の驢馬は既に見あたりたれば之をおもふなかれ。抑イスラエルの總ての寶は誰の者なるや。即ち汝と汝の父の家のものならずや。二一サウルこたへていひけるは、我はイスラエルの支派の最も小き支派なるベニヤミンの人にして、わが族はベニヤミンの支派の諸の族の最も小き者に非ずや。なんぞ斯ることを我にかたるや。二二サムエル、サウルと其僕をみちびきて堂にいり、招かれたる三十人ばかりの者の中の最も上に坐せしむ。二三サムエル庖人にいひけるは、わが汝にわたして汝の許におけといひし分をもちきたれ。二四庖人肩と肩に屬ける者を取りあげて、之をサウルのまへに置く、サムエルいひけるは、視よ、是は存へおきたる物なり。汝のまへにおきて食へ。其はわれ民をまねきし時よ

リこれを汝の爲にたくはへおきたればなり。かくてサウル此日サムエルとともに食せり。二五崇邱をくだりて邑にいりし時、サムエル、サウルとともに屋背の上にてものがたる。二六かれら早くおく。即ちサムエル、曙に屋背の上なるサウルをよびて言ひけるは、起きよ。われ汝をかへさんと。サウルすなは

ちおきあがる。サウルとサムエルともに外にいて、二七邑の極處にくだれるとき、サムエル、サウルにいひけるは、僕に命じて我等の先にゆかしめよ。我先にゆく。しかして汝暫くとままれ。我汝に神の言をしめさん。

◎ベニヤミン人キシは「力の大なるものであつた。」キシにサウルと名づくる子あり。壯にして美し。イスラエルの子孫の中に、彼より美しき者なく、肩より上、民のいづれの人よりも高し」とあり。如何にサウルが堂々たる體軀を有する偉丈夫であつたかを、察するに足るのである。その昔モーセは「美しき子」(ヘブ一・二三)として生れ、長じて後、道を行けば會ふ人が皆、振向いて見る程の美丈夫であつた。その上に彼は、「エジプト人の凡ての學術を教へられ、言と業とに能力があつた。」(使七・二二)けれども彼は、「信仰に由りて人と成りしとき、バロの女の子と稱へらるゝを否み、罪のはかなさ歡樂を受けんよりは、寧ろ神の民とともに苦まんことを善しとし、基督に因る謗は、

エプトの財寶にまさる大なる富と思つた」(ヘブ一・二四―二六)とあり。不幸にしてサウルは、その外貌こそモーセに劣らぬくらゐ、立派であつたが、その信仰生活に於ては、彼の側に寄りつくことも出来ない程、程度の底いものであつた様に見える。(二―三) ◎サウルは一人の僕を伴ひ、その父キシの失せたる驢馬を尋ね、遠くツアの地に至れる時、最早いゝ位に見切をつけて家に歸らずば、その父は彼のことを案じて居らるゝであらうと心づき、そのことを僕にはかると。僕は答へて、「此の邑に神の人あり。尊き人にして、其の言ふところは皆必ず成る。我らかしこに至らん。かれ我らがゆくべき路を、われらにしめすことあらん」というた。この神の人といふのは、老いたる預言者サムエルのことであつた。「一箇の聖徒は十哩以内を風化する」といふことがあり。サムエルの場合が又此の如く、否、それよりも以上に、彼はその地方一圓に、善良なる感化を及ぼして居つたようである。フェネロンと共に一週間を過せば、回心して基督者とならざる者はなかつた、といふこともあれば、私共も基督的の品性と生活とを以つて、その地方の光ともなり、又鹽ともなりたきものである。(三―一〇)

◎邑に入る坂を上れる時、數人の若き女等が水を汲みに出づるに會ひ、之にサムエルの所在を尋ねると、彼等は懇切に之に答へ、丁寧に行くべき道を教へてくれた。如何にそれらの若い女等に迄も、日頃からサムエルの感化が及んで居つたか、知らるゝのである。「薔薇を植ゑた園は、土までもかんばんしき香を有する」とは、かうした状をいふものかと思はれて、如何にも奥床しいことである。(二一一三)

◎神はその前日、サムエルに向ひ、「明日いまごろ、我ベニヤミンの地より、一箇の人を汝につかはさん。汝かれに膏を注ぎて、わが民イスラエルの長となせ。かれわが民をペリシテ人の手より救ひいださん」との啓示を與へ給うた。之を人の側からいへば、失せたる驢馬を尋ねて、あてどもなく出で來つたのである。けれども之を神の側から見れば、然るべき時、然るべき場所に、然るべき人を遣し給ふ御取計に過ぎなかつた。此の如く神の攝理は、私共のそれと心づかない時にも、斷えず一切萬事の上に行はれて居る。それ故サマリヤの女は、飲料水を汲みに出て、反つて「永遠に渴くことなき生命の水」(ヨハ四・一四)を見出したのである。タルソのサウロは、基督の弟子を迫

害せん爲に出で行き、反つて救主基督に面接して、新しき生活と使命とを發見するに至つたのである。(使九・一六)實に神は「我らの凡て求むる所、すべて思ふ所よりも、甚く勝る事をなし得る者」(エヘ三・二〇)で在し給ふ。榮光世々限なく彼にあれ。(二四一七)

◎サムエルはサウルに向ひ、彼がイスラエル人の王として、立てらるべき者であることを仄すと、サウルは驚き、「我はイスラエルの支派の、最も小き支派なるベニヤミンの人にして、わが族はベニヤミンの支派の、諸の族の最も小き者に非ずや。なんぞ斯ることを我にかたるや」と答へた。神は人が自らの弱く、且力なきことを悟り、謙つて上よりの導と力とを求むる時、之を受けいれてその御業の爲に用ひ給ふ。サウルが最も小き支派に屬する、最も小き者であると、自ら考へた時に、神は彼を選び給うたのである。然しながら彼が他日自ら恃み、自ら用ふるに至つて、忽ち之を見捨て給うた。(サム前一五・二二、二三)「人の心のたかぶりは滅亡に先だち、謙遜はたふとまるゝ事に先だつ」(箴一八・一二)とは、その謂である。(一八一二)

◎サムエルは屋根の上にてサウルと物語り、翌朝彼を送り還す時には、その僕に命じ

て先に行かしめ、彼を後に留めて、之に神の御言を告げた。此の如く信仰上の大事な問題は、膝詰で話すに限るのである。神の御前に、一人が一人を對手とし、心の誠を披瀝して、所謂赤心を人の腹中に置く位、有効な談話の仕方は他にないのである。それ故耶蘇の御生涯を見ても、その短い年月の間を、比較的最も多く、個人との對談に用ひ給うたことを見出すのである。ピーチャーはいうた。「私は年をとる程、一人が一人を對手の説教の、最も有效なることを學ぶのである」と。もつともつと個人の爲に執成の祈をなし、又個人を基督の恵に導く爲に、力を盡したきものである。(二二―二七)

一〇 最初の王

(サムエル前書第十章)

一サムエルすなはち膏の瓶をとりてサウルの頭に沃ぎ、口接していひけるは、エホバ汝をたて、其産業の長となしたまふにあらずや。二汝今日我をばなれ

て去りゆく時、ベニヤミンの境のゼルザにあるラケルの墓のかたはらにて二人の人にあふべし。かれら汝にいはいはん。汝がたづねにゆきし驢馬は見あたりぬ。

汝の父驢馬のことをすて、汝らのことをおもひわづらひ、わが子のことをいかげすべきやといへりと。三其處より汝尙すゝみてタホルの橡の樹のところにとらん、彼處にてベテルにのぼり、神にまうてんとする三人の者汝にあはん。一人は三頭の山羊羔を携へ、一人は三團のパンをたづさへ、一人は一囊の酒をたづさふ。四かれら汝に安否をとひ、二團のパンを汝にあたへん。汝之を其手よりうくべし。五其の後汝神のギベアにいたらん。其處にペリシテ人の代官あり。汝彼處にゆきて邑にいるとき、一群の預言者の瑟と鼓と笛と琴を前に執らせて預言しつゝ崇邱を下るにあはん。六其の時神のみたま汝にのぞみて汝かれらとともに預言し、變はりて新しき人とならん。七是らの徴汝の身におこらば、手のあたるにまかせて事を爲すべし。神汝とともにいませばなり。八汝我にさきだちてギルガルにくだるべし。我汝の許にくだりて燔祭を供へ、酬恩祭を獻げん。わが汝

のもとに至り、汝の爲すべきことを示すまで、汝七日のあひだ待つべし。九サウル背をかへしてサムエルを離れし時、神之に新しき心をあたへ給ふ。しかして此しるし皆その日におこれり。一〇ふたり彼處にゆきてギベアに至れるとき、視よ一群の預言者、これにあふ。しかして神の靈サウルにのぞみて、サウルかれらの中において預言せり。一一素よりサウルを識る人々、サウルの預言者と偕に預言するを見て互にいひけるは、キシの子サウルいま何事にあふや。サウルも預言者の中にあるやと。一二その處の人ひとり答へて、彼等の父は誰ぞやといふ。是故にサウルも預言者の中にあるやといふは諺となれり。一三サウル預言を終へて崇邱にいたるに、一四サウルの叔父サウルと僕にいひけるは、汝ら何處にゆきしや。サウルいひけるは、驢馬を尋ねに出しが、何處にもをらざるを見てサムエルの許にいたれり。一五サウルの叔父いひけるは、サムエルは汝に何をいひしか、

請ふ我につげよ。一六サウル叔父にいひけるは、明かに驢馬の見あたりしを告げたりと。然れどもサムエルが言へる國王の事はこれにつげざりき。一七サムエル民をミツバにてエホバのまへに集め、一八イスラエルの子孫にいひけるは、イスラエルの神エホバ斯くいひたまふ。我イスラエルをみちびきてエジプトより出し、汝らをエジプト人の手、および凡て汝らを虐遇る國人の手より救ひいだせり。一九然るに汝らおのれを患難と難苦のうちより救ひいだしたる汝らの神を棄て、且否、われらに王をたてよといへり。是故にいま汝等の支派と郡にしたがひてエホバのまへに出よ。二〇サムエル、イスラエルの諸の支派を呼びよせし時、ベニヤミンの支派にあたりぬ。二一またベニヤミンの支派を其族のみに従ひて呼びよせしとき、マテリの族にあたり、キシの子サウルにあり。人々かれを尋ねしかども見

出さざれば、二二またエホバに、其人は此に來るや否やを問ひしに、エホバ答へ給はく、視よ、彼は行李のあひだにかくると。二三人々はせゆきて彼を其處よりつれきたれり。彼民の中にたつに肩より以上民の何の人よりも高かりき。二四サムエル民にいひけるは、汝らエホバの擇みたまひし人を見るか。民のうちには是人の如き者なし。民みなよばはりいひけるは、願くは王のちながかれ。二五時にサムエル王國の典章を民にしめして之を書にしるし、之をエホバのまへに藏めたり。而してサムエル民をことごとく其家にかへらしむ。二六サウルもまたギベアの家にかへるに、神に心を感ぜられたる勇士等これと共にゆけり。二七然れども邪なる人々は彼人いかに我らを救はんやといひて之を藐視り、之に禮物をおくらざりしかど、サウルは唾のごとくせり。

◎サムエルはサウルの僕をやり過し、サウルを後に留めて、その頭に膏を注ぎ、口接して、「エホバ汝をたて、其の産業の長となし給ふにあらずや」というた。膏を注いだといふのは、彼を王位に即かしむる爲の就任を意味する。元來膏は聖靈の型である。神から任ぜられて何かの役割を務めんとする者は、誰も皆聖靈によつて膏注がるべき必要がある。耶蘇がナザレに歸り、會堂にて、「主の御靈われに在す。これ我に油を注ぎて、貧しき者に福音を宣べしめ云々」といふ、イザヤの書の數節を讀みたる後、「この聖書は今日、なんぢらの耳に成就したり」(ルカ四・一八―二二)と宣うたのは、その爲であつた。今日の私共も亦、聖靈によつて膏注がれて後、はじめて神の器となり、その御用を務むるに堪ゆるのである。「なんぢらの衷には、主より注がれたる油とゞまる故に、人の汝らに物を教ふる要なし。此の油は汝らに凡ての事を教へ、かつ眞にして虚偽なし。汝らはその教へしごとく主に居るなり。」(ヨハ壹二・二七)などであるのは、同じ道理を教ゆるものである。(一)

◎かくて後、サムエルはサウルに向ひ、神が彼に、此の際三つの休徴を與へ給ふべき

ことを告げた。その第一は、ラケルの墓の傍にて、二人の人が彼に會ひ、その父の失せたる驢馬は見當りたるを、告ぐべきことであつた。これは最早彼が父の家を忘れて、身を神への奉仕に委ぬべきことを、示したものである。第二に、彼はタボルの橡の樹のところにて、神詣の爲にベテルに上る三人の者に會ふべく、而して彼等は二團のパンを、彼に與ゆべきことであつた。これは彼が先づ神の國と神の義とを求むれば、その他の入用なものは、彼に加へらるべきことを、示すものであつた。第三には、彼がギベアに至らん時、預言者學校の徒弟等が、瑟と鼓と笛と琴とを前に執らせて、預言しつゝ下り來るに會ふべく、その時神の御靈は彼に臨み、彼は新しき人となるべし、といふのであつた。耶蘇は後に、「人あらたに生れずば、神の國を見ること能はず。」(ヨハ三・三)と宣ひ、パウロは又「人もし基督に在らば、新に造られたる者なり。古きは既に過去り、視よ新しくなりたり。」(コリ後五・一七)というて居る。三つの休徴は此の際あたかも、彼が要する所の心靈上の恵を如實にあらはすものであつた。(二一八)

◎サウルは間もなく、三つの休徴を目撃したのみならず、彼自ら、預言者學校の徒弟と共に預言し始めたのを見て、人々は訝り、「サウルも預言者の中にあるや」というたが、それが永く遺つてその國民の諺となるに至つたのである。此の如く神の御靈は、一朝俗人を變へて預言者とならせ給ふのである。後年このサウルと同じ名前のサウロは、基督教の迫害者であつたが、基督に救はれ、聖靈にて滿された結果、豹變して、「異邦人、王たち、イスラエルの子孫のまへに、耶蘇の名を持ちゆく選の器」(使九・一五)となつたやうな例もある。歌に「さよさなかれあり、神のみさよりわきいで、罪人をさよめて、聖徒とならしむ」とあり。御靈は今も人を新に造る所の不思議な力で在し給ふ。(九一一二)

◎サウルの叔父は、サムエルが、彼に何を語つたかを尋ねた。そこでサウルは、彼が失せたる驢馬の早や見出されたことを告げた旨を答へた。けれどもサムエルが、彼を王に任じたことは、遠慮して語らなかつた。サー・エドワード・クックが、ロード・ベーンの前にて、自分の手柄話を始めると、ベーンは彼に向ひ、「君が自分の偉いことを語ることのより少き程、私は君の偉いことをより多く信ずるであらう」というた。

「真正の偉人は、己が偉人たることを知らざるものである」といふこともあり。サウルが此の際に於ける謙遜な態度は、甚だ喜ぶべきものであつた。(一三一―一六)

◎サムエルは前に、自分一人でサウルに膏注いだのを以て満足せず、此の度は又、人民の代表者等をミヅバに集め、籤にてサウルが王として選ばれた人であることを、確實にした。其の際サウルが身を行李のあひだに隠したといふのは、その初々しい、はにかんだ様子が察せらるゝ。しかもその愈々引出されて、民の中に立つや、肩より以上、何の人よりも高かつた。人民が喜び、「願くは王のちながかれ」というたのは、今の私共の言でいへば、一同が萬歳を唱へたことに當るのである。この國の主権者に對し、萬歳を唱ふる一事に於ては、東西古今を通じて、恐らく我が日本の國民くらゐ、熱誠と眞實を籠むるものは、他にないであらう。その軍人が戰場に最後の息を引取る時、なほ且「天皇陛下萬歳」を唱へて絶命する如き、悲壯な實例も多いのである。これは所謂日本精神の一つの顯現として、世界に誇るに足るものであらう。(一七一―二四)

◎サウルがイスラエルの最初の王として、その位に即きたる後、先づギベアの家に戻ると、「神に心を感ぜられた勇士」等の、之と共にゆく者もあつたが、邪なる人々は、「彼のいかに我らを救はんや」というて、之をさげすみ侮つた。此の如く今も王の王なる基督に對し、素直にその御旨を畏み、御軍に参加する勇士も少くないと共に、一方には又彼を侮り、その御旨に逆ひ、「我らは此の人の我らの王となるを欲せず」(ルカ一九・一四)といふ輩も、中々多いのである。けれども神は、やがてあらゆる人々の上に、その公平なる審判を行ひ給ふ。「神はおのおのの所作に隨ひて報い、耐忍びて善を行ひ、光榮と尊貴と朽ちざる事とを求むる者には、永遠の生命をもて報い、徒黨により眞理に従はずして不義にしたがふ者には、怒と憤恚とをもて報い給はん。」(ロマニ・六一―六八)とあり。畏れてつゝしむべきことではないか。(二五―二七)

一 アンモニ人の來寇

(サムエル前書第十一章)

一 アンモニ人ナハシ、ギレアデのヤベシにのぼりて

之を圍む。ヤベシの人々ナハシにいひけるは、我ら

と約をなせ。然らば汝につかへん。ニアンモニ人ナ
ハシこれに答へけるは、我かくして汝らと約をなさ
ん。即ち我汝らの右の目を抉りてイスラエルの全地
に恥辱をあたへん。ミヤベシの長老これにいひける
は、我らに七日の猶豫をあたへて、使をイスラエル
の四方の境におくことを得さしめよ。而して若し
我らを救ふ者なくば、我ら汝にくだらん。四斯て使
サウルのギベアにいたり、此事を民の耳に告げしか
ば、民皆聲をあげて哭きぬ。互愛にサウル田より牛
にしたがひて来る。サウルいひけるは、民何により
て哭くやと。人々これにヤベシ人の事を告ぐ。六サ
ウル之を開けると、神の靈これに臨みて、その怒
甚だしく燃えたち、七一軛の牛をころしてこれを切
り割き、使の手をもてこれをイスラエルの四方の境
にあまれくおくりていはしめけるは、誰にてもサウ
ルとサムエルにしたがひて出ざる者は、其牛かくの
ごとくせらるべしと。民エホバを畏み、一人のごと

てエホバのまへにサウルを王となし、彼處にて酬恩
祭をエホバのまへに獻げ、サウルとイスラエルの人

く均くいたり。ハサウル、ベセクにてこれを數ふ
るに、イスラエルの子孫三十萬、ユダの人三萬あり
き。九斯て人々來れる使にいひけるは、ギレアデの
ヤベシの人にかくいへ、明日日の熱き時、汝ら助を
得んと。使かへりてヤベシ人に告げければ、皆よろ
こびぬ。一〇是をもてヤベシの人いひけるは、明日
汝らに降らん。汝らの善と思ふところを爲せ。一一
明日サウル民を三隊にわかち、曉更に敵の軍の中
にりて日の熱くなる時までアンモニ人をころしけれ
ば、遺れる者は皆ちりんになりて二人俱にあるも
のなかりき。一二民サムエルにいひけるは、サウル
豈我らの王となるべけんやと言ひしは誰ぞや。其人
を引き來れ、我ら之をころさん。一三サウルいひけ
るは、今日エホバ救をイスラエルに施したまひたれ
ば、今日人は人を殺すべからず。一四茲にサムエル民
にいひけるは、いざギルガルに往きて彼處にて王國
を新にせん。一五民みなギルガルにゆきて彼處に

人皆かしこにて大に視へり。

◎アンモニ人ナハシは、ギレアデのヤベシに上つて、之を圍んだ。百年ばかり前に、
アンモニ人は士師エフタの爲に、破られたことがあり。(士一・三二)それが今一度頭を
擡げ、イスラエルに攻寄せたのである。ナハシはヤベシの人々が下手から出て、之と
約束を結び、之に事へんことを求むるに對へていうた。我斯して汝等と約をなさん、
即ち我、汝らの右の目を抉りて、イスラエルの全地に恥辱をあたへん」と。全く無理
無體なことをいひかけたものである。右の眼を抉るといへば、耶蘇は曾て罪の憎むべ
きことを教へて、もし右の目なんぢを躓かせば、抉り出して棄てよ。五體の一つ亡び
て、全身ゲヘナに投げ入れられぬは益なり。(マタ五・二九)と仰せられた。そこでヤベ
シの人々は、使をイスラエルの四方の境におくつて、助を求むることゝなつた。彼等
は如何にもして、アンモニ人の慘虐を免れんことを、願うたのである。それと同じ様
に私共は又、惡魔の虜となり、その無法なる待遇を受くることを免れん爲に、耶蘇の

救を求めねばならぬ。「他の者によりては救を得ることなし。天の下には我らの頼りて救はるべき他の名を、人に賜ひし事なければなり」(使四・一二)とあるからである。(一一三)

◎ヤベシからは、前に四百人の處女をベニヤミンの支派に嫁せしめた様な間柄であり。(士二・二、二四)先づ使をベニヤミンのギベアにおくつて、その援助を求めたのは、さもあるべきことと思はる。サウルはこの時既に、イスラエルの王として擧げられて居つたにも拘らず、なほその郷里にて、牛にしたがうて田を耕して居つた。國の利益は全く是にあり。即ち王者が農事に勤むるにあるなり(傳五・九)といふ語を、彼はそのまゝに實行して居つたのである。然しながら彼が田より歸りて、アンモニ人がヤベシを圍み、沒義道ないひがかりをして居る由を聞き、且人々がその爲に嘆いて居るのを見た時、神の御靈は彼に臨み給ひ、彼は義憤に燃えて起ち上つたのである。その如く今日の私共も亦、罪と惡魔とが如何に我が同胞を、殘酷な戮殺にしつゝあるかを、見る時、神の御靈に勵まされ、慨然として起ち上らざるを得なくなる。是は權勢に由らず、能力に由らず、我が靈に由るなり。(セカ四・六)又「聖靈なんぢらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん。」(使一・八)とあるのは、それである。ブラムエル・ブース大將の言に、「救世軍とは何か、靈魂に對する熱情これである」とあり。私共は同胞の罪に滅ぶる状を見るに見かね、これが救の爲に、身命を賭して、蹶起するやうでなくてはならぬ。(四一六)

◎こゝに於てサウルは、一軛の牛をころしてこれを切り割き、使の手をもて、これをイスラエルの四方の境にあまねくおくり、「誰にても、サウルとサムエルにしたがひて出でざる者は、其の牛かくのごとくせらるべし。」と告げしめると、人々はエホバを畏み、一人の如く均しくいで來り、その數計三十三萬人に達した。前にバラクがカナン人と戦ふ時、メロズの民はそのいくさを助けざりしたために誣はれ、(士六・二三)イスラエルの諸の支派がベニヤミンの子孫と戦ふ時、ヤベシ・ギレアデからは一人も之に參加する者がなかつた爲に、手ひどい懲罰をうけた様な例もあつた。(士二・八)然しながら此の度は、十二の支派がいづれも出で來つて、一人のごとく、ヤベシの民を救はんとしたのはよい。耶蘇の御言に「我と偕ならぬ者は我にそむき、我とともに集めぬ者は

散らすなり」(マタ二・三〇)とあり。彼に救はれた私共は、又彼の救世済人の御軍に
参加せねばならぬ。世の救の爲に戦はざる者は、事實に於て世の救を妨ぐる者たるこ
とを免れない。それ故神の聖徒たる者は、残らず皆又、その戦士たるべきものであ
る。(ベ七、八)

◎前にもいうた様に、ヤベシ・ギレアデの人々は、前にイスラエルの諸の支派が、ベニ
ヤミンの子孫と戦ふ時、一人もそのいくさに参加する者なく、袖手傍觀の態度に出で、
その爲に手ひどい懲罰をうけた様なこともあつた。(士二・一〇)然るに今は、彼等がア
ンモニ人の爲に圍をうくるに際し、イスラエルの諸の支派が、總出で助に来てくれる
ことゝなつたのである。彼等はその以前の自分たちの仕打を思ひ合せて、如何に恐縮
したことであらうか、察するに餘がある。私共の基督に對するも亦此の如く、私共が
彼に對する本分を怠ることのみ多に拘らず、彼は私共を赦し、何處までも慈仁を以
て取扱ひ給ふのである。「我等がなほ罪人たりし時、基督我等のために死に給ひしに由
りて、神は我らに對する愛をあらはし給へり。」(ロマ五・八)又「罪の増すところには恩

恵も彌増せり」(ロマ五・二〇)等とあるのは、そのことである。私共の至らぬ所のみ
に引換へ、基督の恩恵の如何にも行届いて、且豊富なることを思へば、たゞたゞ感激
の他はない。(九一一)

◎イスラエル勢がアンモニ人を破つた後、民はサムエルに向ひ、「サウル豈、我らの王
となるべけんやと言ひしは誰ぞや。其の人を引き來れ。我ら之をころさん」といふと、
サウルはあし宥め、「今日エホバ、救をイスラエルに施したまひたれば、今日は人を殺
すべからず」というたのは、彼の寛容の精神をあらはすと共に、又そのすべての榮を
神に歸し奉つた態度を、示すものである。此の如く私共は、何かにつけて、一切の榮
を神に歸し奉らねばならぬ。耶蘇はその十字架の最後が目前に迫り來るのを見つめつ
つ、「今わが心騒ぐ、我なにを言ふべきか。父よ、この時より我を救ひ給へ。されど我
この爲にこの時に到れり。父よ、御名の榮光をあらはし給へ。」(ヨハ二・二七、二八)と仰
せられた。神の榮を求むる者には、小な私の怨など考へて居る邊がない。ペテロが
「わが兄弟、われに對して罪を犯さば、幾たび赦すべきか、七度までか」といふに答へ

て、「否われ『七度まで』とは言はず、『七度を七十倍するまで』と言ふなり。」(マタ二八・二一、二三)と、耶蘇が教へ給うたのは、その意味である。(二二、一三)

◎成功に過る成功はなく、勝利にまさる勝利はない。サウルが一度アンモニ人に勝つて後、人々の彼に對する尊敬と信用とは、大に増加はつた様に見える。しかもこれと同じ様な實例は聖書に多くあり。モーセが神の力によつて、さすがに頑固一轍なバロを屈伏せしめた時、彼は「エジプトの國にて、バロの臣下の目と民の目に、甚だ大なる者と見えたり。」(出一・三)とあり。ヨシユアが神の力によつて、イスラエル人を導き、ヨルダン河を徒歩濟したことにつき、「エホバこの日、イスラエルの衆人の目の前にて、ヨシユアを尊くしたまひければ、皆モーセを畏れしごとくに彼を畏る。」(ヨシ四・一四)とある如きは、それである。私共は何處までも、最初の獻身と服従とを終迄繼續し、小き成功より大なる成功に至り、又小き勝利より更に大なる勝利を、かち得るやうでありたい。(一四、一五)

一二 國民への警告

(サムエル前書第十二章)

一サムエル、イスラエルの人々にいひけるは、視よ、我汝らが我にいひし言をことごとく聞き、汝らに王を立てたり。ニ見よ、今王汝らの前にあゆむ。我は老いて髪しろし。視よ、わが子ども汝らと共にあり。我幼稚時より今日にいたるまで、汝等のまへにあゆめり。三視よ、我こゝにあり。エホバのまへと其育そそぎし者のまへに我を訴へよ。我誰の牛を取りしや。誰の驢馬をとりしや。誰を掠めしや。誰を虐遇めしや。誰の手より賄賂をとりてわが目を瞞ませしや。有らば我これを汝らにかへさん。四彼らにいひけるは、汝は我らを掠めず、くるしめず、又何をも人の手より取りしことなし。五サムエルかれらにいひけるは、汝らが我手のうちに何をも見いださざる

をエホバ汝らに証したまふ。其育そそぎし者も今日証す。彼ら答へけるは、証したまふ。六サムエル民にいひけるは、エホバはモーセとアロンをたてし者、汝らの先祖をエジプトの地より導きいだせしものなり。七立ちあがれ。エホバが汝らおよび汝らの先祖になしたまひし諸の義しき行爲につきて、我エホバのまへに汝らと論ぜん。八ヤコブのエジプトにいたるにおよびて、汝らの先祖のエホバに呼はりし時、エホバ、モーセとアロンを遣はしたまひて、此二人汝らの先祖をエジプトより導きいだして、此處にすましめたり。九しかるに彼ら其神エホバを忘れしかば、エホバこれをハツルの軍の長シセラの手と、ベリシテ人の手およびモアア王の手にわたしたまへ

り。斯て彼らこれを攻めければ、一〇民エホバに呼ばはりていひけるは、我らエホバを棄て、バアルとアシタロテに事へて、エホバに罪を犯したり。されど今我らを敵の手より救ひだし給へ。我ら汝にかへんと。二是に於てエホバ、エルバアルとバラクとエフタとサムソンを遣はして、汝らを四方の敵の手より救ひだしたまひて、汝ら安らかに住めり。

二三しかるに汝らアンモンの子孫の王ナハシの汝らを攻めんとて来るを見て、汝らの神エホバ汝らの王なるに、汝ら我にいふ、否我らなをさむる王なかるべからずと。二四今汝らを選びし王汝らがわがひし王を見よ。視よ、エホバ汝らに王をたてたまへり。

二五汝らもしエホバを畏みて之につかへ、其言にしたがひてエホバの命にそむかず、また汝らと汝らなをさむる王、恒に汝らの神エホバに従はざるべし。

二六しかれども汝らもしエホバの言にしたがはずして、エホバの命にそむかば、エホバの手汝らの先祖

をせめしごとく汝らをせむべし。一六汝ら今たちてエホバが爾らの目の前になし給ふこの大なる事を見よ。一七今日は麥刈時にあらずや、我エホバを呼ばん。エホバ雷と雨をくだして、汝らが王をもとめてエホバのまへに爲したる罪の大なるを見しらしめ給はん。一八かくてサムエル、エホバをよびければ、エホバその日雷と雨をくだし給へり。民みな大にエホバとサムエルを恐る。一九民みなサムエルにいひけるは、僕らのために汝の神エホバにいのりて、我らを死なざらしめよ。我ら諸の罪にまた王を求むるの悪を加へたればなり。二〇サムエル民にいひけるは、懼るゝなかれ、汝らこの總ての悪をなしたり。されどエホバに従ふことを息めず、心をつくしてエホバに事へ、二一虚しき物に迷ひゆくなかれ。是は虚しき物なれば、汝らを助くることも救ふことも得ざるなり。二二エホバその大なる名のために此民をすてたまはざるべし。其はエホバ汝らをおのれの民

となすことを善しとし給へばなり。二三また我は汝らのために祈ることをやめて、エホバに罪を犯すこととは決めてせざるべし。且われ善き正しき道をもて汝らなをしへん。二四汝ら只エホバをかしくみ、心

をつくして誠にこれにつかへよ。而して如何に大なることをエホバ汝らになしたまひしかを思ふべし。二五しかれども汝らもしなほ悪をなさば、汝らと汝らの王ともにほろぼさるべし。

◎サムエルはギルガルにて、サウルの爲に即位式を擧げたる後、人民に向うていうた。「見よ、今王汝らの前にあゆむ。我は老いて髪しろし。視よ、わが子ども汝らと共にあり。我幼稚時より今日にいたるまで、汝等のまへにあゆめり。視よ、我こゝにあり。エホバのまへと其の膏をさし給へし者のまへに我を訴へよ。我誰の牛を取りしや、誰の驢馬をとりしや、誰を掠めしや、誰を虐遇めしや、誰の手より賄賂をとりて、わが目を隠ませしや。有らば我、これを汝らにかへさん」と。彼は何處までも清廉にして、無私なる人物であつた。彼は内に省みて、何等良心に疚しい所のない生活を營む公人であつた。後にバウロがエペソの長老たちに向ひ、「我は人の金銀、衣服を貪りし事なし。この手は我が必要に供へ、また我と偕なる者に供へしことを、汝等みづから知る。」(使

二〇・三三、三四) というたのも思ひ合されて、欽羨の至に堪へない。(二一五)

◎イスラエル人の歴史は、神の恵に狎れ、神を離れてはその懲罰をうけ、悔改めて神に立戻るかと思へば、又神に離るゝといふ様な経路を、何遍となく繰返した記録である。とりわけ士師記の一卷は、さうした記事の連続である。そこで「人が一向歴史に學ばぬことを、私共に教へるものは歴史である。」というた人もあり。私共は前車の覆へるを見て、後車の戒とせねばならぬ。即ち私共は古人の経験に鑑みて、銘々が今日に處するの道を悟りたきものである。(六一一)

◎イスラエルの人々は隣國の人民と同じ様に、彼等を支配すべき王を求めて、之を得た。然しながら神を敬ひ畏るゝこと、王に忠義を盡すこととは、何處までも並行して行くべきものである。彼等は眼に見ゆる王を與へられた爲に、眼に見えざる神を粗末にすることを許されなかつた。「エホバに依頼むは人にたよるよりも勝りてよし。エホバによりたのむは、もろもろの侯にたよるよりも勝りてよし。」(詩一一八・八、九)又「エホバをおそるゝは國の寶なり。」(イザ三三・六)とあり。たゞ敬虔にして正義と愛との上に礎を置く國民のみ、永く久しく榮え行くべきものである。(二二一五)

◎期は麥刈時であつたといへば、今の五六月の頃に當るのである。それにも拘らず、サムエルは神に祈つて、大雷雨を呼び降した。人々は大に神とサムエルとを畏れ、サムエルに向ひ、「エホバに祈りて我らを死なざらしめよ。」というたのである。其の如く、神はしばしば自然の現象を通じて、人に語り給ふのである。支那の聖人は「迅雷風烈には必ず變ず」というた。目眩み、耳聾んばかりの電雷は、人をして覺えずその貌を正し、己を省みしむるものである。それ故ボルテールはアルプス山上、電雷に遭ひ、平生の不信仰にも拘らず、其の場に倒れて、「神よ助け給へ」と祈つたのである。ルーテルは又、その親しき友人の一人が、雷にうたれて急に死んだのを見て、大に感ずる所あり。斷然身を獻げて、神とその御教との爲に生きんことを、誓ふに至つたのである。此の如く、神は往々自然界の現象を通じて、私共を教へ戒め給ふ。私共はその御聲を聞き損じないやう、心掛けたきものである。(六一一九)

◎サムエルは人々の畏れ慄くを見て、彼等に向ひ、「エホバその大なる名のために、此

の民をすてたまはざるべし。其はエホバ、汝らをおのれの民となすことを善しとし給へばなり。」というた。名は實の賓である。神が神で在し給ふからには、その御名の故に、彼を呼ぶ民を捨て給ふことが出来ない。それ故ヨシユアはアイの敗軍の後、嗟主よ、イスラエル、すでに敵に背を見せられたれば、我また何をか言はん。カナン人およびこの地の一切の民これを聞き、我等を攻めかこみて、我等の名をこの世より絶たん。然らば汝の大なる御名を如何にせんや。(ヨシ七・八、九)と嘆き訴へたのである。ダビデの詩に又「エホバはわが靈魂をいかし、御名の故をもて、我をたゞしき路にみちびき給ふ」(詩二三・三)とあり。神の御名は私共にとつての隠家である。凡て之に依頼む者の捨てられし例は曾てないのである。(二〇一・二二)

◎「我は汝らのために祈ることをやめて、エホバに罪を犯すことは、決めてせざるべし。」と、サムエルはいうた。彼は執成の祈の力と必要とを知り、執成の祈を怠ること、罪を犯すことであるとさへ信じて居つた。それ故彼は、國民の爲に祈ることをやめて、神に罪を犯すことは出来ない、というたのである。今日私共の間に最も缺けたるものは、またさうした執成の祈でなくてはならぬ。アブラハムの執成の祈は、ロトをそのソドムの滅亡より救うたのである。(創一九・二九) 耶蘇の執成の祈は、ペテロをその墮落に垂んとする處から、引返らせたのである。(ルカ二二・三二)「エホバは人なきをみ、中保なきを奇しみたまへり。(イザ五九・一六)といふこともあれば、私共はもつと執成の祈をするものとならねばならぬ。それと同時に、私共は又、サムエルの如く、「われ善き正しき道をもて、汝らをしへん。」と、いひ得るやうでありたい。すなはち一方には、熱心に執成の祈をなすつゝ、他方には鋭意、「御言を宣傳へ、機を得るも機を得ざるも、常にはげむ」(テモ後四・二)であるやうでありたい。(二三一・二五)

一三 サウルの失敗

(サムエル前書第十三章)

一 サウル三十歳にて王の位に即く。彼二年イスラエルをさめたり。ニ爰にサウル、イスラエル人三千

を擇む。其二千はサウルとともにミクマシおよびベテルの山地にあり。其一千はヨナタンとともにベニ

ヤミンのギベアにあり。其餘の民はサウルおのゝ
 其幕屋にかへらしむ。三ヨナタン、ゲバにあるペリ
 シテ人の代官をころせり。ペリシテ人之をきく。是
 においてサウル國中にあまれくラツバを吹いては
 しめけるは、ヘブル人よ、聞くべし。四イスラエル
 人皆聞けるに云はく、サウル、ペリシテ人の代官を
 撃てり。而してイスラエル、ペリシテ人の中に惡ま
 ると。斯て民めされてサウルにしたがひてギルガル
 にいたる。五ペリシテ人、イスラエルと戦はんとて
 集りけるが、兵車三百、騎兵六千にして、民は濱
 の砂の多きがごとくなりき。彼らのぼりてベテアペ
 ンにむかへるミクマシに陣をとれり。六イスラエル
 の人苦められ、其危きを見て、皆巖穴に林叢に固
 に高塔に坎阱にかくれたり。七また或るヘブル人は
 ヨルダンを涉りて、ガドとギレアデの地にいたる。
 然るにサウルは尙ギルガルにあり。民みな戰慄ひて
 之に従ふ。八サウル、サムエルの定めし期にしたが

ひて七日とゞまりしが、サムエル、ギルガルに來ら
 ず。民はなれて散りければ、九サウルいひけるは、
 燔祭と酬恩祭を我にもち來れと。遂に燔祭をさしげ
 たり。一〇燔祭をさしぐることを終へしときに、視
 ふ、サムエルいたる。サウル安否を問はんとてこれ
 を出迎ふに、一一サムエルいひけるは、汝何をなせ
 しや。サウルいひけるは、我民の我をばなれてちり、
 また汝の定まれる日のうちに來らずして、ペリシテ
 人のミクマシにあつまれるを見しかば、一二ペリシ
 テ人、ギルガルに下りて我をおそはんに、我いまだ
 エホバをなだめずといひて、勉めて燔祭をさしげた
 り。一三サムエル、サウルにいひけるは、汝おろかな
 ることをなせり。汝その神エホバのなんぢに命じた
 まひし命令を守らざりしなり。若し守りしならば、
 エホバ、イスラエルをさむる位を永く汝にさだめ
 たまひしならん。一四然れどもいま汝の位もたざ
 るべし。エホバその心に適ふ人を求めて、エホバ之

に其民の長を命じたまへり。汝がエホバの命ぜしこ
 とを守らざるによる。一五かくてサムエルたちてギ
 ルガルよりベニヤミンのギベアにのぼりいたる。サ
 ウルおのれとともにある民をかぞふるに凡そ六百人
 ありき。一六サウルおよび其子ヨナタン竝にこれと
 ともにある民は、ベニヤミンのゲバに居り、ペリシ
 テ人はミクマシに陣を張る。一七劫掠人三隊にわか
 れてペリシテ人の陣よりいて、一隊はオフラの路に
 むかひてシユアルの地にいたり、一八一隊はベテホ
 ロンの道にむかひ、一隊は曠野の方にあるゼボイム

の谷をのぞむ境の路にむかふ。一九時にイスラエル
 の地のうち、何處にも鐵工なかりき。是はペリシテ
 人へブル人の劍あるひは槍を作することを恐れたれば
 なり。二〇イスラエル人皆其耕鋤斧耒即ち耕鋤三
 齒鐵斧の鋤に缺ありてこれを鍛ひ改さんとする時、
 又は鞭を尖らさんとする時は、常にペリシテ人の所
 にくだれり。二一是をもて戰の日にサウルおよび
 ヨナタンとともにある民の手には劍も槍も見えず。
 只サウルと其子ヨナタンのみ持てり。茲にペリシテ
 人の先陣ミクマシの渡口に進む。

◎サウルは三千の兵を駐めて常備軍となし、その餘の民は各々幕屋に歸らしめた。三
 千人の常備軍といふのは、寧ろ過少に失する嫌がある。したがつてまさかの時には、
 何時でも、豫備後備を數多召集すべき見込であつたものかと、想像せらるゝ。今日私
 共の聖戰に於ても亦、之と似たところがある。即ち今日の基督の軍隊に於ても、亦牧
 師、傳道師又は救世軍士官などいふ常備軍以外に、別にその豫備後備たるべき、多數

の平信徒を有せねばならない。否々、基督に救はれ、その血に贖はれた私共は、その職業の何であるか、又は身分の如何なるかに拘らず、残らず皆基督の軍人として、現在それぞれの立場から、世の救の爲に戦うて居るべき筈である。基督に属する人民の間には、所謂皆兵主義を、實行せられて居るべきわけだからである。(一、二)

◎ヨナタンがゲバにあるペリシテ人の代官を殺したことが因となり、イスラエル人とペリシテ人との間に、又ぞろ交戦が始つた。彼等がかねがね、互に隙を狙うて居つたのである。それが一朝張りきつた腫物が破れて膿が出る如く、測らんことが平和の破れとなつて、兵火を交ふるに至つたのは、餘儀なきこと、いはねばならぬ。今も「武装した平和」などいうて、表面には平和を装へども、裏面には戦争の準備に、これ日も足らない世の中である。明治天皇の御製に、「四方の海、みなはらからと思ふ世に、など浪風の立騒ぐらむ」とあり。慕しいものは永久の平和である。北海道大學總長であつた佐藤昌介氏はいはれた。「一將功成つて萬骨枯る」とは、此の世の戦争にありがちの悲惨事である。然しながら救世軍の戦争は、人を殺すのではなくて、人を活か

す爲の戦争である。「一將功成つて萬骨枯る」といふのが、その戦争の本色である。此うした戦争が愈々力強く、又手廣く戦はるゝに至らんことを願ふのである」と。眞に知己の言である。(三一五)

◎さて愈々戦争が始まりさうになると、イスラエル人はその兵力の甚く劣れることを感ずるものから、「皆巖穴に、林叢に、崗巒に、高塔に、坎阱等にかくれ、」そのサウルに就いた民さへ、皆戦慄しつゝ之に従うたとある。弱肉強食の世界に、弱者の立場にある者ほど、憐れにも痛ましい者はない。然しながら有難いことに、神は弱き者を顧み給ふ。神は又虐げらるゝ者の友で在し給ふ。「エホバのたまはく、苦しむもの掠められ、貧しさもの歎くがゆゑに、我いま起ちて、之をその慕ひもとむる平安におかぬ。」(詩一二・五)「我は基督の爲に、微弱、恥辱、艱難、迫害、苦難に遭ふことを喜ぶ。そは我よわき時に強ければなり。」(コリ後一二・一〇)等とあるのは、その謂である。(六、七)

◎サムエルは前にサウルに向ひ、「汝我にさきだちてギルガルにくだるべし。我汝の許にくだりて燔祭を供へ、酬恩祭を獻げん。わが汝のもとに至り、汝の爲すべきことを

示すまで、汝七日のあひだ待つべし」(サム前一〇・八)と告げておいた。然るにサウルは待ちかねて、七日になるや否や、直に自分で勝手に燔祭を執行した。彼が七日の終まで待つことをせず、且彼が祭司でもなければ、レビ人でもない、ベニヤミンの支派に属する身でありながら、氣儘に燔祭を執行したのは、甚だ不都合なことであつた。其の昔、アダムとエバとが、禁ぜられた果實を食うたのは、小さい事の如く見えた。然しながらその奥にひそむ不従順の念は、決して小さいものでなかつた如く、サウルが擅に燔祭を行つた事も亦、その裏面には實に由々しき不信仰と、不従順とをふくむものとして、彼はその爲に折角得たる王位をさへも、失はんとするに至つたのである。斯して二三年前、純真と謙遜とを以て出て來つた彼が、今は早くも掌を反す如く、うつてかはつた、高慢放肆なる一男子となり了つたのは、眞に遺憾の事といはねばならぬ。「なんぢは初の愛を離れたり。然れば、なんぢ何處より墮ちしかを思へ、悔改めて初の行爲をなせ。」(黙二・四、五)と、後に人の子がエペソにある教會を戒め給うた言は、そのまゝ此の場合に於けるサウルに當嵌るのであつた。(八一―二四)

◎ペリシテ人は、武器を執つてイスラエルに攻め寄すると共に、別に「劫掠人三隊」を派遣して、イスラエル人の財物を掠めしめた。それと同じ様に、今も悪魔は私共を襲ひ、私共の生命に危害を加へると共に、又その財物をも掠めるのである。一例を挙げれば、酒を飲むことは人の健康を損ひ、智慮を朦まし、その靈魂を滅亡におとす所以であるのみならず、經濟上から言つても、實に莫大の損害を一身一家に及ぼすものである。フランクリンがその時代の人々を戒めて、「諸君は税金が高いというて苦情を鳴らすけれども、その癖、税金の二倍を遊惰に、三倍を贅澤に、四倍を物好と娛樂とに、拂うて居るではないか」というたのは、間違のない話である。悪魔の軍勢にはいつも、劫掠人が伴ひ居て、私共の生命ばかりか、財産を迄も荒さずにはおかないものと、思はねばならぬ。(一五一―一八)

◎ペリシテ人は、イスラエル人に手強き壓迫を加へ、一切の武器を取上げて、之をその手にのこさぬやう、仕向けて居つた。其の結果としてイスラエル人の居住する地方には、一人の鐵工だもなく、「其の耜、鋤、斧、耒、即ち耜、鋤、三齒鋤、斧の鋸に缺あり

九〇
て、これを鍛ひ改さんとする時、又は鞭を尖らさんとする時は、「常にペリシテ人の所
に行いて、註文して居つたといふのである。斯る有様ゆゑ、此の度彼等がペリシテ人
と戦ふに當りても、サウルとヨナタンとの他には、誰もその手に、刀又は鎗を有たな
かつたといふのは、如何にもあはれな有様といはねばならぬ。彼等は武器を有ずして
戦に臨まんとして居たのである。けれども基督の軍人たる私共は、「悪魔の術に向ひ
て立ち得んために、神の武器をもて鎧はねばならぬ。」(エヘ六・一一) 即ち、「立つに誠を
帯として腰に結び、正義を胸當として胸に當て、平和の福音の備を靴として足に穿き、
救の冑を戴いて、信仰の盾を携へ、殊に御靈の劍、すなはち神の言を執らねばなら
ぬ。」(エヘ六・二四―二七) 舊新兩約聖書は、基督の軍人にとつての大小である。平生十分
その切味をためしおき、まさかの時に用ひて、人の救の爲に戦はねばならぬ。昔の武
士は、「腰の朱鞘は伊達にはさゝぬ。」というたものである。私共は聖書といふ劍を伊達
に有つのでなく、十分その使途をわきまへ、之を用ひて世の救の爲に戦ふやうであり
たい。(一九―二三)

一四 ヨナタンの勇戦

(サムエル前書第十四章一―二三)

一 其時サウルの子ヨナタン、武器を執る若者にいひ
けるは、いざ對面にあるペリシテ人の先陣に涉りゆ
かんと。然れど其父には告げざりき。ニサウル、ギ
ベアの極においてミクロンにある石榴の樹の下に住
まりしが、俱にある民はおよそ六百人なりき。三又
アヒヤ、エホデを衣てともになる。アヒヤはアヒトア
の子、アヒトアはイカボデの兄弟、イカボデはヒネ
ハスの子、ヒネハスはシロにありてエホバの祭司た
りしエリの子なり。民ヨナタンの行けるをしらざり
き。四 ヨナタンの涉りてペリシテ人の先陣にいたら
んとする渡口の間に、此傍に巉巖あり、彼傍にも巉
巖あり、一の名をホゼツといひ、一の名をセネとい
ふ。五 其一は北に向ひてミクマシに對し、一は南に

むかひてゲバに對す。六 ヨナタン武器を執る少者に
いふ、いざ我ら此割禮なき者どもの先陣にわたら
ん。エホバ我らのためにはたらきたまふことあらん。
七 多くの人をもて救ふも、少き人をもてすくふも、エ
ホバにおいては妨げなし。七 武器をとるもの之にい
ひけるは、總て汝の心にあるところをなせ。進めよ、
我汝の心にしたがひて汝とともにあり。八 ヨナタン
いひけるは、見よ、我らかの人々のところにわたり、
身をかれらにあらはさん。九 かれら若し我らが汝ら
にいたるまでとゞまれと斯く我らにいはゞ、我らは
このまゝとゞまりてかれらの所にのぼらじ。一〇 され
ど若し我らのところのぼれとかくいはいゞ、我ら
のぼらん。エホバかれらを我らの手にわたしたまふ

なり。是を徴となさんと。二斯て二人其身をヘリシテ人の先陣にあらはしければ、ヘリシテ人いひけるは、視よ、ヘブル人其かくれたる穴よりいて來ると。二三すなはち先陣の人ヨナタンと其武器を執る者にこたへて、我等の所に上りきたれ。目に物見せんといひしかば、ヨナタン武器を執る者にいひけるは、我にしたがひてのほれ。エホバ彼らをイスラエルの手にわたしたまふなり。二三ヨナタン攀ぢのぼり、其武器を執るもの之にしたがふ。ヘリシテ人ヨナタンのまへに仆る。武器をとる者も後にしたがひて之をころす。一四ヨナタンと其武器を取るもの、手はじめに殺せし者およそ二十人、この事田畑半段の内になれり。一五しかして野にある陣の者および凡ての民の中に戦慄おこり、先陣の人および劫掠人もまたをのゝき、地ふるひ動けり。是は神よりの戦慄なりき。一六ベニヤミンのギベアにあるサウルの成卒、望見みしに、視よ、ヘリシテ人の群衆くづれ

エホバ此日イスラエルをすくひ給ふ。而して戦は

ベテアベンにうつれり。

◎サウルには、少くとも三千人の親兵があつた筈だが、(サム前一三・二)それが此處には六百人に減じて居る。恐らくは敵の大軍が攻寄せたことを聞いて、そろそろ逃れ去つた者もあつた結果、こんな事になつたのであらう。その六百人さへ劍も鎗も有たないやうな有様故、その士氣が一向振はないばかりか、寧ろ萎微退嬰に傾いて居つたのは、更に不思議もないのである。斯る場合にサウルの子ヨナタンが、一人敢然として起ち上り、飽くまで攻勢をとつて敵に向ひ、積極的に局面を打開しようとして試みたのは、勇しいことの極であつた。進撃の中に防禦の工夫がある。愚圖々々して敵の大軍の蹂躪する所とならんよりは、我から進んで敵に一撃を加へようといふのは、あらゆる意味に於て、此の場合に、最も賢明なる仕方であつた様に見える。(一、二)

◎サムエルに見離されたサウルは、エリの裔なるアヒヤを迎へて、祭司のやうな務を行はしめ、之を陣中にまでも伴うた。此の際サウルが、悔改めてサムエルと和らかはうとはせず、反つて自分のいふなりになる人物を選び、之に大事な役目を行はしめた

て此彼にちらばる。一七時にサウルおのれともなる民にいひけるは、汝ら點驗て誰が我らの中よりゆきしかを見よと。即ちしらべたるに、ヨナタンとその武器を執るもの居らざりき。一八サウル、アヒヤにエホバを持ちきたれといふ。其はかれ此時イスラエルのまへにエホバを着たれば也。一九サウル祭司にかたれる時、ヘリシテ人の軍の騷いよくましたりければ、サウル祭司にいふ、姑く汝の手を掛けと。二〇かくてサウルおよびサウルと共にある民、みな呼ばはりて戦ひに至るにヘリシテ人おのゝ劍を以て互に相撃ちければ、其敗績はなほ大なりき。二一また此時よりまへにヘリシテ人と共にありて、ヘリシテ人と共に上りて陣に來れるところのヘブル人もまた翻へりてサウルおよびヨナタンと共にあるイスラエル人に合せり。二二又エフライムの山地にかくれたるイスラエル人、皆ヘリシテ人の逃ぐるを聞きてまた戦に出でて、これを追撃てり。二三是の如く

のは、感服の出来ない仕打であつた。それと同じ様に、或る宗教團體に屬する人物が、何か不都合の所爲でもあり。其處にゐた、まらなくなる場合に、素直に己が非行を悔悟しようとはせず、平氣な顔して往いて他の或る團體に加はり、冷眼に以前の團體を見返さうとする如きものがある。これらはサウルが、サムエルの前に悔改めようとはせず、反つてアヒヤを擧げて祭司の事を行はしめ、己が非行を遂げんとしたの似て、感服の出来ない姑息不徹底な致方である。(三)

◎ヨナタンは、ペリシテ人の先陣に涉り行かんとする際、その事を誰にも告げなかつた。若し告げたら、之を妨げらるゝことを知つて居つたからである。然しながら彼は、神を唯一の力と頼んで居つた。即ち彼はいうたのである。「エホバ、我らのために、はたらきたまふことあらん。多くの人をもて救ふも、少き人をもてすくふも、エホバに於いては妨げなし」と。これは後年ユダの王アサが、エテオピヤ人から攻められた時、「エホバよ、力ある者を助くるも、力なき者を助くるも、汝においては異なることなし。」(歴下一四・一一)というて、神に依頼んだのと似た話である。實に神と偕なる一人は

大多數である。何となれば、此の世に神と對抗する力を有つた者は、絶えてないからである。ヨナタンは又、最も信頼するに足る一人の副官を有した。彼がヨナタンに向ひて、「總て汝の心にあるところをなせ。進めよ、我汝の心にしたがひて、汝とともにあり。」といひ、身も心も投出して、彼の命のまゝに従うた態度は、何となく日本の古武士が、忠義一徹主君に仕へて、必要な場合には、何時でもその馬前に討死をする覺悟で居たのと、似た所がある様に見える。この主人の許にこの家來がある。その上に神の御力が加はりて、彼等は目に餘る敵の大軍に、打勝つことが出来たのである。(四一〇)

◎ヨナタンとその副官とは、岩角を攀のぼつて敵に近づいた。「彼等は膝をついて岩に登る前に、それよりも多く、膝をついて神に祈つたであらう」というた人がある。彼等は敵陣に迫つて、忽ち其の二十人を打殺した。折柄地震ひ動き、敵兵の間に神よりの戦慄が起り、皆わなわなとふるへをのゝき、早や逃腰になるといふ様な始末であつた。「汝らの一人は千人を逐ふことを得ん。其は汝らの神エホバ、汝らに宣ひしごとく、

自ら汝らのために戦ひたまへばなり」(ヨシニ三・一〇)とは、この場合に於けるヨナタンの體驗であつた。(二二―一五)

◎サウルはペリシテ人の軍勢が總崩れになつて、此處彼處に散らばる様子を見、且ヨナタンとその副官とが、敵陣に攻寄せたらしいのに心づき、急ぎアヒヤを呼んでエボデ(禮拜用の上衣)を持ち來らしめ、此の場合に於ける神の御旨を伺はんとしたが、その應答のない前に、戦の騒が愈々大きくなり、最早待つてゐられない故、直ちに進軍することゝなつた。神の御聲を聞きたいけれども、之を聞くこと能はず、物足りない心を懷いて、不用意のまゝ、人生の戦場に出向くこと、當時のサウルと似た者は、今も私共の間に多くある。けれ共私共は、かねがね凡ての罪から潔められて、神と和睦をなし、したがつて絶えず神の御聲に接し、其の御旨を辨へつゝ、出て行つてこの世の戦場に馳驅するやうでありたい。内に滿されざる心を懷きながら、外に萬全の活動をなすことは、出來難いものと思はねばならぬ。(二六―一九)

◎ペリシテ人は慌て、互に同志討を始めた。その如く罪人は、その家族、友人、仲間の中に、得て同志討をしたがるものである。ヨナタンとその副官と、只二人の勇猛なる進撃が端緒となつて、ペリシテ人が總崩れとなるのを見、此の時までペリシテ人の捕虜となり、彼等の陣中に奴隸として連れ來られたイスラエル人は、忽ち翻つてサウル及びヨナタンの軍勢に加はつた。又エフライムの山地に姿をかくして居つたイスラエル人の群さへ、ペリシテ人が逃出したと聞いて、急に元氣つき、出で來つて彼等を追撃した。此の如く神の軍隊の中に、幾人かの決死の軍人が現れれば、卑怯未練の弱武者も、二心の者も、果は敵兵に事へて居つたもの迄も、皆出で來つて、御軍に力を添へる様になる。進んでこの聖戦のために、ヨナタンとその副官とが、行つた所を行ふ者は誰であらう。(二〇―二三)

一五 輕率なる誓約

(サムエル前書第十四章二四―五二)

二四されど此日イスラエル人苦めり。其はサウル民

を誓はせて、夕まで即ちわが敵に仇をむくゆるまで

に食物を食ふ者は呪詛れんと言ひたればなり。是故に民の中に食物を味ひし者なし。三五爰に民みな林森に至るに地の表に蜜あり。二六即ち民森にいたりて蜜のながるゝをみる。然れども民誓を畏るれば、誰も手を口につくる者なし。二七然るにヨナタンは其父が民をちかはせしを聞かざりければ、手にある杖の末をのばして蜜にひたし、手を口につけたり。是に由りて其目あきらかになりぬ。二八時に民のひとり答へて言ひけるは、汝の父かたく民をちかはせて、今日食物を食ふ人は呪詛はれんと言へり。是に由りて民つかれたり。二九ヨナタンいひけるは、わが父國を煩はせり。請ふ我この蜜をすこしく嘗めしに由りて、如何にわが目の明かになりしかを見よ。三〇ましてや民今日敵よりうばひし物を十分に食ひしならば、ヘリシテ人をころすこと更に多かるべきにあらずや。三一イスラエル人かの日ヘリシテ人を撃ちてミクマシよりアヤロンに至る。而して民はなはだ

疲れたり。三三是において民劫掠物に走かり、羊と牛と犢とを取りて之を地のうへにころし、血のまみに之をくらふ。三三人人々サウルにつけていひけるは、民肉を血のまみに食ひて罪をエホバにかすと。サウルいひけるは、汝ら背けり。直ちにわがもとに大石をまるばしきたれ。三四サウルまたいひけるは、汝らわかれて民のうちにいりていへ。人各その牛と各その羊をわがもとに引きたり、此處にてころしくらへ。血のまみにくらひて罪をエホバに犯すなかれと、此において民おの／＼この夜その牛を手ひき來りて、之をかしこにころせり。三五しかししてサウル、エホバに一つの壇をきづく。是はサウルのエホバに壇を築ける始なり。三六かくてサウルいひけるは、我ら夜の中にヘリシテ人を追ひくだり、夜明までかれらを掠めて一人をも残すまじ、皆いひけるは、凡て汝の目に善しとみゆる所をなせと。時に祭司いひけるは、我ら此にちかより神にもとめん

と。三七サウル神に、我ヘリシテ人をおひくだるべきか、汝かれらをイスラエルの手にわたしたまふやと問ひけれど、此日はこたへたまはざりき。三八是においてサウルいひけるは、民の長たちよ、皆此にちかふれ。汝らみて今日のこの罪のいづくにあるを知れ。三九イスラエルを救ひたまへるエホバはいく。假令わが子ヨナタンにもあれ、必ず死なざるべからずと。されど民のうち一人もこれにこたへざりき。四〇サウル、イスラエルの人々にいひけるは、なんぢらは彼處にをれ。我とわが子ヨナタンは此處にをらんと。民いひけるは、汝の目によしとみゆるところをなせ。四一サウル、イスラエルの神エホバにいひけるは、れがはくは眞實をしめしたまへと。かくてヨナタンとサウル籤にあたり、民はのがれたり。四二サウルいひけるは、我とわが子のあひだの鬮を擲けと。即ちヨナタンこれにあたり。四三サウル、ヨナタンにいひけるは、汝がなせしところを我につ

げよ。ヨナタンつけていひけるは、我は只わが手の杖の末をもて少許の蜜をなめしのみなるが、我しなざるをえず。四四サウルこたへけるは、神かくなし、またかされてかくなしたまへ。ヨナタンよ、汝しなざるべからず。四五民サウルにいひけるは、イスラエルの中に此大なるすくひをなせるヨナタン死ぬべけんや。決めてしからず。エホバは生く。ヨナタンの髪の毛とすぢも地におつべからず。其はかれ神とともに今日はたらきたればなりと。かく民ヨナタンをすくひて死なざらしむ。四六サウル、ヘリシテ人を追ふことを息めてのぼりぬ。ヘリシテ人その國にかへれり。四七かくてサウル、イスラエルの王の位につきて四方の敵を攻む。即ちモアブ、アンモンの子孫、エドム、ゾバの王たちおよびヘリシテ人をせめけるに、凡てむかふところにて勝利を得たり。四八サウル力をえ、アマレク人をうちてイスラエルを其劫掠人の手よりすくひいだせり。四九サウルの

男子はヨナタン、エスイ、およびマルキシニアなり。
其二人の女子の名は、姉はメラブといひ、妹はミカルといふ。五〇サウルの妻の名はアヒノアムといひて、アヒマアズの女子なり。其軍の長の名はアブネルといひて、サウルの叔父なるネルの子なり。五一

サウルの父キシとアブネルの父ネルはアビエルの子なり。五二サウルの一生のあひだ恒にメリシテ人と烈しき戦あり。サウルは力ある人または勇ある人を見ることにこれをかゝへたり。

◎「人の生くるはパンのみに由るにあらず」とはいへ、人はパンなくして生くること能はぬものである。それ故耶蘇は「我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。」(マタ六・一二)と祈れと教へられ、パウロは又「モーセの律法に『穀物を碾す牛には口籠を繋ぐべからず』と録したり。神は牛のために慮り給へるか。また専ら我らのために之を言ひ給ひしか。然り、我らのために録されたり。」(コリ前九・九、一〇)といひて居る。然るにサウルが前後の見計もなく、殊に大敵を對手に戦争の最中、その部下の軍人が、一日断食して敵に當るべきことを誓はせたといふのは、どういふ愚なことをしたものであらう。ウイリアム・ブース大將は、あらゆる世の人が皆少くとも馬車馬と同じく、食物と、住居と、職業との、三つのものを得るに至らんことを要請し、その爲に、「最暗黒の

英國計畫」と名づくる、大規模の社會事業を畫策したのであつた。斷食を人に強ひるよりも大切なるは、如何にしてあらゆる人々に、なくて叶ふまじき食物を與へんかと、苦心すべきことである。耶蘇は今も空腹になやむ人々を指さし、「なんぢら食物を與へよ」(マル六・三七)と、いうてゐ給ふのではあるまいか。(二四)

◎ヨナタンは、その父サウルが、左様な誓を立てたことを知らず、森を過ぐる時、そこに蜜が滴つて居るのを見出し、杖の末を之にひたし、嘗めて疲勞を忘れ、その目があいた様に覺えた。詩篇の作者は神の御教を蜜の甘さに譬へて、「みことばの滋味は、わが脣にあまきこといかばかりぞや。蜜のわが口に甘さにまされり。」(詩一九・一〇三)又「これを蜜にくらぶるも、蜂の巢の滴瀝にくらぶるも、いやまさりて甘し。」(詩一九・一〇)等というて居る。人生の戰場に馳驅して氣も心も疲れ果てた時、私共はヨナタンと同じ様に、蜜よりも甘き神の御言を、一口でも味はうて、力づけることが出来たら、之に由つて一段の勇氣を増し、引續き勝利ある戦を戦ひ得べきことを疑はない。私共は神の御言をもて、その靈魂の生命を養ふべき必要を忘れてはならぬ。(二五―三〇)

◎サウルの見計もなき冷酷なる誓約は、忽ちその反動を招いた。人々は饑に堪へかね、劫掠物に走せかゝり、羊と牛と犢とを取りて殺し、之を血のまゝに食うた。獸の肉を血のまゝに食ふことは、モーセの時代からイスラエル人の間に、固く禁ぜられた所であつた。(申二・二三、二四) 然しながら彼等は、餘のひもじさに堪へかね、平生の嗜を忘れて、それを犯すに至つたのである。その道の人のいふ所によれば、不良少年を出す家庭に、自ら二種の區別があり。一つは餘に取締のない家庭で、今一つは餘に嚴格に過ぐる家庭である。不取締の家庭から、心得違つた若者を出すのは、やむを得ないこととして、嚴格に過ぐる家庭から、その反動として、同じく不心得な少年を出すに至つては、眞に遺憾の極である。これはサウルの、見計もなき誓約が、人々の間に反動を起し、肉を血のまゝに食ふに至つたのと、同じ心理作用によるものである。心得べきことである。(三一―三五)

◎サウルは祭司の忠告に従ひ、夜のうちにペリシテ人を追ひくだるべきか、否かについて、神に問うたけれども、神は答へ給はなかつた。後に耶蘇は、「求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。」(マテ七・七)と仰せられた如く、神はその子等の祈を聴くことを喜び、之に耳を傾け給ふのがその常であるのに、何故この場合に、サウルの祈に答へ給はなかつたかといふに、それは彼の罪が、神と彼との間を隔て、居つたからである。「エホバの御手は、みじかくして救ひえざるにあらず。その耳はにぶくして聞えざるにあらず。唯なんぢらの邪曲なる業、なんぢらとなんぢらの神との間をへだてたり。又なんぢらの罪、その御面をおほひて聞えざらしめたり。」(イザ五九・一、二)とあるのは、それであつた。歌に「祈りても、しるしなきこそしるしなれ、願ふことのまことならねば。」とあり。神に祈の聴かれんことを願ふ者は、先づ自分が、罪の汚穢からきよめられんことを祈り求め、それから後に、他の諸問題について、御助を仰ぐべきものである。(三六―三九)

◎サウルはその子ヨナタンが、蜜を嘗めた事實を發見し、彼に向ひて、「汝死なざるべからず」というたが、人民は承知しなかつた。「イスラエルの中に、此の大なる救をなせるヨナタン、死ぬべけんや。決めてしからず。エホバは活く、ヨナタンの髪の手ひ

とすぢも、地におつべからず」というて、之を擁護した。ヨナタンの様に國と民とを救うた者が、殺さるべき筈がないといふのは、尤なる議論といはねばならない。然るに私共の主耶蘇は、人を救うて自ら救ふ能はざりしお方である。ペテロが「彼は罪を犯さず、その口に虚偽なく、また罵られて罵らず、苦しめられて脅かさず、正しく審きたまふ者に己を委ね、木の上に懸りて、みづから我らの罪を己が身に負ひ給へり。これ我らが罪に就きて死に、義に就きて生きん爲なり。汝らは彼の傷によりて癒されたり。」(ペテ前二・二二―二四) といふたのは、そのことを意味する。どういふ勿體ないことであらう。(四〇―四六)

◎サウルはイスラエルの王位に即きて後、四方の敵を攻め、戦ふ毎に悉く勝利を得た。こゝに「サウルの一生のあひだ、恒にペリシテ人と烈しき戦あり。」と記してあり。その如く私共も亦、一生のあひだ、常に罪惡と名づくるペリシテ人と、烈しき戦を繼續すべきものである。それ人の世にあるは、戦闘にあるがごとくならずや。(ヨブ七・一) とは、それである。又「サウルは力ある人、または勇ある人を見るごとに、これをかかへたり」とあり。それと同じ様に、私共は断えず神の軍隊のために、その戦闘力の増進を圖らねばならぬ。耶蘇はペテロに向ひ、「わが羔羊を養へ。」(ヨハ二・一五) 又「わが羊を牧へ。」(ヨハ二・一六) と仰せられた。私共は断えず心掛けて、罪人を救に導き、救はれた者を恩恵に成長せしめ、神の軍に屬する戦士を、數に於て増し、質に於て優れたものとならしめん爲に、盡瘁したきものである。(四七―五二)

一六 服従は犠牲に勝る

(サムエル前書第十五章)

一茲にサムエル、サウルにいひけるは、エホバ我をつかはし、汝に膏を沃きて其民イスラエルの王となさしめたり。さればエホバの言の聲をきけ。二萬軍のエホバかくいひたまふ、我アマレクがイスラエルのなせし事、すなはちエジプトよりのほれる時その途を遮りしをかへりみる。三今ゆきてアマレクを撃

ち、其有てる物をことごとく滅しつくし、彼らを憐むなかれ。男女童稚哺乳兒牛羊駱駝驢馬を皆ころせ。四サウル民をよび集めて、これをテライムに核ふ。歩兵二十萬、エダの人一萬あり。五しかしてサウル、アマレクの邑にいたりて谷に兵を伏せたり。六サウル、ケニ人にいひけるは、汝らゆきてさり、ア

マレク人をはなれくだるべし。恐らくはかれらととも
 もに汝らをほろぼすにいたらん。イスラエルの子孫
 のエジプトよりのぼれる時、汝らこれに恩みをほ
 どこしたりと。即ちケニ人、アマレク人をはなれてき
 りぬ。セサウル、アマレク人をうちて、ハピラより
 エジプトの東面なるシユルにいたる。ハサウル、ア
 マレク人の王アガクを生擒り。刃をもて其民をこ
 ごとくほろぼせり。九然れどもサウルと民、アガク
 をゆるし、また羊と牛の最も嘉きもの及び肥えたる
 物、竝に羔と凡て善き物を残して、之をほろぼし
 つくすをこのまず、但悪しき弱き物をほろぼしつ
 せり。一〇時にエホバの言サムエルにのぞみていは
 く、二我サウルを王となせしを悔ゆ。其は彼背き
 て我にしたがはず、わが命をおこなはざればなりと。
 サムエル憂へて終夜エホバにふははれり。一二かく
 てサムエル、サウルにあはんとて夙早起けるに、
 サムエルにつぐるものありていふ、サウル、カルメ

ルにいたり、勝利の表を立て轉り、進みてギルガル
 にくだれり。一三サムエル、サウルの許に至りけ
 れば、サウルこれにいひけるは、汝がエホバより福
 祉を得んことをねがふ。我エホバの命を行へり。一
 四サムエルいひけるは、然らばわが耳にいる此羊
 の聲、およびわがきく牛のこゑは何ぞや。一五サウ
 ルいひけるは、人々これをアマレク人のところより
 引ききたれり。其は民汝の神エホバにさげんため
 に、羊と牛の最も嘉きものをのこせばなり。其ほか
 は我らほろぼしつくせり。一六サムエル、サウルに
 いひけるは、止まれ、昨夜エホバの我にかたりたま
 ひしことを汝につげん。サウルいひけるは、いへ。
 一七サムエルいひけるは、さきに汝が微き者とみ
 づから憶へるときに、爾イスラエルの支流の長とな
 りしにあらすや。即ちエホバ汝に膏を注いでイスラ
 エルの王となせり。一八エホバ汝を途に遣はしてい
 ひたまはく、往きて悪人なるアマレク人をほろぼし、

其盡くるまで戦へよと。一九何故に汝エホバの言を
 きかずして、敵の所有物にはせかり、エホバの目
 のまへに悪をなせしや。二〇サウル、サムエルにい
 ひけるは、我誠にエホバの言にしたがひてエホバの
 つかはしたまふ途にゆき、アマレクの王アガクを執
 りきたり、アマレクをほろぼしつくせり。二一たゞ
 民其ほろぼしつくすべき物の最初として、ギルガル
 にて汝の神エホバにさげんとて敵の物の中より羊
 と牛をとれり。二二サムエルいひけるは、エホバは
 その言にしたがふ事を善みしたまふごとく、燔祭と
 犠牲を善みしたまふや。夫れ順ふ事は犠牲にまさり、
 聽く事は牡羊の脂にまさるなり。二三其は違逆は冤
 術の罪のごとく、抗戻は虚しき物につかふる如く、
 偶像につかふるがごとし。汝エホバの言を棄てたる
 により、エホバもまた汝をすて、王たらしめ給
 ふ。二四サウル、サムエルにいひけるは、我エホバ
 の命と汝の言をやぶりて罪をかしたり。是は民を

おそれて其言にしたがひたるによりてなり。二五さ
 れば今、れがはくはわがつみをゆるし、我とともに
 かへりて、我をしてエホバを拜することをえさしめ
 よ。二六サムエル、サウルにいひけるは、我汝と共
 にかへらじ。汝エホバの言を棄てたるにより、エホ
 バ汝をすて、イスラエルに王たらしめ給はざればな
 り。二七サムエル去らんとて振還りしとき、サウル
 その明衣の裾を捉へしかば、裂けたり。二八サムエ
 ル彼にいひけるは、今日エホバ、イスラエルの國を
 裂きて汝よりはなし、汝の隣なる汝より善きものに
 之をあたへたまふ。二九またイスラエルの能力たる
 者は謊らず、悔いず、そは彼は人にあらざればくゆ
 ることなし。三〇サウルいひけるは、我罪をか
 したれど、れがはくはわが民の長老のまへおよびイス
 ラエルのまへにて、我をたふとみて我とともにかへ
 り、我をして汝の神エホバを拜むことをえさしめよ。
 三一こゝにおいてサムエル、サウルにしたがひてか

へる。しかしてサウル、エホバを拜む。三三時にサ
ムエルいひけるは、汝らわが許にアマレクの王アガ
グをひききたれと。アガグ喜びしげにサムエルの許
にきたり、アガグいひけるは、死の苦みは必ず過ぎ
さりぬ。三三サムエルいひけるは、汝の剣はおほく
の婦人を子なき者となせり。かくのごとく汝の母は
婦人の中の最も子なき者となるべしと。サムエル、

一〇八
ギルガルにてエホバのまへにおいてアガグを斬れ
り。三四かくてサムエルはラマにゆき、サウルはサ
ウルのギベアにのぼりてその家にいたる。三五サム
エル其しぬる日まで、ふたたびきたりてサウルをみ
ざりき。然れどもサムエル、サウルのためになし
めり。またエホバはサウルをイスラエルの王となせ
しを悔いたまへり。

◎モーセは曾て、イスラエル人に向うていうた。汝らがエジプトより出きたりし時、
その路に於てアマレクが汝に爲したりし事を記憶えよ。即ち彼等は汝を途に迎へ、汝
の疲れ倦みたるに乗じて、汝の後なる弱き者等を攻撃てり。斯くかれらは神を畏れざ
りき。(申二五・一七―一九)と。アマレク人はイスラエル人を襲うたのみならず、その旅の
疲労になやめる女子供を攻撃したのは、最も卑怯なる仕打であつた。それが四百年後
の子孫にまでも祟り、今はサウルの手によつて、その仇返をせらるゝことゝなつたの
である。積善の家には餘慶あり。積不善の家には餘殃あり。との語は、一身一家の上
のみならず、又一國民、一民族の上にも、同様に當嵌るものといはねばならない。(一―五)

◎ケニ人といふのは、モーセの舅エテロの家族、若くば縁戚の裔であつた。彼等はイ
スラエル人がエジプトを出た當時、種々親切を盡して彼等の便宜を取計らうた。それ
が報いられて、此の度イスラエル人がアマレク人を討伐するに當つても、その邊に住
んだケニ人にだけは、豫め注意を與へて、難を避けしめることゝなつたのである。前に
バラムがアマレク人の將來を語り、「アマレクは、國々の中の最初なる者なり。其の終
には滅び絶ゆるに至らん。(民二四・二〇)」といひ、又ケニ人を祝福して、「汝の住所は堅
固なり。汝は磐に巢をつくる。(民二四・二二)」と預言したのは、如實に應驗したのであ
る。幸福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。(マタ五・七)又「憐憫は審判にむ
かひて勝ち誇るなり。(ヤコニ・一三)」といふこともあり。親切はしておくべきものだとい
ふことを、今一度ケニ人の上について學ぶのである。(六)

◎サウルはアマレク人をうちて、男女老幼の差別なく、牛、羊、駱駝、驢馬まで、残
らず殺害すべきことを命ぜられたに拘らず、アマレク人の王アガグを赦し、之を捕虜

として連歸つたのみか、又牛羊等の凡て善き物を残して、たゞ劣等貧弱なもののみ滅した。そこで神はサムエルに向ひ、「我サウルを王となせしを悔ゆ。其は彼背きて我にしたがはず、わが命をおこなはざればなり。」と仰せられ、サムエルは又それを聞き、憂ひて終夜エホバに呼はつたとある。人なんぢの法をまもらざるによりて、わが眼のなみだ河のごとくに流る。(詩一九・一三六)といふのは、サムエルの経験であつた。主イエスは又、預言者によつて「悲哀の人」(イザ五三・三)と呼れ給うた。私共は他人の罪の爲に、泣いて神に訴ふる程の眞實を有したきものである。それにも拘らず、サウルは戦勝つて得意になり、カルメルに往いて戦勝記念碑を建てたといふのは、高慢自負の甚しきものとして、心外千萬のことといはねばならぬ。(セ一・二)

◎サムエルは、サウルが神の命を行ふことの不十分なるを見て、之を詰責し、「さきに汝が微き者とみづから憶へるときに、汝イスラエルの支派の長となりしにあらざや。即ちエホバ汝に膏を注いでイスラエルの王となせり。何故に汝エホバの言をさかずして、敵の所有物にはせかり、エホバの目のまへに惡をなせしや。」といふた。神は私

共が自らの弱く、力なきことを知り、謙遜してその御前に出る時、取上げて之を用ひ給ふ。それ故神はモーセが、「我は如何なる者ぞや。我豈バロの許に往き、イスラエルの子孫をエジプトより導きいだすべき者ならんや。」(出三・一二)と、謙つてその御前にある時、彼にイスラエルの子孫を、バロの壓迫から解放すべき大任を授け給うたのである。又ギデオンが「あゝ主よ、我何をもてかイスラエルを拯ふべき。視よ、わが家はマナセのうちの最も弱きもの、我はまた父の家の最も卑賤きものなり。」(士六・一五)と、己が力なきを訴へる時、之を強くし、用ひてミデアン人の大軍を打破らしめ給うたのである。「神は世の貧しき者を選びて信仰に富ませ」(ヤコ二・五)給ふといふのは、そのことである。又神は、「有る者を亡さんとて世の卑しきもの、輕んぜらるる者、すなはち無きが如き者を選び給ふ。」(コリ前一・二八)と教へてあるのも、同じ道理を語るものである。私共は身の程を知つて謙遜に、神の榮を顯すことを何よりの目當として、奉仕するやうでありたい。(一三・一九)

◎サウルが、その肥えたる牛羊などを保存し置きたるわけは、それらを用ひて神に犧

性を獻げん爲であると、申譯するのに對し、サムエルはいうた。「夫れ順ふ事は犠牲にまさり、聽く事は牡羊の脂にまさるなり。其は違逆は魔術の罪のごとく、抗戻は虚しき物につかふる如く、偶像につかふるがごとし。汝エホバの言を棄てたるにより、エホバもまた汝をすてて、王たらざらしめ給ふ」と。不從順は魔術を行ひ、又は偶像に事ふる者と同じく、神の前に最も忌み嫌はるべき行爲である。然しながら素直に御旨に従ふことは、數多度犠牲を獻げ、神を禮拜するにまさりて、たふとき行爲である。他の場合に、「エホバ數千の牡羊、萬流の油を悦びたまはんか。我が愆のためにわが長子を獻げんか。我が靈魂の罪のために、我が身の産を獻げんか。人よ、彼さきに善事の何なるを汝に告げたり。エホバの汝に要めたまふ事は、唯正義を行ひ、憐憫を愛し、謙遜りて汝の神と偕に歩む事ならずや。」(ミカ六・七、八)又「わが神よ、我は御意にしたがふことを樂しむ。」(詩四〇・八)というてあるのは、そのことである。(二〇一三二)

◎アマレク人の王アガは、死の手が彼を待受けて居るのを知らず、「死の苦は必ず過ぎさりぬ」というた。此の如く、人は案外の時、死に直面すること多きものである。

「誰もいつか死ぬるといふ程、確實なこともなく、又誰も、いつ死ぬるか知らぬといふ程、不確實なこともない。」というた人がある。それ故私共は何時神の前に出てもよい様に、豫てからその用意がなくてはならぬ。基督を信する信仰は、私共をして死に打勝たしむるものである。「死よ、なんぢの勝は何處にかある。死よ、なんぢの刺は何處にかある。されど感謝すべきかな、神は我らの主耶蘇基督によりて勝を與へたまふ。」(コリ前一五・五五、五七)と、使徒パウロは教へたのである。(三二一三五)

一七 牧童ダビデ

(サムエル前書第十六章)

一爰にエホバ、サムエルにいひ給ひけるは、我すてにサウルを棄て、イスラエルに王たらしめざるに、汝いつまでかれのために歎くや、汝の角に膏油を満してゆけ。我汝をベレヘム人エサイの許につかはさん。其は我、其子の中に一人の王を尋ねえたらば

なり。ニサムエルいひけるは、我いかて往くことをえん。サウル聞いて我をころさん。エホバいひたまひけるは、汝一犢を携へゆきて言へ、エホバに犠牲をさしげんために來ると。ミしかしてエサイを犠牲の場によべ。我汝が爲すべき事をしめさん。わが汝

に告ぐるところの人に膏をそぐ可し。四サムエル、エホバ語ひたまひしごとくなして、ベテレヘムにいたる。邑の長老おそれて之をむかへ、いひけるは、汝平康なる事のためにきたるや。五サムエルいひけるは、平康なることのためなり。我はエホバに犠牲をさしげんとてきたる。汝ら身をきよめて我とともに犠牲の場にきたれと。斯てエサイと其諸子を潔めて犠牲の場によびきたる。六かれらが至れる時、サムエル、エリアアを見ておもへらく、エホバの膏そそぐものは必ず此人ならんと。七しかるにエホバ、サムエルにいひたまひけるは、其容貌と身長を觀るなかれ。我すてにかれをすてたり。わが觀るところは人に異なり、人は外の貌を見、エホバは心を見るなり。八エサイ、アピナダアをよびてサムエルのまへを過ぎしむ。サムエルいひけるは、此人もまたエホバ擇みたまはず。九エサイ、シヤンマを過ぎしむ。サムエルいひけるは、此人もまたエホバえらみたま

はず。一〇エサイ其七人の子をしてサムエルのまへをすぎしむ。サムエル、エサイにいふ、エホバ是等をえらみ給はず。一一サムエル、エサイにいひけるは、汝の男子は皆此に在るや。エサイいひけるは、尙季子のこれり。彼は羊を牧ひたるなりと。サムエル、エサイにいひけるは、彼を迎へ來らしめよ。かれが此にいたるまでは我ら食に就かざるべし。一二是において人をつかはして彼をつれ來らしむ。其人色赤く、目美しくして、その貌麗くし。エホバいひ給ひけるは、起ちて之にあぶらを沃げ。是其人なり。一三サムエル、膏の角をとりて其兄弟の中にて、これに膏をそげり。此日よりのちエホバの靈ダビデにのぞむ。サムエルはたちてラマにゆけり。一四かくてエホバの靈サウルをはなれ、エホバより來る惡鬼これを惱せり。一五サウルの臣僕これにいひけるは、觀よ神より來れる惡鬼汝をなやます。一六れがはくはわれらの主汝のまへにつかふる臣僕に命じ

て、善く琴を鼓く者一人を求めしめよ。神より來れる惡鬼汝に臨む時、彼手をもて琴を鼓いて汝いゆることをえん。一七サウル臣僕にいひけるは、我ために巧に鼓琴者をたづねて、わがもとにつれきたれ。一八時に一人の少者たへていひけるは、我ベテレヘム人エサイの子を見しが、琴に巧にして、また豪氣くして善くたふ。辯舌さはやかなる美しき人なり。かつエホバこれとともにいます。一九サウルすなはち使者をエサイにつかはしていひけるは、羊をかふ汝の子ダビデをわがもとに遣はせと。二〇エ

サイすなはち驢馬にパンを負はせ、一囊の酒と山羊の羔を執りて、これを其子ダビデの手によりてサウルにおくれり。二一ダビデ、サウルの許にいたりて其まへに事ふ。サウル大にこれを愛し、其武器を執る者となす。二二サウル人をエサイにつかはしていひけるは、れがはくはダビデをしてわが前に事へしめよ。彼はわが心にかなへりと。二三神より出たる惡鬼サウルに臨めるとき、ダビデ琴を執り、手をもてこれを強くに、サウル慰さみて愈え、惡鬼かれを

◎神はサムエルに向ひ、「我すでにサウルを棄て、イスラエルに王たらしめざるに、汝いつまでかれのために歎くや。」と仰せられた。サムエルは、その子等の非行を見出した時に比べても、比較にならない程サウルの失敗を悲しんだ。彼は幾日となくその爲に悲嘆をつゞけて、神から御叱を受けたのである。傳道之書の記者がいうた様に、「泣くに時あり、笑ふに時あり。」(傳三・四)サムエルがサウルとその支配を受くる人民との爲

に、憂ひ悲しんだのはよい。けれどもそれも程度のあることである。いゝ加減の時には氣を取直し、それに對する今後の處置を爲すべき必要があつた。其の昔ノアは、大洪水の將に至らんとする罪惡の世にありて、世の人の罪を悲しんだのみならず、義の宣傳者として、進んで彼等の救の爲に奮闘した。之に反してロトは、ソドムの腐敗極まる邑に住みながら、その周圍の人々の爲にたゞ憂へただけで、それより以上に何等なす所がなかつた。(ベテ後二・五七) 私共は世の罪人の爲に悲しむのみならず、進んで彼等を濟度する爲に盡瘁するやうでなくてはならぬ。(一)

◎サムエルは、ベテレヘムに往いてエサイを訪ね、その子の一人に神の召を告げて、之に膏注ぐべきことを命ぜられた。その如く神は何時の時代にも、その御用の爲に立働くべき人々を召し、又選んでゐ給ふのである。それ故に神はウエスレー兄弟を、オックスフォード大學生の中から、ジョン・バンヤンをベッドフォードの鑄掛屋から、ムーデーをシカゴの靴店から、ウイリアム・ブースをロンドンの質屋から、新島襄を幕末志士の中から、石井十次を醫學生の群から、それぞれ召出して用ひ給うたのである。

る。神は私共個々を呼び出し、それぞれ何等かの務に任じて、神の御國の爲に盡させ給ふ。私共はその御聲を聞きのがさぬやう注意し、一旦それを聞いた以上は、古の弟子たちと同じ様に、直ちに起ちて之に従はねばならぬ。(二一五)

◎サムエルはエサイの家にて、その子等に面會した。彼は先づその長子エリアブを見て、エホバの膏注ぐ者は必ず此の人ならんと推したるにも拘らず、神はサムエルに向ひて、「其の容貌と身長を觀るなかれ。我すでにかれをすてたり。わが視るところは人に異り、人は外の貌を見、エホバは心を見るなり。」と仰せられた。イスラエル人は前に、堂々たる風貌を備へたサウルが、見かけほどでもない人物であるのに、手を焼いた所である。神が外貌によつて、エリアブと、又その弟アビナダブ、シヤンマ等を選び給はなかつたのは、如何にも尤なことである。イザヤ書の記者は救主耶穌のことを預言して、「われらが見るべき容なく、うつくしき貌はなく、我儕がしたふべき艷色なし。」(イザ五三・二)といひ、パウロは又、その時代の人から、「その逢ふとき容貌は弱く、言は鄙し。」(コリ後一〇・一〇)と評せられた。人の容貌風采は、その人と

爲りを或る程度まであらはすものではあれど、必ずしもその全部をあらはすものと言ひ難い場合がある。それ故私共は、人を外見によつて判断し、その爲に、とんだ間違をするやうなことがあつてはならぬ。(六一一〇)

◎エサイの七人の子供は、いづれもその人でないことがわかつた後、サムエルはエサイに向ひ、「これで皆か」を尋ねると、答へて、「尙季子のこれり。彼は羊を牧ひをるなり」とのことに、急ぎ彼を迎にやると、やがてダビデは入り來つた。「其の人の色赤く、目美しくして、その貌麗くし」とあるのを見れば、彼が如何に血色のよい、伶俐にして、純真なる一青年であつたかを、想像せらるゝ。エサイとその一家のものは、まさか彼が神の選をうけて、王とならう等とは考へられず、全然彼を度外視して居つた。スコットランドの或る教會の役員が、その牧師に向ひ、「あなたの傳道は甚だ不結果である。去る一年間、たゞ一人の青年を基督に導いたばかりではありませんか」といふのを聞いて、牧師は涙を流し、甚く自分の腑甲斐のないことを悲んだ。然しながら、その數ふるに足らぬ青年と思はれた者が、發憤して志を立て、後、アフリカに於ける

宣教の先驅者となつた。ロバート・モファットといふのは、その人であつたと傳へられて居る。それ故青年を粗末に取扱うてはならぬ。ダビデがその父エサイから閑却せられ、モファットがその教會の役員から無視せられた當時を思つて、戒心するところありたきものである。(一一一三)

◎エホバの靈はサウルを離れ、その代に惡魔が之を惱ますこととなつた。そこでよく琴を弾く者一人を求め、惡魔の來り惱ます時には、琴を弾いて之を慰めたがよからうといふことになり、その候補者を物色すると、或人がダビデを推薦して「我、ペテレム人エサイの子を見しが、琴に巧にして、また豪氣くして善くたたかふ、辯舌さはやかなる美しき人なり。かつエホバこれとともにいます」というた。ダビデは琴を弾いて、歌ふことの上手な音楽者であると共に、豪膽なる武人であつた。又辯舌さはやかなる才人であると共に、エホバ之と偕に在す敬虔の人であつたといふのは、簡單なれども明瞭に、彼の優れた人柄を語るものであつた。格別に大切なるは、エホバが之と偕に在したといふことである。ペテロは後に耶蘇の生涯を語りて「彼は偏くめぐり

て善き事をおこなひ、凡て悪魔に制せらるゝ者を醫せり。神これと偕に在したればなり。(使一〇・三八) とうて居る。しかもこれは、當年のダビデと同じ様に、心がけ一つでは、青春の時代から早くも體驗することを得べき、げにも忝き神の恩寵である。(一四一八)

◎攝理の御手は不思議に働いて、ベテレヘムの牧童ダビデは、圖らずもサウルの許にて、その近侍となり、之に奉仕することゝなつた。斯て悪魔がサウルに臨める時には、ダビデが琴を弾くとサウルは慰められ、病癒えて、悪鬼が彼を離れたのである。此の如く音楽は之をよく用ゆれば、人を悪の力から救ひ、神に近づけ、又神の御軍を戦はしむる上に、大なる力となるものである。今日救世軍中にある、幾萬人の樂隊員及び唱歌隊員は、皆いにしへのダビデと同じ様に、その音楽的の才能を神に獻げ、之を聖別して、専ら神の榮と人の救との爲に、盡瘁するものである。もつともつと、さうした獻身的奉仕の人を、多く増加へたきものである。(一九、二〇)

一八 巨人ゴリアテ

(サムエル前書第十七章一—三〇)

一爰にペリシテ人其軍を集めて戦はんとし、ユダに屬するシヨコにあつまり、シヨコとアゼカの間なるバズガミムに陣をとる。ニサウルとイスラエルの人集まりてエラの谷に陣をとり、ペリシテ人にむかひて軍の陣列をたつ。ミペリシテ人は此方の山にたち、イスラエルは彼方の山にたつ。谷は其あひだにあり。四時にペリシテ人の陣よりガテのゴリアテと名づくる挑戦者いできたる。其身の長六キエビト半、五首に銅の盔を戴き、身に鱗綴の鎧甲を着たり。其ふるひの銅のおもさは五千シケルなり。六また脛には銅の脛當を着け、肩の間に銅の矛戟を負ふ。七其槍の柄は機梁のごとく、槍の鋒刃の鐵は六百シケルなり。楯を執る者その前にゆく。

ハゴリアテ立ちてイスラエルの諸行伍にふははりいひけるは、汝らは何ぞ陣列をなしていできたるや。我はペリシテ人にして汝らはサウルの臣下にあらずや。汝ら一人をえらみて我とこころにくだせ。九其人もし我とたたかひて我をこるすことをえば、我ら汝らの臣僕とならん。されど若し我かちてこれを殺さば、汝ら我らの僕となりて我らに事ふ可し。一〇かくて此ペリシテ人いひけるは、我今日イスラエルの諸行伍を挑む。一人をいだして我と戦はしめよと。一一サウルおよびイスラエル、みなペリシテ人のこの言を聞き、驚きて大に懼れたり。一二抑ダビデはかのベテレヘムユダのエフラタ人エサイとなづくる者の子なり。此人八人の子ありしが、サウルの世に

は年邁みてすてに老いたり。一三エサイの長子三人
 ゆきてサウルにしたがひて戦争にいづ。其戦にいて
 し三人の子の名は長をエリアブといひ、次をアピナ
 ダブといひ、第三をシャンマといふ。一四ダビデは
 季子にして其兄三人はサウルにしたがへり。一五ダ
 ビデはサウルに往來して、ベレヘムにて其父の羊
 を牧ふ。一六彼ヘリシテ人四十日のあひだ、朝夕近
 づきて前にたてり。一七時にエサイ其子ダビデにい
 ひけるは、今汝の兄のために此烘麥一斗と此十のバ
 ンを取りて、陣營に在る兄のところにいそぎゆけ。
 一八また此十の乾酪をとりて其干夫の長におくり、
 兄の安否を視て其返事もちきたれと。一九サウル
 と彼等およびイスラエルの人は、皆ヘリシテ人とた
 たかひてエラの谷にありき。二〇ダビデ朝風くおき
 て羊をひとりの牧者にあづけ、エサイの命ぜしごと
 く携へゆきて軍營にいたるに、軍勢いてて行伍をな
 し、鯨波をあげたり。二一しかしてイスラエルとヘ

リシテ人陣列をたてし、行伍を行伍に相むかはせたり。
 二二ダビデ其荷をおろして荷をまもる者の手に
 わたし、行伍の中にはせゆきて兄の安否を問ふ。二三
 ダビデ彼等と俱に語れる時、視ふ、ヘリシテ人の行
 伍よりガテのヘリシテのゴリアテとなづくる彼の挑
 戦者のぼりきたり、前のことばのごとく言ひしか
 ば、ダビデ之を聞けり。二四イスラエルの人その人
 を見て皆逃げて之をはなれ、痛く懼れたり。二五イ
 スラエルの人いひけるは、汝らののぼり來る人を見
 しゃ。誠にイスラエルを挑んとて上りきたるなり。
 彼をころす人は王大なる富を以てこれをとまし、其
 女子をこれにあたへて其父の家にはイスラエルの中
 にて租税をまぬかれしめん。二六ダビデ其傍にた
 てる人々にかたりていひけるは、此ヘリシテ人をこ
 ろし、イスラエルの恥辱を雪ぐ人には如何なること
 をなすや。此割禮なきヘリシテ人は誰なればか活け
 る神の軍を挑む。二七民まへのごとく答へていひけ

るは、かれを殺す人には斯のごとくせらるべしと。
 二八兄エリアブ、ダビデが人々とかたるを聞きしか
 ば、エリアブ、ダビデにむかひて怒りを發しいひけ
 るは、汝なのために此に下りしや。彼の野にある
 わづかの羊を誰にあづけしや。我汝の傲慢と惡しき

心を知る。其は汝戦争を見んとて下ればなり。二九
 ダビデいひけるは、我今なにをなしたるや、只一言
 にあらずやと。三〇又ふりむきて他の人にむかひ、
 前のごとく語れるに、民まへのごとく答へたり。

◎ペリシテ人が、イスラエルに押寄せて來たに對し、サウルとイスラエルの人々は、
 之に向うて軍の陣列をたて、ペリシテ人は此方の山に、イスラエルは彼方の山に、谷
 を隔て、對抗した。それと同じ様に、人生は戰場である。私共の前には正と邪と、善
 と惡と、基督と惡魔との戦争が、常に行はれて居る。しかも私共は基督に屬する軍人
 として、正を以て邪に勝ち、善を以て惡を征服するため、基督の指揮の下に戦ふ軍
 人である。耶蘇の御言に、「われ地に平和を投ぜんために來れりと思ふな。平和にあら
 ず、反つて劍を投ぜん爲に來れり。」(マタ一〇・三四)とあり。使徒パウロは又、「汝、基督
 耶蘇のよき兵卒として、我とともに苦難を忍べ。」(テモ後二・三)というて居る。救世軍
 は、神がこの救の御軍を戦はしめん爲に、起し給うた軍隊である。私共は十字架の戦

士として、恥かしからぬ軍人でありたきものである。(一一三)

◎ペリシテ人の陣中に、ゴリアテと名づくる豪傑が出で來つた。その身の丈が六キユピト半(約二米九二釐、即ち九尺五寸七分)首に銅の盔を戴き、身に鱗綴の鎧甲を着て居る。そのよろひの銅のおもさは五千シケル、(約四十疋、即ち十貫六六六匁)又脛には銅の脛當を着け、肩の間に銅の矛戟を負ひ、其の槍の柄は機の梁のごとく、槍の鋒刃の鐵は六百シケル(約四、八疋、即ち一貫二八〇匁)であつた。それが毎日朝夕二回、陣頭に現れ出で、大聲に名乗を上げたのである。これを日本流にいひかへれば、「遠からん者は音にも聞け、近くは寄つて目にも見よ。我はペリシテ人の中にその人ありと知られたる、ガテのゴリアテである。我と思はん者は、來つて勝負を決せよ。」と呼はるのを聞いて、イスラエル人はたゞもう、懼れ慄くばかりであつた。ウイリアム・ブース大將の言に、「今日惡魔の軍隊に於けるゴリアテは、すなはち情慾である。この情慾てふ巨人の手にかゝつては、あらゆる人々が縦横無盡になぎたふされ、其の脚の下に踏みにおられて、無慘の最後を遂げて居るのである。」といはれた。考へ方によつては、たゞ情慾だ

けでなく、飲酒も、賭事も、財寶も、歡樂も、又皆當代のゴリアテと呼ばれて然るべきで、惡魔の軍の巨人である。私共は餘程の覺悟がなくては、かうした罪惡の巨人に對抗して立つことが、難しいのである。(四一一)

◎昔の人は、「少年にして高科に登る、一の不幸なり」というて居る。青年の時代に、あまり早く富貴顯榮に近づくのは、その人の生涯を誤ることが多いものである。ダビデは圖らぬことから召し出されて、サウルの侍臣となり、宮中に出入することゝなつたが、それにも拘らず家に歸ると、直に従前通、牧場に往いて、父の羊を牧うて居つた。斯して彼が何處までも勞働を重んじ、質朴單純なる牧童生活を離れなかつたのは、喜ぶべきことである。神の子耶蘇は人の姿をとつて世に現れ、殊に田舎大工の子として育つのみならず、自ら亦、大工の働に従事し給うた。彼は仰せられた。「わが父は今にいたるまで働き給ふ。我もまた働くなり。」(ヨハ五・一七)と。私共は胸に敬虔の念を蓄へつゝ、正直の額に汗して、勤勞することの貴さを、知る者でありたい。(二二一六)

◎父のエサイが、その子ダビデに命じて、若干の食料品を出征中の三人の子の許に、

持ち行かしためたのは、今でいうたら、慰問袋を出征軍人に贈つたわけである。否、昔のことであるから、兵站部の組織も今日の様には調はず、斯して食物を出征軍人に送り届けることは、彼等の絶対必需品を送られたのであつたかとも、考へらるゝ。今日の聖戦に於ても之と似て、私共は神の軍隊に身を獻げ、専らその御軍を戦ふ軍人を貢ぎ、彼等がなくなつてかなはぬものに事を缺かざるやう、之を保護すべき必要がある。労働人の、その食物を得るは相應しきなり。(マタ一〇・一〇)又「なんぢら知らぬか、聖なる事を務むる者は宮のものを食し、祭壇に事ふる者は祭壇のものに與るを。斯のごとく主もまた福音を宣傳ふる者の、福音によりて生活すべきことを定め給へり。(コリ前九・一三、一四)等と、教へてあるではないか。(一七一・二二)

◎ダビデが父からの贈物を携へて、その兄等を陣地に尋ね居る際、恰も巨人ゴリアテが敵の陣より現れ出で、大音聲に名乗つて、戦を挑むのに出會うた。しかもイスラエル勢が残らず甚く恐れて、早や逃腰になつて居る状を見て、憤慨に堪へず、自ら進んで彼と一戦せんことを決心するに至つたのは、全く彼の純真なる信仰と、又熱烈なる愛國心とによるものである。此の如く眞に神を愛する者は、その國を愛し、又その同胞を愛するものである。後にパウロが、「もし我が兄弟、わが骨肉の爲にならんには、我みづから誼はれて、基督に棄てらるゝも亦ねがふ所なり。(ロマ九・三)というて、その同胞の救のために必死に健闘したる如き、又同じ愛國心が異なる方面に發揮せられたものと見て然るべく。この意味に於て、眞の基督者は最も信頼するに足る、愛國者たるべきものである。(二二一・二七)

◎エリアブは、その弟ダビデが、あまり乘氣になつて、戦争に出たりなどすることを好まず、彼の慢心と物好とを詰責したといふことである。此の如く私共が神の召を聞き、救の御軍の爲に起ち上らんとする時、また往々、その家族、郷黨の無理解の爲に妨げらるゝやうなことがある。耶蘇が多數の群衆を對手に、食事する暇もなく、その教化に盡瘁せらるゝのを見て、親族の者は、彼を狂へりと謂ひて、取押へんと出で來つたことがある。(マル三・二〇、二二) 彼は又、その郷里ナザレに歸つた時、その邑の人々が、彼に對してあまりに無理解なのを見て、「預言者は、おのが郷、おのが親族、おの

が家の外にて尊ばれざることなし。(マル六・四)と、嘆息し給うたことがある。彼の言に、又「人の仇は、その家の者なるべし。(マター一〇・三六)といふこともあり。私共は時としては、所謂「大義親を滅する」の大決心を以て、神の御軍に直前すべき必要あることを知らねばならぬ。(二八―三〇)

一九五つの小石

(サムエル前書第十七章三一―五八)

三二人々ダビデが語れる言をきいて、これをサウルのまへにつげければ、サウルかれを召す。三三ダビデ、サウルにいひけるは、人々かれがために氣をおとすべからず。僕ゆきてかのペリシテ人とたしかはん。三三サウル、ダビデにいひけるは、汝はかのペリシテ人をむかへてたしかふに勝へず。其は汝は少年なるに彼は若き時よりの戦士なればなり。三四ダ

ビデ、サウルにいひけるは、僕さきに父の羊を牧へるに、獅子と熊と來りて其群の羔を取りたれば、三五其後をおひて之を搏ち、羔を其口より授ひだせり。しかし其獸我に猛りかゝりたれば、其鬚をとらへてこれを撃ちころせり。三六僕は既に獅子と熊とを殺せり。此割禮なきペリシテ人、活ける神の軍をいどみたれば、亦かの獸の一のことくなるべし。

三七ダビデまたいひけるは、エホバ我を獅子の爪と熊の爪より授ひいだしたまひければ、此ペリシテ人の手よりも授ひいだしたまはんと。サウル、ダビデにいふ、往け、れがはくはエホバ汝とともにいませ。三八是においてサウルおのれの戎衣をダビデに衣せ、銅の盔を其首にかむらせ、亦鱗綴の鎧をこれにきせたり。三九ダビデ戎衣のうへに劍を佩びて往かんことを試む。未だ験せしことなければなり。しかしてダビデ、サウルにいひけるは、我いまだ験せしことなければ、是を衣ては往くあたはずと。四〇ダビデこれを脱ぎすて、手に杖をとり、谿間より五の光滑なる石を拾ひて、之を其持てる牧羊者の具なる袋に容れ、手に投石索を執りてペリシテ人にかづく。四一ペリシテ人進みきてダビデに近づけり。桶を執るもの其まへにあり。四二ペリシテ人環視てダビデを見て之を藐視る。其は少くして赤く、また美しき貌なればなり。四三ペリシテ人、ダビデにい

ひけるは、汝杖を持ちてきたる。我豈犬ならんやと。四四ペリシテ人其神の名をもつてダビデを呪ふ。四五しかししてペリシテ人ダビデにいひけるは、我がもとに來れ。汝の肉を空の鳥と野の獸にあたへんと。四六ダビデ、ペリシテ人にいひけるは、汝は劍と槍と矛戟をもて我にきたる。然れど我は萬軍のエホバの名すなはち汝が挑みたるイスラエルの軍の神の名をもて汝にゆく。四六今日エホバ汝をわが手に付したまはん。われ汝をうちて汝の首級を取り、ペリシテ人の軍勢の尸體を今日空の鳥と地の野獸にあたへて、全地をしてイスラエルに神あることを知らしめん。四七且又この群衆みなエホバは救ふに劍と槍を用ひ給はざることを知るにいたらん。其は戦はエホバによれば、汝らを我らの手にわたし給はんと。四八ペリシテ人すなはち立ちあがり、進みちかづきてダビデをむかへしかば、ダビデいそぎ陣にはせゆきてペリシテ人をむかふ。四九ダビデ手を囊にいれて其中

より一つの石をとり、投げてペリシテ人の頸を撃ちければ、石其頸に突き入りて俯伏に地に仆れたり。

五〇かくダビデ投石素と石をもてペリシテ人にかち、ペリシテ人をうちて之をころせり。然れどダビデの手には劍なかりしかば、五二ダビデはしりてペリシテ人の上のり、其劍を取りて之を鞘より抜きはなし、之をもて彼をころし、その首級を斬りたり。爰にペリシテの人々その勇士の死ぬるを見てにげしかば、五三イスラエルとエダの人おこり、喊呼をあげてペリシテ人をおひガテの入口およびエクロンの門にいたる。ペリシテ人の負傷人シヤライムの路に仆れて、ガテおよびエクロンにおよぶ。五三イスラエルの子孫ペリシテ人をおふてかへり、其陣を掠む。

◎ダビデは召されて、サウルに見ゆることとなつた。サウルが彼に向ひ、「汝はかのペリシテ人をむかへてたしかふに勝へず、其は汝は少年なるに、彼は若き時よりの戦士なればなり」といふと。ダビデは、彼が前に父の羊を牧へる時、獅子と熊とが襲ひ來

五四ダビデかのペリシテ人の首を取りて之をエルサレムにたづさへ來りしが、其甲冑はおのれの天幕におけり。五五サウル、ダビデがペリシテ人にむかひて出づるを見て、軍長アブネルにいひけるは、アブネル此少者はたれの子なるや。アブネルいひけるは、王汝の靈魂は生く、われしらするなり。五六王いひけるは、この少年はたれの子なるかを尋ねよ。五七ダビデかのペリシテ人を殺してかへれる時、アブネルこれをひきて其ペリシテ人の首級を手にもてるま、サウルのまへにつれゆきければ、五八サウルかれにいひけるは、若き人よ、汝はたれの子なるや。ダビデこたへけるは、汝の僕ベテレム人エサイの子なり。

つたのに對抗し、之を打殺したことを語り、「エホバ、我を獅子の爪と熊の爪より援ひいだしたまひければ、此のペリシテ人の手よりも援ひいだしたまはん。」というた。彼はその牧場に於ける日常生活の經驗から推して、隣國との戦争に於ける必勝を期待したのであつた。ペテロの言に、「憤みて目を覺しをれ、汝らの仇なる惡魔、ほゆる獅子のごとく、歴廻りて吞むべきものを尋ぬ。」(マテ前五・八)とあり。私共も亦、その平常の生活に於て、よく獅子又は熊にも似たる惡魔と戦うて、之に打勝つて居るやうであれば、それはやがて、聖戦の晴の場面に、同様の勝利を得べき前兆とも見るべく、是非ともさうした體驗をして居たいものである。(三二―三七)

◎サウルはダビデを祝福して、「往け、ねがはくはエホバ、汝とともにいませ」といひ、己の戎衣をダビデに衣せ、銅の盔を其の頭にかむらせ、亦鱗綴の鎧をこれにさせた。そこでダビデはその戎衣を着けたらへに、劍を佩びて往かんことを試みたが、何分はじめてのことにて、身體の自由を奪はれた様に覺え、とても快活な戦争が出来さうにもない故、折角王から與へられた戎衣を、其處に脱ぎすてた。私共の救靈の戦

争に於けるも亦之と似て、私共が身に不慣れた哲學、神學の議論など、ふりまはさうとすると、それに拘束せられて、思ふ存分の快戦をし兼ねる場合が多くある。それよりも寧ろ自分の柄にあふ方法にて、あまりのまゝに道を語るに如くはない。救世軍の日本に於ける第一回の兵士入隊式に先だち、その回心者の一人がライト大佐に向ひ、「時に司令官、今でさへ、人々が基督教につき、又救世軍につき、種々返事の出来な様な問を掛けて困つて居ります。それが愈々兵士となつた曉には、尙更いろいろのことを聞かれて、當惑することかと思ひますが、さういふ場合には、どうしたものでせうか」と尋ねると、大佐は笑ひながら、「どんな難問題を持ちかけられても、之に應ずべき答があつて、それは『知りません』といふのであります。」との話であつた。其の如く私共は、知らざるを知らずとして、少くとも一つ、自分が罪から救はれた事實ばかりは、確實に知つて居り、何處でも、何時でも、又何人に對しても、大膽にそれを證言し得るやうでありたい。凡そ福音を證言するに戒むべきは、氣取つたり、銜うたり、又は勿體ぶつたりすることである。其の反對に肝要なるは、何處までも單純にして、

又熱誠ならんことである。(三八、三九)

◎ダビデは、谷間より五つの光滑なる石を拾ひ、それを牧童が常用する袋に入れ、手には投石索を執つて、ゴリアテに向ふことゝなつた。光滑なる石といふからには、彼は豫ての經驗上、圓い、平たい、すべつこい、風を切つて飛ぶに適當な石を、選んだものに相違ない、彼は鎧、冑と劔をこそ辭したれ、投石索と石との詮議には、十二分の注意を拂うたものと察せらるゝ。しかも一つの石で目的を果さずば二つ、二つで目的を果さずば三つ、四つ、五つの石を投げる間には、必ず敵を休し得べきことを確信して、起ち上つたのである。救の戰場に向ふ私共も亦、それと同じく、少くとも五つの光滑なる石の用意がなくてはならぬ。哲學、神學、その他此の種の七つ道具は、よしその用ひ途を知らずとも、少くとも別に十分吟味した、五つの光滑なる石ばかりは平生から之を用意して居るべき必要がある。私共が基督の軍人として用意し居るべき五つの石とは、聖き人格と、祈と、愛と、捨身の奮闘と、聖靈の御助とが、これであるというて可からう。これは如何なる無學文盲の人にも、身に帶ることが出来ると共に、

又如何なる學者物知りも、これなくしては、救の御軍に勝利を得べき望が、絶えてないものと思はねばならぬ。(四〇)

◎ゴリアテは、ダビデが紅顔の一少年なるを見て、之を侮り、「汝杖を持ちて來る。我豈犬ならんや」といひ、又「我がもとに來れ、汝の肉を空の鳥と野の獸にあたへん」と怒號した。然しながらダビデは、飽くまでも神によつて進み戦うたのである。「我は萬軍のエホバの名をもて汝にゆく。」今日エホバ汝をわが手に付したまはん。「且又この群衆みな、エホバは救ふに劍と槍を用ひ給はざることを知るにいたらん。」と、彼はいうた。ダビデにとつては、この戦は正しくエホバの戦であつた。後に彼が「或は車をたのみ、或は馬をたのみとする者あり、されど我等は、わが神エホバの御名をとなへん。」(詩二〇・七)というたのは、此の際に於ける彼の立場であつた。(四一―四七)

◎イスラエル人の中には、昔から投石索に巧な者が多くあり。すなはちベニヤミン人について、「この諸の民の中に左手利の精兵七百人あり。皆能く投石器をもて石を投ぐるに、毫末もたがふことなし。」(士二〇・一六)等とあるのは、それである。中にもダビデ

は、殊に勝れた投石索の選手であつた。彼が信仰と祈とを籠めて投じた石は、唯一撃の下に、さしもの豪勇、曠世の巨人ゴリアテを打倒したのである。ラビの間に存する傳説によれば、ゴリアテがダビデに向ひ、「來れ、汝の肉を空の鳥と野の獸とに與へん」と、首を振りながら大聲に罵る際、胃は脱げて地に落ちた。其處をねらうたダビデの小石は、彼の前額を深く穿つて、之を仆したのだと、いうてある。いづれにもせよ、ダビデは神によつて奇捷を得た。いかなる腕力も、武勇も、神に逆ふ力はないからであつた。その結果、ペリシテの軍は總崩れとなり、イスラエルの軍勢は目覺しき大勝利を得るに至つたのである。(四八―五〇)

◎サウルは發作的に、一種の精神病に悩まれて居つた。ダビデはかねて彼の前にて、しばしば奏樂などして居つたに拘らず、忽ち彼が何者であつたかを忘却し、軍長アブネルに「此の少者は誰の子なるや」と尋ねた如きは、之が爲に外ならない。此の如く、人は往々病氣其の他の理由で、健忘症に陥ることあるものである。しかし乍ら私共の神は、私共ひとりくに對して正確なる記憶を有し給ふ。神はその昔、ノアとその方

舟にある諸の生物とを記憶して、之を救ひ給ひ、(創八・一) 又アブラハムと彼の祈とを記憶して、ロトをソドムの滅亡より救ひ出し給うたお方である。(創一九・二九) 十字架の賊は、「耶穌よ、御國に入り給ふとき、我を憶えたまへ」と祈り、彼から、「われ誠に汝に告ぐ、今日なんぢは我と偕にバラダイスに在るべし」との御言を承はることが出来た。(ルカ二三・四二、四三) 其の如く神は見るかげもなき私共、一人一人を憶えて、忘れ給はぬお方である。真に頼もしいこと、言はねばならぬ。(五一―五八)

二〇 神 交

(サムエル前書第十八章)

一 ダビデ、サウルに語ることを終へしとき、ヨナタンの心ダビデの心にむすびつきて、ヨナタンおのれの命のごとくダビデを愛せり。二 此日サウル、ダビデをかへて父の家にかへらしめず。三 ヨナタンお

のれの命のごとくダビデを愛せしかば、ヨナタンとダビデ契約をむすべり。四 ヨナタン己の衣たる明衣を脱ぎてダビデにあたふ。其戎衣および其刀も弓も帯もまたしかせり。五 ダビデは凡てサウルが遣は

すところに出でゆきて功をあらはしければ、サウルかれを兵隊の長となせり。しかしてダビデ民の心にかなひ、又サウルの僕の心にもかなふ。六 衆人かへりきたれる時、すなはちダビデ、ヘリシテ人をころして還れる時、婦女イスラエルの邑々よりいてきたり、七 婦人踊躍つゝ相こたへて歌ひけるは、サウルは千をうち殺し、ダビデは萬をうちころすと。ハ サウル甚だ怒り、この言をよるこばずしていひけるは、萬をダビデに歸し、千をわれに歸す。此上かれにあたふべき者は唯國のみと。九 サウルこの日より後ダビデを目がけたり。一〇 次の日神より出たる惡鬼サウルにのぞみて、サウル家のなかにて預言したりしかば、ダビデ故のごとく手をもつて琴をひけり。時にサウルの手に投槍ありければ、一一 サウル、我ダビデを壁に刺しとほさんといひて其投槍をさしあげしが、ダビデ二度身をかはしてサウルをさけたり。

一二 エホバ、サウルをはなれてダビデと共にいますにふりて、サウル彼をおそれたり。一三 是故にサウル彼を遠ざけて千夫長となせり。ダビデすなはち民のまへに出入す。一四 またダビデすべて其ゆきところにて功をあらはし、且エホバかれとともにいませり。一五 サウル、ダビデが大に功をあらはすをみてこれを恐れたり。一六 しかれどもイスラエルとエダの人はみなダビデを愛せり。彼が其前に出入するによりてなり。一七 サウル、ダビデにいひけるは、われわが長女メラブを汝に妻はさん。汝たゞわがために勇み、エホバの軍に戦ふべしと。其はサウルわが手にてかれを殺さて、ヘリシテ人の手にてころさんとおもひたればなり。一八 ダビデ、サウルにいひけるは、我は誰ぞ、わが命はなんぞ、わが父の家はイスラエルに於て何なる者ぞや。我いかでか王の婿となるべけん。一九 然るにサウルの女子メラブはダビデに嫁ぐべき時におよびて、メホラ人アデリエ

ルに妻はされたり。二〇サウルの女ミカル、ダビデを愛す。人之を王に告げければ、サウル其事を善しとせり。二一サウルいひけるは、我ミカルをかれにあたへて彼を謀る手段となし、メリシテ人の手にてかれを殺さんといひて、サウル、ダビデにいひけるは、汝今日ふたゞびわが婿となるべし。二三かくてサウル其僕に命じけるは、汝ら密にダビデにかたりて言へ、視よ、王汝を悦び、王の僕みな汝を愛す。されば汝王の婿となるべしと。二四サウルの僕此言をダビデの耳に語りしかば、ダビデいひけるは、王の婿となること汝らの目には易き事とみゆるや。且われは貧しく賤しき者なりと。二五サウルの僕サウルにつけて、ダビデ是の如くかたれりといへり。二六サウルいひけるは、なんぢらかくダビデにいへ、王は聘禮を望まず。たゞメリシテ人の陽皮一百をえて

王の仇をむくいんことを望むと。是はサウル、ダビデをメリシテ人の手に殞没れしめんとおもへるなり。二六サウルの僕此言をダビデに告げしかば、ダビデは王の婿となることを善しとせり。斯くて其時いまだ満たざるあひだに、二七ダビデ起ちて其從者とともにゆき、メリシテ人二百人をころして其陽皮をたづさへ來り、之を悉く王にさへげて王の婿とならんとす。サウル乃ち其女ミカルをダビデに妻はせたり。二八サウル見てエホバのダビデとともにいますを知りぬ。またサウルの女ミカルはダビデを愛せり。二九サウルさらにますくダビデを恐れ、サウル一生のあひだダビデの敵となれり。三〇爰にメリシテ人の諸伯攻め來りしが、ダビデかれらが攻めきたることに、サウルの諸の臣僕よりは多の功をたてしかば、其名はなほだ尊まる。

◎ヨナタンとダビデとの間は、之を神交と名づくべきものであつた。彼等の身分は甚

く相違し、年齢もヨナタンの方がダビデより、二十歳以上の長者であつたらしく、利害關係からいへば、ダビデが志を得ることは、ヨナタンの地位をあやふくする所以で、さうした兩人が親交を結ぶことは、一通ならぬ困難であつたに拘らず、ヨナタンはおのれの生命の如くダビデを愛し、之と契約を結び、之に明衣を脱いで着せ、又戎衣をも刀や弓と共に彼に與へて、その眞實なる友情を表した。箴言に、「朋友は何の時にも愛す。兄弟は危難の時のために生る。」(箴一七・一七)とあり。ヨナタンとダビデとの間は、永く友情の鑑として憶えらるべきものであつた。(一一五)

◎折柄イスラエル人の、ペリシテ人に對する祝勝の催があり、婦女たちは鼓と祝歌と磬とをもて、歌ひつ、舞ひつ、サウルを迎へた。その歌の詞に、「サウルは千をうち殺し、ダビデは萬をうちころす。」とあるのを聞いて、サウルは甚だしく怒つた。「萬をダビデに歸し、千をわれに歸す。此の上かれにあたふべき者は唯國のみ。」と。それから後、彼はダビデを敵視し、之を殺さんことを計るに至つたのである。後にソロモンが「娼嫉は骨の腐なり。」(箴一四・三〇)といふたのは、それである。拳闘家シーゼネス

を妬む者があり。彼が死んで後、建てられた記念の像を顛覆しようとして試みて、反つて自分がその下敷となつて、落命したといふ話がある。此の如く嫉妬は人を傷つくるよりも以上に、自らを傷つくること、最も多いものである。嫉妬は人の靈魂に致命傷を與へる。サウルのダビデに於ける、その最も著しき實例の一つである、といへよう。(六一九)

◎悪鬼がサウルに臨んで、サウルが預言したといふのは、所謂「虚言を言ふ靈」(列上二二・二三)に動かされて、物いうたのであらう。彼は投槍を執つて、その前に琴弾き居たるダビデを、二度までも、壁に刺し通さんと試みたが、その都度ダビデが身をかはした爲に、果さなかつた。ダビデが後に、「ねがはくは我を仇の手よりたすけ、われに追ひ迫る者より助け出し給へ。なんぢの僕のうへに聖顔をかがやかせ、なんぢの仁慈をもて我をすくひたまへ。エホバよ、われに愧を負はしめ給ふなかれ。そは我なんぢをよべばなり。」(詩三一・一五―一七)と歌うたのは、かうした場合の經驗を、思ひ出でてのことであつたらしい。實に神はその愛する僕を記憶し、「眼の珠のごとくにこれを護り給ふ」(申三二・一〇)お方である。(二〇―二二)

◎此の一章の中に、ダビデが「功をあらはし」(五、一四、一五)たとか、「功をたてし」(三〇)とかいふ語が、四度までも載せてある。彼がその戦に於て勝利を得、その爲す所が凡て成功したことをいふのである。しかもその理由は「エホバ彼と偕に在した爲であつた」と記してある。かうした事實は彼を敵視するサウルさへも、認めないわけには行かなかつた。これはその昔、ヨセフがエジプト人ポテバルの家に仕へた時、エホバが彼と偕に在した爲に、彼は榮ゆる者となり、その主人の家までも、彼の爲に多くの祝福をうけたといふのと、似た様な物語である。(創三九・二五)眞の成功は神の導にしたがうて、その御旨を行ふ間に見出される。足ることを知りて敬虔を守る者は、大なる利益を得るなり。(テモ前六・六)とパウロがいうたのは、それである。(一三―一六)

◎サウルはその二人の女を餌にしてダビデを陥れ、自分で手を下す代に、ペリシテ人の手を借りて、彼を亡き者にせんと試みた。最初には、長女メラブを彼に妻さんごとを約束しながら、それを破つてメホラ人アデリエルに嫁せしめ、今度はその次女ミ

カルをダビデに與へんことを約束し、その壻引出物として、ペリシテ人百人を殺して來ることを求めると、ダビデは往いて二百人のペリシテ人を殺して歸つた。そこでサウルも餘儀なくミカルをダビデに與へて、之と婚せしむることとなつたのである。この場合のサウルは、その口に蜜を含んで居つたが、その腹には劍をかくして居つた。(詩五五・二二、二三) いつも變らぬ慈愛の神を、力と頼む者のみ、よくこの陰險極りなき世の人を對手に、屈せず撓まず、所信を貫ぬくことが出来るのである。(二七、二八)

◎「サウル、さらにますますダビデを恐れ、サウル一生のあひだ、ダビデの敵となれり。」とあり。ダビデは圖らずも、サウルから敵として認められ、一生その生命をつけ狙はるゝこととなつた。けれども「神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。」(ロマ八・三一) とある如く、ダビデは神を味方とすることによつて、能くあらゆる迫害と壓迫と陰謀との間を突破して、最後の勝利を得るに至つたのである。(二九、三〇)

二二 危 難

(サムエル前書第十九章)

一 サウル其子ヨナタンおよび諸の臣僕に、ダビデをころさんとすることを語れり。ニされどサウルの子ヨナタン深くダビデを愛せしかば、ヨナタン、ダビデにつけていひけるは、わが父サウル汝をころさんことを求む。このゆゑに今我がはくは汝翌朝謹格んで潜みわけて身を隠せ。三我いてゆきて汝が在る野にてわが父の旁にたち、わが父とともに汝の事を談はん。しかしして我其事の如何なるを見て汝に告ぐべし。四ヨナタン其父サウルにむかひダビデを褒揚ていひけるは、願くは王、其僕ダビデにむかひて罪をかすなかれ。彼は汝に罪をかさず。またかれが汝になす行爲ははなはだ善し。五またかれは生命をかけてかのペリシテ人をころしたり。しかしして

エホバ、イスラエルの人々のために大なる救をほどこしたまふ。汝見てよるこべり。しかるに何ぞゆゑなくしてダビデをころし、無辜者の血をながして罪をかさんとするや。六サウル、ヨナタンの言を聞きいれ、サウル誓ひけるは、エホバはいく、われかならず彼をころさじ。セヨナタン、ダビデをよびて、ヨナタンその事をみなダビデにつげ、遂にダビデをサウルの許につれ來りければ、ダビデさきのごとくサウルの前に在る。八爰に再び戦争おこりぬ。ダビデすなはち出でてペリシテ人とたゝかひ、大に彼らを殺せしかば、彼ら其まへを逃げされり。九サウル手に投槍を執りて室に坐する時、エホバより出でたる惡鬼これにのりうつれり。其時ダビデ乃ち手をも

て琴を弾く。一〇サウル投槍をもてダビデを壁に刺貫さんとしたりしが、ダビデ、サウルのまへを避けければ投槍を壁に衝きたたり。ダビデ其夜逃げさりぬ。二サウル使者をダビデの家に遣はしてかれを守らしめ、朝におよびて彼をころさしめんとす。ダビデの妻ミカル、ダビデにつけていひけるは、若し今夜爾の命を援はずば、明朝汝は殺されんと。二ミカル即ち膺よりダビデを縋り下しければ往きて逃れされり。三斯てミカル像をとりて其牀に置き、山羊の毛の編物を其頭におき、衣服をもて之をおほへり。四サウル、ダビデを執ふる使者をつかはしければ、ミカルいふかれは疾ありと。五サウル使者をつかはしダビデを見せんとて言ひけるは、かれを牀のまま我にたづさへきたれ。我これをころさん。六使者いりて見たるに、牀には像ありて其頭に山羊の毛の編物ありき。七サウル、ミカルにいひけるは、なんぞかく我をあざむきてわが敵

を逃しやりしや。ミカル、サウルにこたへけるは、彼我にいへり。我をはなちてさらしめよ。然らずば我汝をころさんと。八ダビデにけさりてラマにゆき、サムエルの許にいたりてサウルがおのれになせしことを悉くつげたり。しかしてダビデとサムエルはゆきてナヨテにすめり。九サウルに告ぐる者ありていふ、視よ、ダビデはラマのナヨテに在ると。二〇サウル乃ちダビデを執ふる使者をつかはせしが、彼等預言者の一群の預言しをりてサムエルが其中の長となりて立てるを見るに及び、神の靈サウルの使者にのぞみて、彼等もまた預言せり。二一人々これを告げければ、サウル他の使者を遣しけるにかれらも亦預言せしかば、サウルまた三度使者を遣はしけるが、彼等はまた預言せり。三是においてサウルもまたラマにゆきけるが、セクの大井に至れる時、問ふていひけるは、サムエルとダビデは何處に在るや。答へていふ、ラマのナヨテに在る。三三サ

すて、同じサムエルのまへに預言し、其一日一夜裸體にて仆臥したり。是故に人々、サウルもまた預言者のうちにあるかといふ。

ウルかしこにゆきてラマのナヨテにいたりけるに、神の靈また彼にのぞみて、彼ラマのナヨテにいたるまで歩きつゝ預言せり。二四彼もまた其衣服をぬぎ

◎孝經に「父争子あれば、則ち身不義に陥らず」とあり。ヨナタンは深くダビデを愛するものから、その父サウルが、故なくして之を殺さんとするのを見るに忍びず、之を諫止せんことを試みた。それさへ父を伴うて野に出で、たゞ二人にて隔意なく語り、彼の心を懺さんことを勉めたのは、至つて善い。凡て立入つた問題を取扱ふには、人を避けて對手の人と只二人、互に赤心を吐露して語るに如くはない。後年耶蘇が「もし汝の兄弟、罪を犯さば、往きてたゞ彼とのみ、相對して諫めよ云々」(マター一八・一五)と教へられたのも、同じ理由によるものである。(一一三)

◎ヨナタンはその父サウルに向ひ、ダビデを褒めて、「彼は汝に罪をかさず、またかれが汝になす行爲は、はなはだ善し」というた。これはダビデが、その主君に對する忠義を語つたものである。又「かれは生命をかけて、かのペリシテ人をころしたり」

とは、彼が危険を冒して、巨人ゴリアテを仆したことを意味し、その愛國の精神を語るものである。此の如く彼は忠君の人であると共に、又天晴の愛國者であつた。而して神の恵は彼の上に在り。彼を用ひてイスラエル人の爲に、大なる救を施し給うたのである。それを故なくして害はんとするのは、神に對し、國民に對し、又彼に對して、なすべきことでない由を陳べて、ヨナタンは懇ろにその父を諫めた甲斐があり、少くとも其の當座は、彼も心を改めて、ダビデを殺すことを思ひ止つたのである。斯してヨナタンは、その愛する父と、愛する友との間を、首尾よく調停することが出来た。「幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱へられん。」(マタ五・九)と耶蘇は仰せられた。私共も亦、つとめて人と人との間を平和ならしむる爲に力を盡し、要らざる紛擾と争鬪とを、未然に救ひたさきものである。(四一七)

◎不幸にして、サウルの決心は永く續かなかつた。間もなく再び戦争が起り、ダビデは出でてペリシテ人と戦ひ、大なる勝利を得て歸り來ると、それが復しても、サウルの嫉妬心を挑發する機會となつた。ハンナ・モアの言に、「あゝ嫉妬よ、汝は最も醜さ地獄の悪靈である」とあり。サウルは復又、さうした地獄の悪靈に取憑かれたのである。ダビデは従前の如く、琴を手に執りて樂を奏し、サウルの病を慰めて居ると、彼は忽ちその手に持てる投槍を投じて、ダビデを壁に刺通さんと試みた。が、ダビデは身をかはして、此の度もあぶなく生命拾をしたのである。「わが凡ての骨は言はん、エホバよ、汝は苦しむ者を之にまさりて力強きものより、並苦しむもの貧しきものを掠めらばふ者より、助け出したまふ。誰かなんぢに比ぶべき者あらんと。心悪しき證人おこりて、わが知らざることを詰りとふ。彼等は惡をもてわが善にむくい、我がたましひを依杖なきものとせり。然れど我彼等が病みしときには龜服をつけ、糧をたちてわが靈魂をくるしめたり。わが祈はふところにかへれり。」(詩三五・一〇—一三)と、後に彼が歌うたのは、恐らく此うした出來事を、思ひ浮べてのことかと考へらるる。(八一〇)

◎ダビデはサウルの許から逃れて、その家に歸ると、サウルは早くも追手を遣して之を監視せしめ、翌朝引出して之を殺さんと計つたが、ダビデの妻ミカルが、彼を窓より吊り下し、あぶない所を逃れしめた。彼が後年その當時を回想しつゝ作つた歌に、

「わが神よ、ねがはくは我をわが仇よりたすけいだし、われを高處にちきて、我にさからひ起り立つものより脱かれしめ給へ。邪曲をおこなふものより我をたすけいだし、血をながす人より我をすくひたまへ。視よ、かれらは潜みかくれてわが靈魂をうかゞひ、猛者むれつどひて我をせむ。エホバよ、此はわれに愆あるにあらず、われに罪あるにあらず。」(詩五九・一三)とあり。さうした熱誠なる信仰の祈は、神に聽かれ、彼は危難を脱することを得たのである。(一一一七)

◎かくてダビデは一先ブラマに行き、サムエルの許に至りて、サウルが己になしたることを悉く告げ、その今後に對する忠告と指導とを求めた。サムエルは前にダビデに膏注いだ關係もあれば、ダビデが此の際彼の許に走つたのは、最も適當の處置であつた様に見える。此の如く今日の私共は又、せつばつまつた場合には、耶蘇の許に身を避けて、彼の嚮導と祐助とを求むべきものである。バプテスマのヨハネの弟子は、ヨハネを喪うて後、その死屍を葬るや否や、事の始末を「往きて耶蘇に告げ」(マタ一四・一二)たとある。其の如く私共は、又何彼につけて耶蘇の御前に出で、その御助を求む

ることが大事である。ヘブル書の記者が「我らは憐憫を受けんが爲、また機に合ふ助となる恵を得んがために、憚らずして恵の御座に来るべし。」(ヘブ四・一六)というたのは、その謂である。(一八)

◎サウルが三度まで、ダビデを捕ふる爲に遣した使者も、サウル自らも、サムエルとその預言者學校の所在地なる、ラマのナヨテに近づく、皆神の御靈に動かされて、急に預言しはじめたのである。人々が「サウルもまた預言者のうちにあるか」と訝つたのは、尤のことであつた。フィンニーが各地でリバイバル運動に従事するや、その地方を過ぐる者は、町界からほつとして、温い、神々しい、靈氣にうたれるのを覺えたといふことである。ウイリアム・ブリスが青年時代に、ゲーツヘッドに傳道中、その會堂に入り来る者は、皆聖靈に感じ、見違へる様な人物となつて出で来る故、人人はその會堂を「人間改造所」と綽名したといふことである。上よりの能力の大にあらはるゝ時、之と似た様な目醒しい感化が、人々に及んだ例は、決して少くない。私共は自分の屬する團體、自分の出入する教會に、かうした神の御力のあらはれを、拜

したきものである。(一九―二四)

二二 死を去る一步

(サムエル前書第二十章)

一 ダビデ、ラマのナヨテより逃げ來りて、ヨナタンにいひけるは、我何をなし、何のあしき事あり、汝の父のまへに何の罪を得てか、彼わが命を求むる。ニ ヨナタンかれにいひけるは、汝決めて殺さるゝこととあらじ。視よ、わが父は事の大なるも小なるも我につげずしてなすことなし。わが父なんぞこの事を我にかくさんや。この事しからず。三 ダビデまた誓ひていひけるは、汝の父必ずわが汝のまへに恩恵をうるを知る。是をもてかれ思へらく、恐らくはヨナタン悲むべければ、この事をかれにしらしむべからずと。しかれどもエホバはいはく、またなんぢの靈魂

はいく。われは死をさること只一步のみ。四 ヨナタン、ダビデにいひけるは、なんぢの心なになれがふか。我爾のために之をなさんと。五 ダビデ、ヨナタンにいひけるは、明日は月朔なれば、我王と共に食につかざるべからず。然れども我をゆるして去らしめ、三日の晩まで野に隠るゝことをえさしめよ。六 若汝の父まことに我をもとめなば、其時言へ、ダビデ切に其邑ベテレヘムにはせゆかんとを我に請へり。其は彼處に全家の歳祭あればなりと。七 彼もし善しといはば、僕やすからん。されど彼もし甚しく怒らば、彼の害をくはへんと決めしを知れ。八 汝で

ホバのまへに僕と契約を結びたれば、願くは僕に恩をほどこせ。然れど若我に惡しき事あらば、汝自ら我をころせ。何ぞ我を汝の父に引きゆくべけんや。九 ヨナタンいひけるは、斯る事かならず汝にあらざれ。我わが父の害を汝にくはへんと決むるをしらは、必ず之を汝につげん。一〇 ダビデ、ヨナタンにいひけるは、若し汝の父荒々しく汝にこたふる時は、誰か其事を我に告ぐべきや。二 ヨナタン、ダビデにいひけるは、來れ我ら野にいでゆかんと。俱に野にいでゆけり。二三 しかしてヨナタン、ダビデにいひけるは、イスラエルの神エホバよ、明日か明後日の今こる、我わが父を窺ひて、事のダビデのために善きを見ながら、人を汝に遣はして告げしらすば、エホバ、ヨナタンに斯なし、また重ねて斯くなしたまへ。二三 されど若しわが父汝に害を加へんと欲せば、我これを告げしらせて汝にがし、汝を安らかに去らしめん。願くはエホバわが父とともに坐せし

ごとく、汝とともに坐せ。十四 汝只わが生けるあひだエホバの恩を我に示して死なざらしむるのみならず、一五 エホバがダビデの敵を悉く地の表より絶ちさりたまふ時にも、また汝わが家を永く汝の恩になれしむるなかれ。一六 かくヨナタン、ダビデの家と契約をむすぶ。エホバ之に關きてダビデの敵を討し給へり。一七 しかしてヨナタンふたゝびダビデに誓はしむ。かれを愛すればなり。即ちおのれの生命を愛することく彼を愛せり。一八 またヨナタン、ダビデにいひけるは、明日は月朔なるが汝の座空しかるべければ、汝求めらるべし。一九 汝三日とゞまりて速に下り、嘗てかの事の日に隠れたるところに至りて、エセルの石の傍に居るべし。二〇 我的を射ることくして其石の側に三本の矢をはなたん。二一 しかしてゆきて矢をたづねよといひて、童子を遣はすべし。我もし故に童子に、視よ、矢は汝の此旁にあり。其を取れと曰はば、なんぢきたるべし。エ

ホバは生く、汝安くして何もなかるべければなり。

二二されど若し我少年に、視よ、矢は汝の彼旁にありといはゞ、汝さるべし。エホバ汝をさらしめたまふなり。二三汝と我とたたることについては、願はくはエホバ恒に汝と我との間にいませと。二四ダビデ即ち野にかくれぬ。倍月朔になりければ、王座して食に就く。二五即ち王は常のごとく壁によりて座を占む。ヨナタン立ちあがり、アネル、サウルの側に座す。ダビデの座は虚し。二六されど其日にはサウル何を曰はざりき。其は何事か彼におこりじならん。彼きよからず、定めて潔からずと思ひたればなり。二七明日すなはち月の二日におよびてダビデの座は虚し。サウル其子ヨナタンにいひけるは、何ゆゑにエサイの子は昨日も今日も食に來らざるや。二八ヨナタン、サウルにこたへけるは、ダビデ切にベテレヘムにゆかんことを我にこひて曰ひけるは、二九我がはくは我をゆるしてゆかしめよ。わ

が家邑にて祭をなすにより、わが兄我にきたること命ぜり。故に我もし汝のまへにめぐみを与えたるならば、わがはくは我をゆるして去らしめ、兄弟をみることを得さしめよと。是故にわがは王の席に來らざるなり。三〇サウル、ヨナタンにむかひて怒を發し、かれにいひけるは、汝は曲り且悖れる婦の子なり。我あに汝がエサイの子を簡みて汝の身をばづかしめ、また汝の母の膚を辱しむることを知らざらんや。三一エサイの子の此世にながらふるあひだは、汝と汝の位固くたつを得ず。是故に今人をつかはして彼をわが許に引ききたれ。彼は死ぬべき者なり。三二ヨナタン、父サウルに對ていひけるは、彼なによりて殺さるべきか。何をなしたるやと。三三こゝに於てサウル、ヨナタンを撃たんとて投槍をさしあげたり。ヨナタンすなはち其父のダビデを殺さんと決めしをしれり。三四かくてヨナタン烈しく怒りて席を立ち、月の二日には食をなさざりき。其は

其父のダビデをばづかしめしによりて、ダビデのためには憂へたればなり。三五翌朝ヨナタン一小童子を従がへ、ダビデと約せし時刻に野にいひてゆき、三六童子にいひけるは、走りて我が發つ矢をたづねよと。童子はしる時ヨナタン矢を彼のさきに發てり。三七童子がヨナタンの發ちたる矢のところをいたれる時、ヨナタン童子のうしろに呼ばはりていふ、矢は汝のさきにあるにあらずや。三八ヨナタンまた童子のうしろによはりていひけるは、速かにせよ。急げ止まるなかれと。ヨナタンの童子矢をひろひあつめて其主人のもとにかへる。三九されど童子は何を

も知らざりき。只ヨナタンとダビデ其事をしりたるのみ。四〇かくてヨナタン其武器を童子に授けていひけるは、往け、之を邑に携へよと。四一童子すなはち往けり。時にダビデ石の傍より立ちあがり、地にふして三たび拜せり。而してふたり互に接吻してたがひに哭く。ダビデ殊にはなはだし。四二ヨナタン、ダビデにいひけるは、安んじて往け。我ら二人ともにエホバの名に誓ひて、願くはエホバ恒に我と汝のあひだに坐し、我が子孫と汝の子孫のあひだに坐せといへりと。ダビデすなはちたちて去る。ヨナタン邑にいりぬ。

◎ダビデは、サウルの壓迫を受くること甚だしきを感じ、その身の上をヨナタンに訴へていうた。「われは死をさること只一步のみ」と。其の當時の彼は、何時殺さるゝか知れない危険に、日夜その身を曝して居つたのである。けれども復考へて見れば、私共は誰も皆、朝に夕をはかりかねる、はかない生命を有するものである。見方によつ

ては私共は誰も皆、死を去ること只一步ともいふべき、危険區域に立つものである。
 「明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の、吹かぬものかは。」と、昔の人が歌うたのは、
 眞に故あることである。それ故私共は、何時召されて神の御前に出ても、差支のない
 用意がなくてはならぬ。とはいへ、ダビデは、かくいうて後、尙四十七年間神の恵
 の下に地上に生存へた。此の如く神は又、私共をあらゆる災難と危険との間に保護
 し、案外長く生存へて、奉仕を續けしめ給ふこともある。白髪は榮の冠弁なり。義し
 き途にて之を見ん。(箴二六・三一) つまるところは、生くる死ぬるを神の御手に任せ、
 現在與へられた務を忠實に行うて、たゞ導のまにまに、世を過す他はないのである。
 (一一八)

◎ヨナタンは己の生命を愛する如く、ダビデを愛した。それ故彼はあらゆる限の力を盡
 して、ダビデを保護しようと試みたのである。彼は其のダビデの爲に計ることの多い
 だけ、それだけ自ら失ふことの大なるを、よく知つて居つた。他日ダビデが王位に登
 らうものなら、ヨナタンは少くとも、その王子たる位置を失ふべきは、明白なる事實

であつた。然しながら彼は、さうした利害得失を超越した愛を以て、ダビデに盡した
 のである。後にバプテスマのヨハネが、耶蘇の名聲の日増に高くなるに引換へ、自分
 は段々世から忘れられるのを見て、それを満足に覺え、「新婦をもつ者は新郎なり。新
 郎の友は、立ちて新郎の聲をきくとき、大に喜ぶ、この我が歡喜いま満ちたり。彼は
 必ず盛になり、我は衰ふべし。(ヨハ三・二九、三〇) といふたのが、何となく此の場合に於
 ける、ヨナタンのダビデに對する心事と、似た所がある様に覺えらるゝ。また貴き無
 私の生活を營んだものといはねばならぬ。(九一・一七)

◎ヨナタンはその父サウルが、ダビデに對して、尙も殺意を有するか否やを確めた上、
 それをダビデに告げ知らすべく、それにはダビデが隠れて見て居る前にて、三度矢を
 放ち、童子に命じて、「矢は汝の此旁にあり、其れを取れ」といへば、安全を意味し、
 又「矢は汝の彼旁にあり」といはゞ、危険を意味するものと、解すべきやう打合を
 し、やがて「汝と我とかたれることについては、願はくはエホバ恒に、汝と我との間
 にいませ」と申添へた。彼等の友情は彼等二人の誠から出たものであるのみならず、

その上に神が在した。いひかへれば、彼等は互に神に接近することにより、その心と心とが神のうちにとけて、一つとなつたのである。葡萄の枝が耶蘇てふ幹につらなることによつて、互に一つの木に属する如く、(ヨハ一五・五) 彼等は神に於て一つとなつたのである。古い諺に、「友を有する者は富む。」「友なくば人生なし。」などというてある。有りたいものは、眞實の友である。(一八一―二三)

◎毎月、月はじめには、宗教的の意義を帯びたる食卓を設け、王はその近侍の者と共に、之に列る習であつた。然るに朔日にも、二日にも、ダビデの座が虚しいのを見て、サウルはヨナタンに向ひ、「何ゆゑにエサイの子は、昨日も今日も食に來らざるや」と尋ねた。ヨナタンはダビデが、その兄からの招を受け、郷里ベレヘムに於ての祭に出るため、缺席を餘儀なくせられた由を、彼の爲に辯じた。この際ダビデの座が虚しかつた理由は、それでよかつたであらう。然しながら世には、理由にならない理由の爲に、その着くべき座席を虚しうする者が多くある。或人はその責任を厭うて、職分の座を虚しくするのである。或人は放肆遊惰にして家庭に落着かず、その家族として

の座を虚しうして出歩くのである。或人は又、不信仰、無頓着の爲に、神を拜むことを怠り、禮拜の座を虚しうするのである。けれども私共は銘々の爲に備へられたる座席に着き、その與へられたる職分を忠實に行ふ者とならねばならぬ。神は私共の歩むをも、又臥すをも、悉く探り出し、「わがもろもろの途を知り」(詩一三九・二) 給ふお方故、その眼からはなれて、勝手な眞似をするわけには行かないのである。(二四―三四)

◎ヨナタンは童子を従へ、ダビデと約束した時刻に、野に往いて矢を放ち、童子に之を拾はせつゝ、「矢は汝の彼旁にあるにあらずや」と呼はつた故、其處に隠れて居つたダビデは、それを聞いて、サウルの殺意が愈々確實であることを、知り得たのである。「されど童子は何をも知らざりき」とあり。この際童子は自分の意識しない所に、大切な奉仕をして居つたのである。即ち自分がどんな役目を勤めて居るかを心づかずして、大事な御用を勤めつゝあつたのである。それと似て、神は屢々私共の思も及ばぬ所に、私共を用ひて、その御用を勤めさせ給ふことがある。それ故ペテロの過ぎ行く所には、その影に庇はれた者の病が癒え(使五・一四、一五) パウロが用ひた手拭又は

前垂を、病める者に著くれば病は去り、悪霊は出でた、(使一九・一二)といふことである。神とその奉仕とに身を委ねた者には、無意識の間にも、多くの御業を行はせらるるものである。それ故私共はたゞ信じて、その御旨のまゝに、いそしむ他はないのである。(三五―三九)

◎ダビデは愈々危険の身に迫ることを覺え、石の傍より身を現し、地にふして三度ヨナタンを拜し、互に相抱いて泣いた。彼等はたゞ勇士が泣き得る如く泣いた。泣くか死ぬるか他に、途なき場合に於て」といふ詩は、此の場合に於ける彼等に、よく當嵌つたものといへよう。それにも拘らず、ヨナタンはダビデに向ひ「安んじて往け」というた。かうした危地に身を置く者に、尙「安んじて往け」といふことが出来たわけは、神が之を助け導き給ふと信ずるからであつた。後に耶蘇が「われ平安を汝らに遺す。わが平安を汝らに與ふ。わが與ふるは世の與ふる如くならず。汝ら心を騒がすな、また懼るな。」(ヨハ一四・二七)と宣うたのも、同じ神より來る平安を語るものである。さうしてこれのみ、何人も、何物も、又如何なる境遇事情も、かき擾すことの出来な

い、眞の平安である。(四〇―四二)

二二 伴 狂

(サムエル前書第二十一章)

一ダビデ、ノブにゆきて祭司アヒメレクにいたる。アヒメレク懼れてダビデを迎へ、これにいひけるは、汝なんぞ獨にして誰も汝ともならざるや。ニダビデ祭司アヒメレクにいふ、王我に一の事を命じて我にいふ、我が汝を遣はすところの事、およびわが汝に命じたる所については、何をも人にしらする勿れと。我某處に我少者を出しおけり。三いま何か汝の手にあるや。我手に五のパンか、或はなににてもある所を與へよ。祭司ダビデに對へていひけるは、常のパンはわが手になし。されど若し少者婦女をだに慎みてありしならば、聖きパンあるなりと。五ダ

ビデ祭司に對へていひけるは、實にわがいてしより此三日は婦女われらにちかつかず、且少者等の器は潔し。又パンは常の物のごとし。今日器に潔きパンあれば殊に然りと。祭司かれに聖きパンを與へたり。其はかしこに供前のパンの外はパン无かりければなり。即ち其パンは下る目に熱きパンをさしげんとて、之をエホバのまへより取りされるなり。七其日かしこにサウルの僕一人留められてエホバのまへにあり。其名をドエカといふ。エドミ人にしてサウルの牧者の長なり。ハダビデまたアヒメレクにいふ此に汝の手に槍か劍あらぬか。王の事急なるにより

て我は刀も武器も携へざりしと。九祭司いひけるは、汝がエラの谷にて殺したるペリシテ人ゴリアテの劍、布に裹みてエボデの後にあり。汝もし之をとらんとおもはば取れ。此にはほかの劍なし。ダビデいひけるは、それにまさるものなし。我にあたへよと。一〇ダビデ其日サウルをおそれて、立ちてガテの王アキシのところへ逃げゆきぬ。一ニアキシの臣僕アキシに曰ひけるは、此は其地の王ダビデにあらずや。人々舞踏のうちに此人のことを歌ひあひて、サウルは干をうちころし、ダビデは萬をうちころす

といひしにあらずや。一ニダビデこの言を心に藏め、深くガテの王アキシをおそれ、一三人々のまへにて伴りて其氣を變じ、執はれて狂人のさまをなし、門の扉に畫き、其涎沫を髭にながれくらしむ。一四アキシ僕にいひけるは、汝らの見ることく此人は狂人なり。何ぞかれを我にひききたるや。一五我なんぞ狂人を須ちひんや。汝ら此者を引き來りてわが前に狂はしめんとするや。此者なんぞ吾が家にいるべけんや。

◎ダビデは流寓漂泊の身となり、他に行く所がなくで、一時ノブに行き、祭司アヒメレクを訪ねることゝなつた。昔から神に忠なる僕が、身の落著所を得ないで、流浪した例は少からず。後にパウロが、「今の時にいたるまで、我らは飢ゑ、渴き、また裸となり、また打たれ、定まれる住家なく、手づから働きて勞し、罵らるゝときは祝し、責めらるゝときは忍び、譏らるゝときは勸をなせり。我らは今に至るまで世の塵芥の

ごとく、萬の物の垢のごとく爲られたり。」(コリ前四・一一―一三) といふた如きは、その一例に過ぎない。ヘブル書の記者は又、信仰の人を語りて、「或者は石にて撃たれ、試みられ、鐵鋸にて挽かれ、劍にて殺され、羊、山羊の皮を纏ひて經あるき、乏しくなり、惱され、苦しめられ、荒野と山と洞と地の穴とに徨へり。」(ヘブ一・三七、三八) といふて居る。かうした古人の受難を思へば、私共のみ安樂に日を過して居るのが、心苦しい。私共は鈍い心に鞭うつて、古人に恥ぢざるやう、愈々道のために勇猛精進すべき必要がある。(一)

◎聖書は正直な書物である。いくら信仰上の大立物といへども、その悪を行つた場合には、包まずそれを書記してある。こゝにダビデがアヒメレクに對して、虚言を語つたことを有の儘に載せた如きは、それである。後にダビデも、舌を以て犯せる罪を悔いたものと見え、「われ曩にいへり、われ舌をもて罪をかさざらんために、我が凡ての途をつゝしみ、悪しき者のわがまへに在るあひだは、わが口に銜をかけんと。」(詩三九・一) といふた様なことがある。神を信ずる者は何處までも、正直一途に物いふべく、

決して二枚舌を用ひることを許されないのである。そのことに就いて、耶蘇は明かに教へて、「われ汝らに告ぐ、人の語る凡ての虚しき言は、審判の日に糺されるべし。それは汝の言によりて義とせられ、汝の言によりて罪せらるゝなり。」(マター二・三六、三七)と仰せられたのである。(二、三)

◎アヒメレクは、ダビデに與ふべき常のパンがなかつた爲に、供前のパンのお下りを與へることゝなつた。耶蘇は後に、その弟子が安息日に麥の穂を摘み、之を食うたのを、咎むる者に答へて、「ダビデが、その伴へる人々とともに飢ゑしとき、爲し、事を讀まぬか。即ち神の家に入りて、祭司のほかは、己もその伴へる人々も食ふまじき、供のパンを食へり。』われ憐憫を好みて、犠牲を好まず』とは如何なる意かを、汝ら知りたらんには、罪なき者を罪せざりしならん。」(マター二・三、四、七)と教へられた。犠牲よりも勝つて貴きものは憐憫である。儀式禮典は末である。眞の宗教は愛に生きて、愛を行ふ間に存する。愛は隣を害はず、この故に愛は律法の完全なり。」(ローマ一・三・一〇)とは又、同じ道理を教ゆるものである。(四一六)

◎こゝにダビデが「王の事急なり」というたのは、神の御命令は速に行ふべし、といふ意味の諺として、後世に傳へらるゝことゝなつた。私共は凡て何によらず、神から命ぜられたことは、速に之を行はねばならぬ。マルコ傳福音書には、その第一章だけでも「直ちに」といふ語を七回まで用ひてあり。神の御業は油斷なく、即時斷行せらるべきことを暗示して居る。概していへば、事に臨んで逡巡躊躇するのは、眞劍味が足りないからである。ペリクスはパウロが、正義と節制と來らんとする審判とについて論ずるを聞き、「今は去れ、よき機を得てまた招かん。」(使二四・二五)というたが、所謂「よき機」は、遂に彼に來らなかつたのである。王の事は急を要する。因循姑息は神に従ふ者の態度でない、思はねばならぬ。(七、八)

◎ダビデが劍を求むるに對し、アヒメレクは「汝がエラの谷にて殺したるペリシテ人ゴリアテの劍、布に裹みてエポデの後にあり。汝もし之をとらんとおもはゞ、取れ。此にはほかの劍なし」と答へた。そこでダビデは、「それにまさるものなし。我にあたへよ」というて、之を取つたとある。今基督の軍人にとつて必携の武器は、「御靈の

劍、すなはち神の言（エペ六・一七）である。世界の何處を尋ねても、それに勝る武器は他にないのである。これは所謂殺人劍ではなくて、活人劍である。人を救ふ爲に用ゆべき劍である。なんぢの聖言はわれを活かし、がゆゑに、今もなほわが艱難のときの安慰なり。（詩一九・五〇）などであるのは、その爲である。私共は豫々この御靈の劍なる聖書を學び、その御言の使途をわきまへて、自らを守り、又他人を救ふ爲に戦うて居るやうでありたい。（九）

◎ダビデは全く身の置所がなくなり、一時難を避けて、ガテの王アキシの許に逃げゆいた。このガテはその昔、ゴリアテを出した所である。人々がそれと知つて種々取沙汰をする様子を見て、ダビデは恐れ、伴つて狂人の真似をなし、門の扉に落書をなし、涎沫に鬚をよごして徘徊し、漸く危難を免れたといふことである。彼がちきその後、作つた詩に、「この苦しむもの叫びたれば。エホバこれを聴き、そのすべての患難よりすくひいだしたまへり。エホバの使者はエホバをおそるゝ者のまはりに、營をつらねてこれを援く。（詩三四・六、七）」又「エホバは、心のいたみかなしめる者に近く在して、

たましひの悔い頼れたるものを救ひたまふ。たゞしきものは患難おほし、されどエホバはみなその中よりたすけいだしたまふ。（詩三四・一八、一九）等あるのを見れば、彼がその場合に於ける信仰生活の様子も、之を察するに難くない。彼はパウロと同じ様に、神によつて「弱き時に強かつた」（コリ後二・一〇）のである。（二二・一五）

二四 無辜の血

（サムエル前書第二十二章）

一是故にダビデ其處をいでたちて、アドラムの洞穴にのがる。其兄弟および父の家みな聞きおよびて彼處にくだり、彼の許にいたる。ニまた惱める人、負債者、心に嫌ぬ者、皆かれの許にあつまりて、彼の長となれり。彼とともにある者はおよそ四百人なり。ミダビデ其處よりモアアのミツバにいたり、モアアの王にいひけるは、神の我をいかにしたま

ふかを知るまで、れがはくはわが父母をして出て汝らと共にをらしめよと。四つひに彼らをモアアの王のまへにつれきたる。かれらはダビデが要害に在る間、王とともにありき。五 預言者がデ、ダビデにいひけるは、要害に住まるな。ゆきてユダの地にいたれと。ダビデゆきてハレテの叢林にいたる。六 爰にサウル、ダビデ及びかれともなる人々の見露

されしを聞けり。時にサウルはギベアにあり。手に槍を執りて岡鬮の柳の樹の下に在り、臣僕ども皆其傍にたてり。セサウル側なたてる僕にいひけるは、汝らベニヤミン人聞けよ、エサイの子汝らおのおのに田と葡萄園をあたへ、汝らおの／＼を千夫長百夫長となすことあらんや。汝ら皆我に敵して謀り、一人もわが子のエサイの子と契約をむすびしを我につげしらす者なし。また汝ら一人もわがために憂へず、わが子の今日の如くわが僕をばげまして、道に伏して我をおそはしめんとするを、我につげしらす者なし。九時にエドミ人ドエク、サウルの僕の中にたち居りしが、答へていひけるは、我エサイの子のノブにゆきて、アヒトプの子アヒメレクにいたるを見しが、一〇アヒメレクかれのためにエホバに問ひ、またかれに食物をあたへ、ペリシテ人ゴリアテの劍をあたへたりと。一二王すたはち人をつかはしてアヒトプの子、祭司アヒメレクおよびその

父の家すなはちノアの祭司たる人々を召したれば、みな王の許にきたる。一三サウルいひけるは、汝アヒトプの子聽けよ。答へけるは、主よ、我ここにあり。一四サウルかれにいふ、汝なんぞエサイの子とともに我に敵して謀り、汝かれにパンと劍をあたへ、彼が爲に神に問ひ、彼をして今日のごとく道に伏して我をおそはしめんとするや。一五アヒメレク、王にこたへていひけるは、汝の臣僕のうち誰かダビデのごとく忠義なる。彼は王の婿にして親しく汝に見ゆるもの、汝の家に尊まるゝ者にあらずや。一六我其時かれのために神に問ふことを始めしや。決めてしからず。ねがはくは王、僕およびわが父の全家に何を歸するなかれ。其は僕此事については多少をいはず、何をもしらざればなり。一七王いひけるは、アヒメレク汝必ず死ぬべし。汝の父の全家もしかりと。一八王旁にたてる前驅の人々にいひけるは、身をひるがへしてエホバの祭司を殺せ。かれらも

ビデと力を合するが故、また彼らダビデの逃げたるをわしりて我に告げざりし故なりと。然れど王の僕手なひだしてエホバの祭司を撃つことを好まざれば、一八王ドエクにいふ、汝身をひるがへして祭司をころせと。エドミ人ドエク乃ち身をひるがへして祭司をうち、其日布のエホデを衣たる者八十五人を殺せり。一九かれまた刃を以て祭司の邑ノブを撃ち、刃をもて男女童稚嬰孩牛驢馬羊を殺せり。二〇アヒトプの子アヒメレクの一人の子アピヤタルとなづくる

者、逃れてダビデにはしりしたがふ。二一アピヤタル、サウルがエホバの祭司を殺したることをダビデに告げしかば、二二ダビデ、アピヤタルにいふ、かの日エドミ人ドエク彼處に在りしかば、我かれが必ずサウルにつげんことを知れり。我汝の父の家の人の生命を喪へる源由となれり。二三汝我とともに居れ。懼るゝなかれ。わが生命を求むる者汝の生命をも求むるなり。汝我とともにあらば安全なるべし。

◎「われ聲をいだしてエホバによばはり、聲をいだしてエホバにこひもとむ。我はその聖前にわが歎息をそゝぎいだし、そのみまへにわが患難をあらはす云々」(詩一四二)
 一、二とは、これダビデが、アドラムの洞穴に逃れた時の詩ではないか。彼がその洞穴に住んで居る間に、彼の家族が彼に頼り來つたと共に、又「惱める人、負債者、心に嫌ぬ者」等、續々彼の許に集り來り、その數凡そ四百人に達した。彼はさうした落伍者、不平不満の輩を追々感化して、他日何かの場合に役立つ人間とならしめた様

に見える。第二世紀の頃、セルサスなる者があり。書を著して基督教を非難し、「これは懶惰者、酒飲、又墮落した者の寄合である」といふと、オリゲンはそれに答へて、「然り、私共の仲間には、さうした人間が少くない。然しながら今ではその懶惰者が稼人となり、酒飲が酒嫌となり、墮落した人が堅氣な人物と變つて居る。」といふところがあつた。此の如く基督の宗教は、人を新に生れしめるものである。罪人を改造して、聖徒とならしむるものである。それ故基督の宗教は、萬民に希望を興ふる唯一の宗教である。(一、二)

◎ダビデの曾祖母ルツが、(ルツ四・二、二二)モアブ人であつた關係もあること故、ダビデはモアブの王に請うて、「神の我をいかになしたまふかを知るまで、ねがはくはわが父母をして、出でて汝らと共にをらしめよ」と依頼した。これはその兩親を安全地帯におきて、その間に一身の處置をなさんことを、望んだからであつた。後に耶蘇はその十字架の上より、生母マリヤの身の上を、愛弟子ヨハネに托し給うた如き例もあり。(ヨハ一・九・二六、二七)人はその家族近親に對して、負へる務あることを知らねばならぬ。

使徒パウロは、「人もし其の親族、殊に己が家族を顧みずば、信仰を棄てたる者にて、不信者よりも更に悪しきなり。」(テモ前五・八)と戒めて居る。(三一五)

◎暴君の下には佞臣が集り來るものである。サウルは氣が狂亂し、今にもダビデが彼を襲ふものかの如くいひなして、大騒をすると、前にダビデが祭司アヒメレクを訪ねた時、その場に居合せて、様子を知つたエドミ人ドエグなる者が、(サム前二一・七)差出て有ること無いことを語り、アヒメレクを中傷した。「猛き者よ、なんぢ何なれば悪しき企圖をもて自らほこるや、神のあはれみは恒にたえざるなり。なんぢの舌は悪しきことをはかり、利き剃刀のごとくいつはりをおこなふ。なんぢは善よりも悪をこのみ、正義をいふよりも虚偽をいふをこのむ。」(詩五二・一―三)とは、その狀であつた。諺に、「同惡相助く」といひ、又「水は濕に流れ、火は燥に就く」などいふ如く、人が惡に傾く時には、必ず來つて、その惡を助け長ずる者があるから、油斷してはならないのである。(六一一〇)

◎祭司アヒメレクは王の許に召喚せられ、其の何處までも善意を以て、王の婿、又其

の忠義なる僕ダビデに奉仕した迄にて、更に他意なきことを懇ろに辯明すれども、赦されず、遂に罪でもない罪のために、殺さるゝこととなつた。如何にも悲惨なこといはねばならぬ。然しながら、世に若し罪ならぬ罪の爲に、憂目に會うた者があるとすれば、基督はその隨一であつた。彼はくるしめらるれども、みづから謙りて口をひらかず、屠場にひかるゝ羔羊のごとく、毛をきる者のまへにもだす羊の如くして、その口をひらかざりき。かれは虐待と審判とによりて取去られたり。その代の人のうち、誰か彼が活けるものゝ地より絶たれしことを思ひたりしや。彼はわが民のとなりの爲にうたれしなり。(イザ五三・七、八)とあり。彼を敵の手に付したユダさへも、あとではその爲した所を悔い、「われ罪なきの血を賣りて罪を犯したり。(マタ二七・四)と、悲歎の涙にくれたのである。さればこそ私共は、「その血に頼りて贖罪、すなはち罪の赦」(エヘ一・七)を得るのである。勿體ないことではないか。(二一・一五)

◎「慾孕みて罪を生み、罪成りて死を生む。(ヤコ一・一五)と、ヤコブはいうて居る。此の如く罪は段々深入をするものである。サウルはダビデに對する嫉妬から、やがて彼に對する敵意となり、迫害となり、遂にはエドミ人ドエグの手を借りて、祭司アヒメレクをうち、別に布のエポデを衣たる者八十五人を殺し、又刃を以て祭司の邑ノブを撃ち、男、女、童稚、嬰孩、牛、驢馬、羊を、塵殺にすることとなつた。罪惡は珠數の玉の落ちると同じく、一つ落ち出すと、あとからもあとからも續いて落ちて、停止する所を知らないのが、其の習である。罪惡は一旦之を犯しはじめると、遂に止まる所を知らないものであるから、之をその最初の間に克服する工夫が、肝要である。(一六・一九)

◎アヒメレクの子アビヤタルは、只一人難を逃れて、ダビデの許にかけこむと、ダビデは甚く此の度のことについての責任を感じ、彼に向ひて「我、汝の父の家の人々の生命を喪へる源由となれり。汝我とともに居れ、懼るなかれ。わが生命を求むる者、汝の生命をも求むるなり。汝我とともにあらば安全なるべし」というた。呉の人と越の人とは、平生互に相惡む仲ではあれど、その舟を同じうして濟る時、風に遭ふと、左右の手の如く互に相救ふ、といふことがある。ましてダビデはその曾て世話になつ

たアヒメレクの子と、同じ運命の舟に乗つて、難に遭うたのである。その上最近には、又その世話になつた恩人とその家族とが、自分故に生命を落すに至つたことを思へば、如何にしてもアビヤタルを保護せんと決心したのは、さもあるべきこと、思はるし。「なんぢ死地に曳かれゆく者を拯へ、滅亡によるめきゆく者を救はざる勿れ。汝われら之を知らずといふとも、心をはかる者これを曉らざらんや。汝の靈魂を守る者これを知らざらんや。彼はおのの行為によりて人に報ゆべし。」(箴二四・二一、二二)とあり。此の如く今日の私共も亦、自らを救ふだけにて満足することなく、進んで周囲の人々を、同じ救に入らしむべき責任を感じ、その爲に最善の努力を試みねばならぬ。(二〇一、二〇二)

二五の がれ 岩

(サムエル前書第二十三章)

一人々々ダビデにつけていひけるは、視よ、メリシテ

人ケイラを攻め、穀場を掠むと。ニダビデ、エホバ

に問ふていひけるは、我ゆきて此のメリシテ人を撃つべきかと。エホバ、ダビデにいひ給ひけるは、往きてメリシテ人をうちてケイラを救へ。ニダビデの従者かれにいひけるは、視よ、我ら此にエダにあるすら尙ほおそる。況んやケイラにゆきてメリシテ人の軍にあたるをやと。四ダビデふたゝびエホバに問ひけるに、エホバ答へていひたまひけるは、起ちてケイラにくだれ。我メリシテ人を汝の手にわたすべし。五ダビデとその従者ケイラにゆきてメリシテ人とたゝかひ、彼らの家畜を奪ひとり、大にかれららうちこるせり。かくダビデ、ケイラの居民をすくふ。六アヒメレクの子アビヤタル、ケイラにのがれてダビデに至れる時、其手にエホデを執りてくだれり。七爰にダビデのケイラにいたれる事サウルに聞えければ、サウルいふ、神かれを我手にわたしたまへり。其はかれ門あり、關ある邑にいりたれば、閉ちこめらるればなり。ハサウルすなはち民をことごとく軍

によびあつめてケイラにくだりて、ダビデと其従者を圍まんとす。九ダビデはサウルのおのれを害せんと謀るを知りて、祭司アビヤタルにいひけるは、エホデを持ちきたれと。一〇しかしてダビデいひけるは、イスラエルの神エホバよ、僕たしかにサウルがケイラにきたりてわがために此邑をほろぼさんと求むるを聞けり。一ケイラの人々我をかれの手にわたすならんか。僕のきけることくサウル下るならんか。イスラエルの神エホバよ、請ふ僕につけたまへと。エホバいひたまひけるは、彼下るべしと。二ダビデいひけるは、ケイラの人々われとわが従者をサウルの手にわたすならんか。エホバいひたまひけるは、彼らわたすべし。三是においてダビデと其六百人はかりの従者起ちてケイラをいで、其ゆきうる所にゆけり。ダビデのケイラをにげ離れしことサウルに聞えければ、サウルいづることを止めたり。四ダビデは曠野にをり、要害の地にをり、またジブの野

にある山に居る。サウル恒にかれを尋ねたれども、神かれを其手にわたしたまはざりき。一五ダビデ、サウルがおのれの生命を求めんために出たるを見る。時にダビデはジフの野の叢林に在りしが、一六サウルの子ヨナタン、たちて叢林にいりてダビデにいたり、神によりて其力を強うせしめたり。一七即ちヨナタンかれにいひけるは、懼るゝ勿れ、わが父サウルの手汝にとゞることあらじ。汝はイスラエルの王とならん。我は汝の次なるべし。此事はわが父サウルもしれりと。一八かくて彼ら二人エホバのまへに契約をむすび、ダビデは叢林にとゞまり、ヨナタンは其家にかへり。一九時にジフ人ギベアにのぼり、サウルの許にいたりていひけるは、ダビデは曠野の南にあるバキラの山の叢林の中なる要害に隠れて、我らとともに在るにあらざや。二〇今王汝のくだらんとする望のごとく下りたまへ。我らはかれを王の手にわたさんと。二一サウルいひけるは、汝ら我を

急ぎ來り給へと。二八故にサウル、ダビデを追ふこととを止めて、かへり往きてペリシテ人にあたる。是をもて人々其ところをセラマレコテ(逃岩)となづ

◎ダビデはサウルから狙はれて、自分の身さへ危い場合ではあれど、ペリシテ人がケイラを攻め、穀場を掠むることを聞き、捨ておき難きことに思ひ、「我ゆきて、是のペリシテ人を撃つべきか」と、お尋ねすると、神は彼に向ひ、「往きてペリシテ人をうちて、ケイラを救へ」と仰せられた。その部下の者の中に、之を氣遣ふ者があるのを見て、再びそのことに就いて神の御旨を伺ふと、神は再び彼に答へて、「起ちてケイラにくだれ。我ペリシテ人を汝の手にわたすべし」とのことであつた。そこで彼はケイラに往きてペリシテ人と戦ひ、大に之に勝つて、ケイラの人民を救うたのである。自分の足許さへあふない時に、他人の爲に盡すといふのは、矛盾したことゝの如く見えて、決して然らず。反つて他人の爲に心配することによつて、自らの地位を鞏固にする場合が多くある。西洋諸國にて、「教會が不振に陥つた時には、外國傳道を獎勵するがよ

一七四
あはれめば、願くは汝等エホバより福祉をえよ。二三請ふゆきて尙ほ心を用ひ、彼の踪跡ある處と誰が彼を見たるかを見きはめよ。其は人我にかれが甚だ機巧く事を爲すを告げなれば也。二三されば汝ら彼が隠るゝ逃躲處を皆たしかに見きはめて、再び我にきたれ。我汝らとともにゆかん。彼もし其地にあらば、我ユダの郡中をあまねく尋ねて彼を獲んと。二四かれらたちてサウルに先ちてジフにゆけり。ダビデと其従者は曠野の南のアラバにあるマオンの野に在る。二五斯てサウルと其従者ゆきて彼を尋ね。人々これをダビデに告げければ、ダビデ巖を下りてマオンの野に在る。サウル之を聞きてマオンの野に至りてダビデを追ふ。二六サウルは山の此旁に行き、ダビデと其従者は山の彼旁に行く。ダビデは周章てサウルの前を避けんとし、サウルと其従者はダビデと其従者を圍んで之をとらへんとす。二七時に使者サウルに來りて言ひけるは、ペリシテ人國をなす。

く。二九ダビデ其處よりのぼりてエンゲデの要害に在る。